

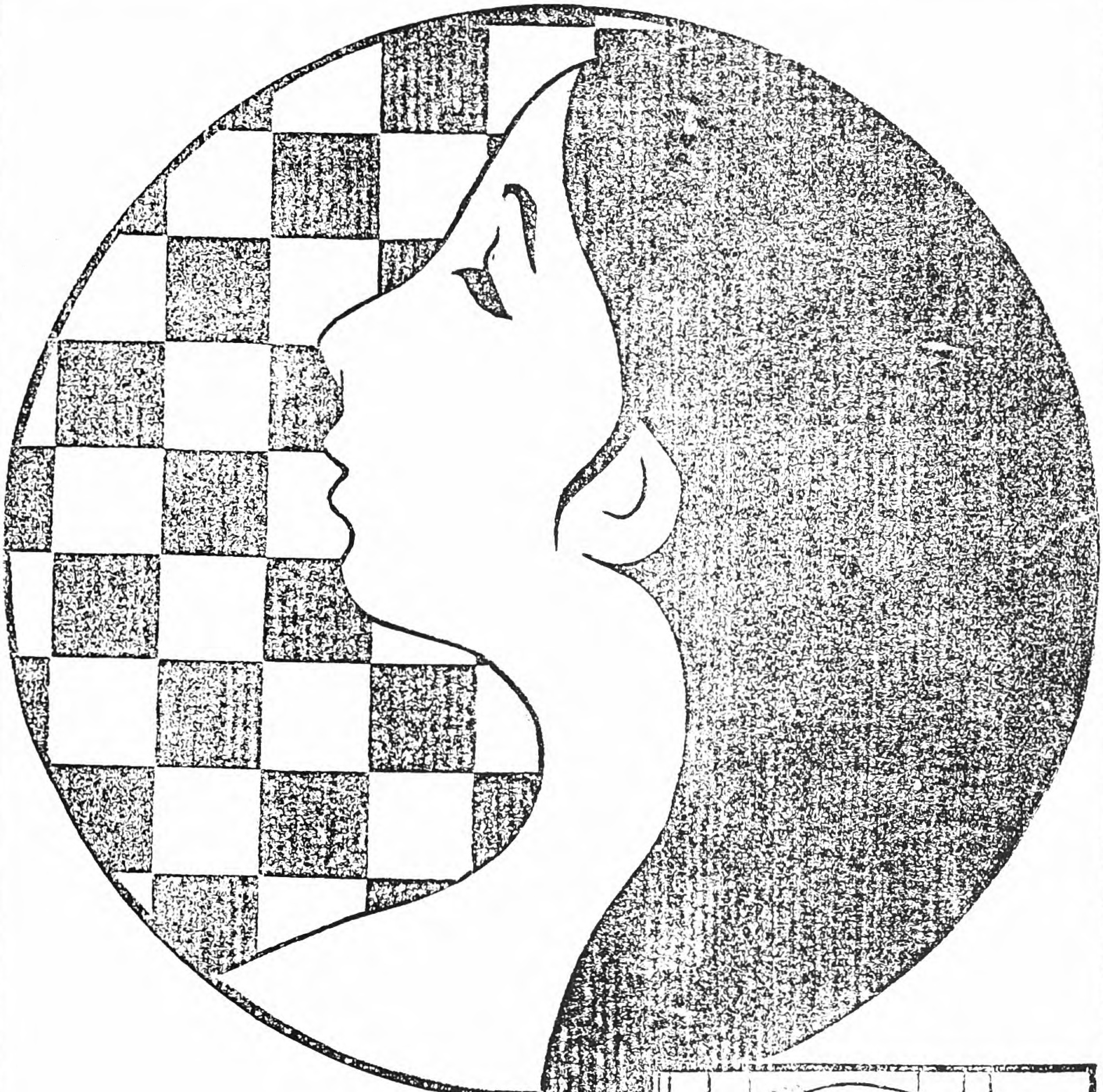
女子文壇

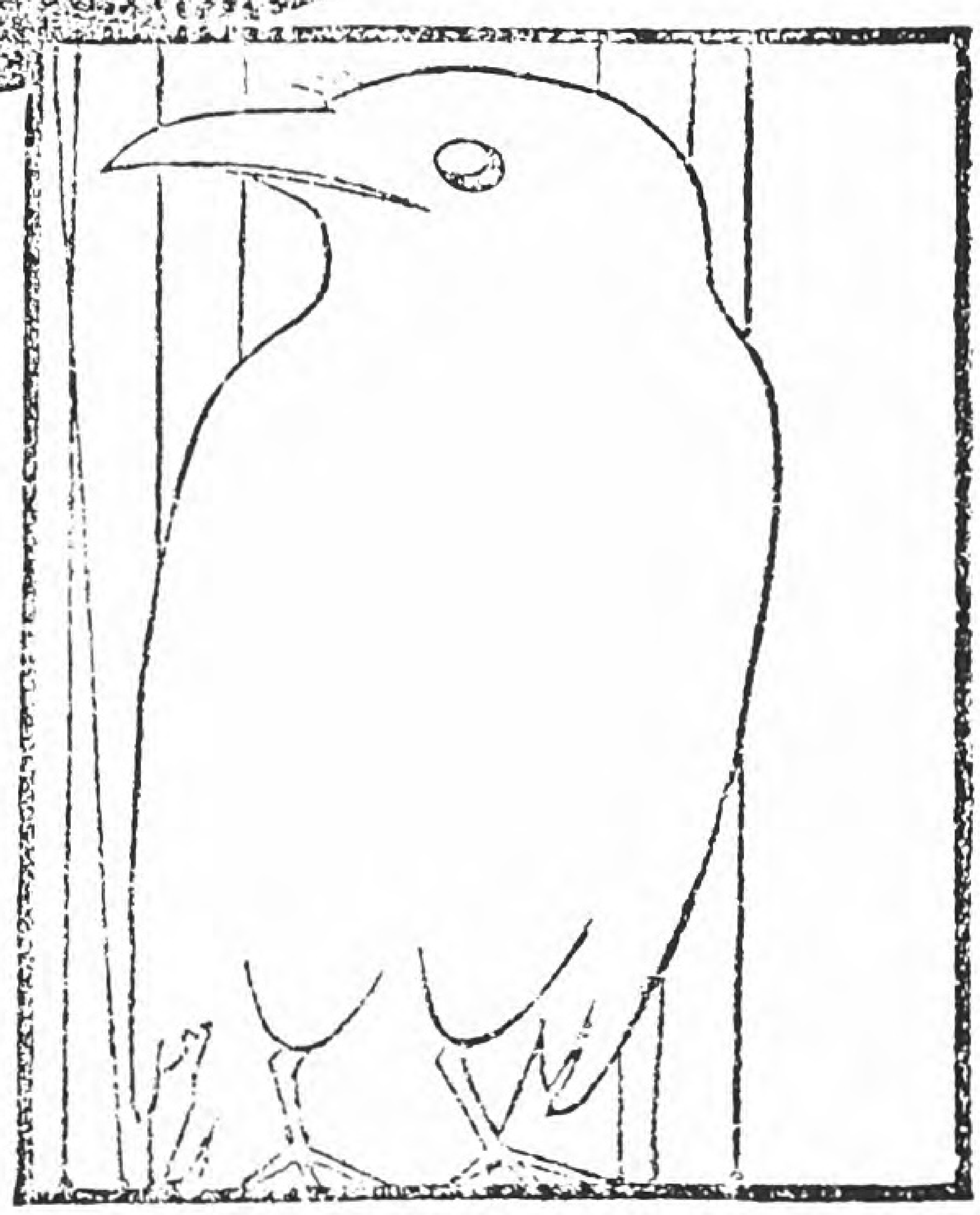
七月一日發行

第七年第八號

東京 女子文壇社發行

明治卅八年十二月十九日第三種郵便物認可





女子文壇七月號（第七年第八號）目次

口繪

本欄


夢路

以下九種の書は百年後でも三重縣桑名矢田積弘報館で販賣す

萬物製法秘術寶典

代價郵税共廿二錢 郵便切手又は振替貯金なれば廿四錢

目録、輕便電氣燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●樟腦玉●齒磨●石鹸●洗粉●白粉●香水●紙石盤●のみ取粉●萬年草紙●メッキ法●朱肉●空氣枕●萬年手帳●墨●朱墨●鼠取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●甘露水●果實酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●鑵詰●ラムネ●リモナーデー●ジンジャエール●蜜柑水●甘酒●味噌●醤油●水彩繪具等の製法其外大發明器械いらず**早取寫眞術**(器械不用)**早印刷法**等が**百**餘種記載してあるが皆あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何枚にても鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は弊店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても**返金**す、又早印刷法は道具を使はず繪でも文字でも大小の論なく速座に數百枚印刷する事が出來るから名刺ハガキ書籍廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても慥に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵税共廿二錢郵券代用又は振替は廿四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、目録鬼火の妖術●口中より火焔を吐く術●不思議な水の魔術●月世界の術●針を呑む法●皿廻しの術●かるた逆立術●銀貨をふやす術●水上に文字を書く術●三尺の棒を丸呑みにする法●豆腐の上にて獨樂を廻す術●縮に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上に木製船を自由に動かす術●黒いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黒水を清水にする法●水を燃す法●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隱す術●水中又は机上にて鶏卵を踊らせる法(附錄)**驚神的大魔術**其他尚面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歳迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齢を當る法●顔を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髪の毛を多くする法●毛を生す法●書き損ひの字を拔く法●物覺惡き人を忘れさせぬ法●習字速成法●**催眠術**●歌がるた八々に必ず負けぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘種集めたる書物は廿三錢(郵券代用は廿五錢)

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵税共二十三錢郵便切手は二十五錢

目録天に文字を顯す術●白晝を闇黒にする術●夢に天國に遊ぶ術●百鬼夜行術●風を吹す術●吹き居る風を止める術●妖光幻術●水の流を止める術●天空に怪人の姿を顯す術●人を空中に眠す術●十字架殺人術●忍術●仙術●**切支丹バテレン**の妖術●モルモット術●金錢自由吸集の妖術●縄拔の妖術●火渡の奇術●武道竹折術●**隱身術**●人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歳の小兒を重くして上げられぬ術●棒を掌につけ押しても取れぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●讀心術●三人にて持ち居る椅子を指二本にて取る術●不動金縛の妖術●二本の指にて大人を自由に揚げる奇術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如し そして何人も實行し得る獨習書なれば早く求めて朋人を**驚**かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跣足で逃げ出す術ばかり。

禮法及婚姻法

日本の禮法は最大洩らさず婚姻部には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●嫁の荷物を送る事●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大洩らさず附錄には婚姻出産死亡届其他澤山。郵税共廿三錢

男女無上の快樂

本書の内容は秘密に付掲載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。(他人に見えぬやう密封にて送ります)定價郵税共二十四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない郵税共廿二錢

道具不要經便 食パン和洋菓子製造書

有り合せの道具で米より費用少くて美味で一度に廿日分も拵へて置ける食パンや洋菓子が手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵税共廿四錢

簡易素人治療法

感冒●胃病●痔●淋病●子宮病●眼病●寢小便●男女陰部諸病●頭痛●凍腫●肺病●ニキビ●ワキガ●サメハダ●耳ダレ●齒痛等の療法●毛を生す法●白髮を黒くする法●其他萬病を高價な醫藥でなく手輕に治療し得る書は廿二錢郵券代用は廿四錢

●振替貯金口座番號東京壹六九貳八番　三重縣桑名矢田積 **弘報館**

◎割引上段下段ヨリドリ五冊一圓、十冊一圓七十錢、郵券代用一割増

氣のきいた旅行用具

山愈々清く、海益々綠りなる今日此の頃海水浴に溫泉に暑を避けさせ給ふ御方の日に〳〵多きを加ふるなるべし御旅行の御支度は如何に。
三越には御旅行に必要なる品を殘らず陳列仕り居候間、一度三越へ御出で被下候はゞすべての品々は直ちに御滿足に御用相辨じ申すべく、是非とも御光來の程奉願上候。

東京駿河町

三越呉服店

公爵一條實輝氏夫人悅子



公爵島津忠重氏夫人伊楚子



少女



紙數百餘頁
定價一冊　金拾錢　送料壹錢
半年　送料とも　六十三錢
一年　送料とも　一圓廿錢
口畫挿畫美

一日發刊　七月號　三巻七號要目

天下一品　好評

◀實質御覧愛讀を乞ふ▶

（出版元に一號より取揃あります）

發行所
東京市京橋區大鋸町
振替口座壹七貳九番
女子文壇社

△取次販賣所は全國到る處雜誌書店

見本 詳細會則 進呈

短時日にて頗る能書家となる一大新案法

如何なる性來惡筆の方にても本會の特許速成法に依れば直ちに上達すること五拾有餘萬の卒業生の成績に依て明かに證明されて居ます、ゆえに速に入會されて頗る能書家となられるべし、今は習字の最好期節であります



◎女子部◎男子部◎小學部

書者 小野鵞堂先生

書者 稻川雲谿先生

書者 玉木愛石先生

實用假名(文字)六ケ月卒業

專賣特許 第壹七九一〇號

專賣特許 第九五五五九號

實用新案特許 第四八七三號

東京本郷區大學正門前

電下三二一〇番。三〇一二番

帝國習字速成學會

全百冊

婦人文庫

毎月數冊刊行 三六判 三百頁餘 天金付 頗美裝訂 各冊金參拾五錢 送料四錢

本文庫は女子教育大家の推奬を乞ふて毎月數冊刊行す

新刊書目

◎花月草紙

◎明倫歌集

◎折たく柴の記

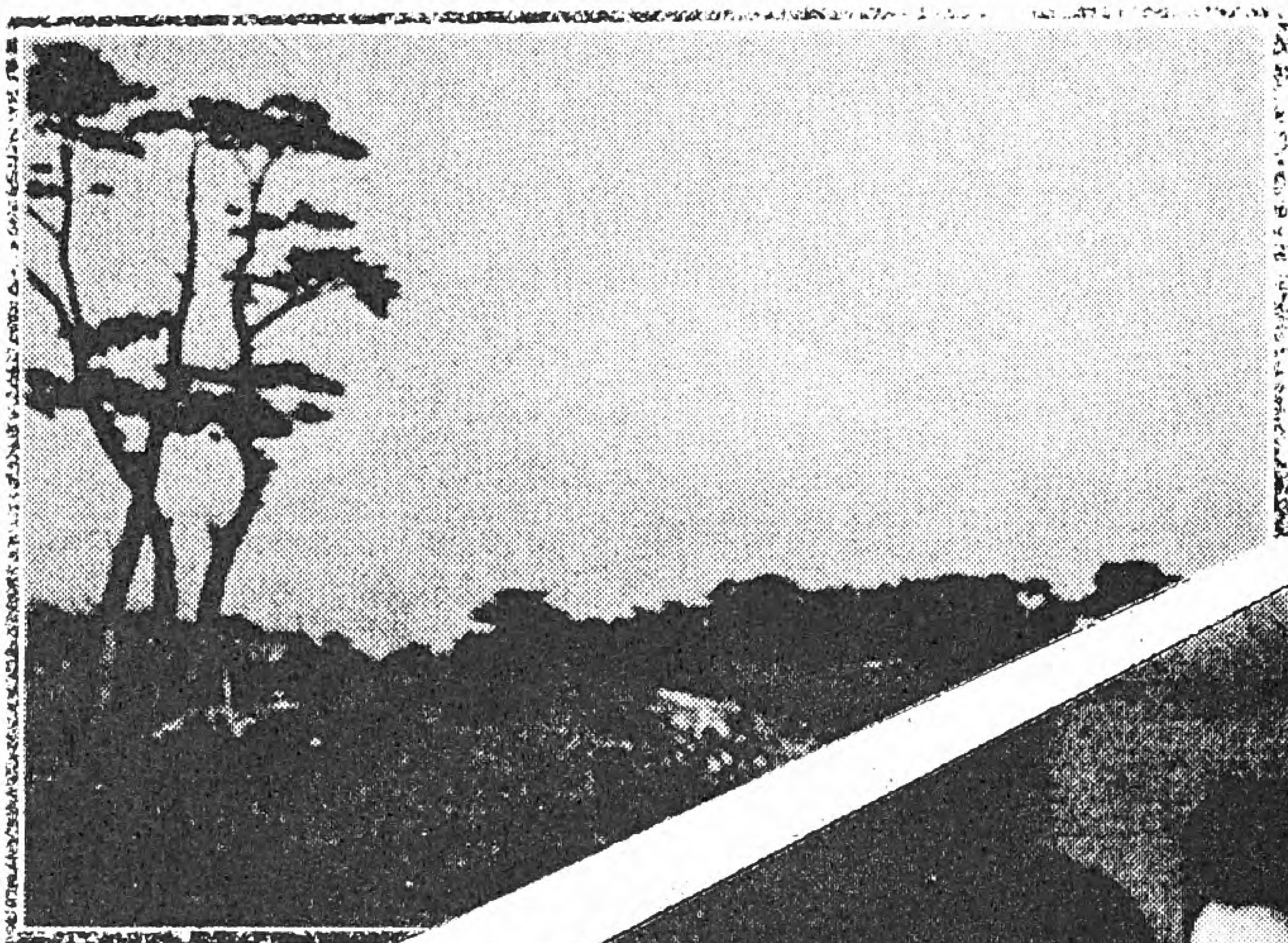
◎大鏡

以下續刊

東京本郷森川町

文成社

振替壹九四六七番



水無月の
雪頂くや
富士の山



溝口伯爵令嗣直亮氏夫人須美子と令孃歌子、豊子

涼風





貴族院議員男爵吉川重吉氏令孃英子孃（お茶水高女出身）



男爵練早家崇氏令嗣夫人



夢二、辰夫、順之助、DON、孝四郎合作

最新刊

都會スケッチ

定價五拾錢
送料八錢

顫へ戰く心は黑い炎が燃え盛る夏の太陽の執心に悶へ、冬の凄じい落日の悲哀のなかに淋しみ、手倚ない秋の淚もろさに痛み、春の胸苦しい狂人のうす笑ひの後に泣く。

銀座街頭の白日に石疊の小鉢に咲いた赤い花の狂めき、雨ふる街のハイランドに力なく洋館の窓は泣きかゝり、芝居小屋のまへに異形の繪看板が躍る、午後の公園の噴水の滴り、自働車の過ぎし跡の發動機の噓唏に惱み、青き夜の淺草の高塔に皮膚の死を思ふ。縋るべき何物もなく漂ひゆく若き身の行くべき果はいづこぞ。底知れぬ悲哀に包まれてたゞ「美」の幻影に刹那の感覺を喜悅す。『都會スケッチ』一卷は若き日の哀歡の點滴なり。

發行所 東京麴町二丁目二番地 振替東京二〇九一四番 洛陽堂

賣捌 東京堂、上田屋、東海堂、至誠堂、林平、文榮閣、北隆館、文林堂、



見よ◉月經なき女子◉病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物

有効確證



其主藥は最新唯一の通經藥にて**帝國大學**病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の**月經**閉止月經**滯**り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又每月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◉肥滿病新藥

（米國新輸入）

子供の折**美愛**と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く**醜婦**となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人◉ぶと〳〵ふとり◉血太り◉肉太り◉酒太り◉水太り◉顏赤◉にきび◉ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は効能たる艶白となり誓て**美顏**美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音



藥價	一劑一圓五十錢 三劑四圓卅錢 送料
	二劑二圓九十錢 四劑五圓半 十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 **小宮愛生堂**

◎腦神經衰弱及生殖器病藥

壯快愉絕



本劑は獨逸醫界大博士メリングー氏が發明に係る新劑にして男女生殖器不能即ち**陰萎病**活力無能發育不十分等に起因する病症に使用して**可驚**大効ある新發見藥なり故に該病患者は一日も早く本劑を服用し**人性最大の快樂**を全ふせんと欲する人精力を尚一層強健にしは必ず服用せよ服用僅かにして偉大の効力顯る……奇効現代唯一の良藥なり

藥價四十五錠入壹圓 百錠入貳圓二百八十錠入五圓特器入拾圓

適効ハ神經衰弱遺精夢精早漏房事過度射精無能貧血勃起力減少精神的及身體的過勞等に用て特効有り

◎淋病でこまる人は先づ完全なる良藥を撰べ

りん病消渇必治藥

內用外用



奇効說明書無代進呈

內用三日分五拾錢七日分壹圓十五日分貳圓特製分參圓八拾錢
外用三日分參拾錢七日分六拾錢十五日分壹圓廿錢特製貳圓廿錢送料內地は各八錢要す海外は小包卅錢

本劑は各國醫科大學處方及び藥劑を參酌し研究に苦辛を重ね一大完全なる良藥を調製するを得たり依て之れを多くの患者に與へたるに其結果實に驚く可く急性淋病は勿論慢性痼疾の淋菌も悉く殺滅して更に餘す處なく治癒せしめたり故に同病患者は速に試みられよ必ず全治保證す——

本舖 東京京橋區中橋和泉町 振替一〇六七七番 **小宮愛生堂**

侯爵中御門經恭氏家庭



令孃佐保子　内田澄子　中御門榛子　中御門男爵　大谷雛子

令弟經民氏　中御門侯爵　矢部吉禎氏　矢部次子

なでしこ



實業家濱田五郎氏夫人繁子と令息

男爵中村覺氏及夫人と愛兒

新輸入 美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色に變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる內服藥 サーサパリラ

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「パーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體內の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みて奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

●色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々教辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

●有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹冊定價郵稅共金拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●痿萎病を必治する新法●陰○の隠れを治する法●消渴を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治法鬘製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●毛髪の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●はくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑疵を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の姿を二八の姫に變ずる法●御氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を○○かす藥法●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そばかす必治法●女を○○に○て泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中與らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に齧れたる時腫ぬ特效藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座隱身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記憶力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の秘術●黑字夜光の奇術●老人終身貌取りの秘術●腋臭を治する法●色を白くする內服劑新法●寶丹の製法●腹痛即治法●疳癖病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●脹膝を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●淫部の痒きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る新法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の最新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして治す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭痛を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡を治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全身の色を白くし且つ艶美ならしむる法●苺酒を製造する法●窩を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗滌新法●壁の汚染を落す法●新らしき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服の油の付たるを落す良法▲以下拾法略す合計壹百四拾法あり着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

羽仁もと子主筆

婦人之友

七月一日發行　第二號　一冊金十五錢　郵税一錢五厘（六冊前金九十錢 郵税十錢　十二冊一圓七十五錢）郵税共

●理想の生活（花子の巻）愈佳境に入る……羽仁もと子

●女（戒めらるゝ女の虚榮心）……文學博士三宅雄二郎

●夫婦論（新婚時代の生活法）……羽仁もと子

●中流の家具費は如何にすべきか

●赤坊を泣かせずに育てる秘訣

●かうすれば子供に好かれます（女中訓）

●着物の色どりの研究

●五十錢で出來る夏の肩掛

●僅かの時間で上手に出來る洗濯法

●成功した贈物の實例

●器用に座敷を飾るには

●和へ物の拵へ方　鯛めしの炊き方

●七月の惣菜（卅日分の獻立と料理法）

▲樂天生活の工夫……佐々夫人

▲男女交際奬勵論……長井博士

▲旅行中の見聞……志賀重昂

▲東京生活と地方生活……後藤宙外

▲衣に厚く食に薄し……北尾夫人

▲主婦としての一日……加藤夫人

▲父母のをしへ……羽仁もと子

▲新案の家庭遊戯……松浦政泰

▲假名文字の習ひ方……星野天知

▲繪の習ひ方……大下藤次郎

▲家政問答（質問隨意）……羽仁もと子

▲修養カード（七月分）……

畫報（◉第一歩（ミレイ筆）◉若き母親の一日◉小さき花壇◉誕生日の集り◉夏の勤勞◉子供の笑顔◉子供の夏の生活◉製絲のいろ〳〵◉夏の盆栽◉夏の農科大學農場◉廚房のいろ〳〵）

▲初號四版 取揃御注文に應ず

▲東京小石川區雜司ケ谷町　振替口座東京壹壹六〇〇　婦人之友社



藥學博士石津利作氏令妹ふじ子

渡邊みゆき（實踐女學出身）

寶川訓修氏令嬢多賀子

蕉葉



向て右より故イーストレーキ博士二女コンスタンス孃、長女マリー孃、共立女子職業學校教授山崎ロウラ女史、四女クララ孃、三女ベリル

梅毒根治新剤

本剤（薬名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の薬物なれば現世紀に於る唯一のばいヽ毒根治特効新薬なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゐ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓つて根治することを確證す從來醫療藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本剤を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

薬價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

陰萎病特効新剤（瑞西新輸入薬）

内服 トニチン
TONITIN

本剤は瑞西國ウォルフェンスベルゲル社の發明新輸入に係り其主効は……男女生殖機不能即ち陰萎病。腎虚。神經衰弱。遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虚弱。生殖機能障害。早老者。精液稀薄缺乏。不姙娠。冷症發育不全等に用ひ天下無比可驚奇効ある最新發見薬也精力を増進し生殖器を強健ならしめんと望む者は早く試みよ峻烈偉大なる特効實に如電光たる世にありふれたる無効賣薬と同一視すること勿れ本剤の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

拾錠入壹劑 薬價送料共壹圓九拾錢 郵券貳割増

奏効確證 美容新剤 やせる薬

本剤（薬名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明剤にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効薬なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本剤を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓廿錢 着金即刻送薬す

世界唯一 麻病消渇の根治確證新薬

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩しゐる最新の麻病消渇即治模範薬なり、本剤はありふれたる普通の賣薬と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新薬を主剤とし是を内服して麻病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製せし新薬に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌剤の如き迂遠無効有害の姑息薬と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ薬價不廉なり用薬者諒め之を諒せよ

薬價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割増しの事

わきが 腋臭 根治確證新發見薬

醫療賣薬百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽ち誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新薬なり速に試み苦惱を脱せよ、價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送薬す

毛の必ず生る確證薬

本剤は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髪速生薬なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髪及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本剤特別製分を用ゆれば忽ち毛髪蓄々と發生する特効あることを確證す本剤は從來ありふれたる雜多の毛はゑ薬とは其効勿論同日に語るべきものにあらず實に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ

特別製分金五圓三拾錢 中瓶貳圓廿錢 小瓶壹圓廿錢

以上六薬 専賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館薬房（電話下谷五四六番）

婦人画報

七月一日發行　七月の卷　一冊廿五錢　郵税二錢　六冊税共壹圓五拾錢　十二冊税共貳圓八拾八錢

畫報

賀陽宮兩姫宮殿下の御昇校
赤十字社大會……▼新婚の高田高橋兩夫妻……▼書室に於る吉田ふじを氏
▼▼田舍の花嫁
御婚服を召したる武子殿下
名家の庭園と座敷……▼にらめくら……▼表彰されたる節婦、孝子の義僕
▼▼妙齢婦人と弓
地久節各宮殿下御參內
大河內子爵夫人送別會……▼孝女白菊……▼花の如き八名家の令嬢
▼▼帶のかたち襟つき
皇后陛下御下賜の玩具と慈惠院の病兒
▼▼東宮御座所と御下賜品（松浦邸に於ける）
少女の書家……▼新婚の三夫婦……▼夏の草花……▼歸省……▼立教高女落成
瀨戶內海の朝（吉田博筆二頁大三色版）
▼▼花とまがふ双美の貴婦人

見よ本誌の夏姿！清洌泉の如く優艷花の如し

讀物

中等社會の婦人……菊地博士
召使ひと下婢……上杉博士
地方の婦人團……井上博士
若き女に　文學士　下田次郎
結婚と人生……高島平三郎
家庭論……文學士　今井政吉
嫉妬の話……文學士　源良英
浮世繪の美人……幸田博士

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

我家に來る樣々の客……與謝野晶子
今日この頃……長谷川時雨
樂多き郊外生活……野上八重子
新婚の友……はる子
繪畫の見方……文學士　藤懸靜也
著述家の妻……志賀鐵千代
主婦として耻かしからぬ婦人……嘉悅孝子
はがきの書方……岡山高陰
この頃の婦人病……木村博士
貴婦人の噂……紅雲女

東京麴町區飯田町四丁目四番地
東京社
電話番町二三三九番
振替口座一一八一八

七月號

婦女界

一冊十五錢　郵税一錢五厘　六冊九十錢

◎信仰に活きよ……近角常觀

◎自覺せよ若き女……内田魯庵

▲虚榮心より起りし悲慘の實例……山室軍平

▲近代思潮と若き娘の長所……海老名みや子

▲涼味は到る所に滿つ……大倉桃郎

▲訪問した時された時……笹木幸子

◎轉地と婦女の衞生……醫學士 大瀬貴明

◎初夏の小兒衞生……醫學士 豊福環

◎小説「とみくじ」……内田魯庵

◎婦女と旅行の趣味

▲岩手山と八ケ嶽……野口幽香子

▲赤毛布式の旅行……目賀田逸子

▲壯快なりし富士登山……日向きん子

▲懷かしい相州三崎……竹越竹代子

▲娘の爲に選んだ旅行方法……加納諭子

▲富士山を紹介したい……野中千代子

▲旅行は活動的である……下田次郎

◎顏容と髮の結びぶり……伊賀とら

▲夏向の香水と使用法……佐々木玄兵衛

▲お茶を甘く飲ませるには……山本嘉兵衛

▼懸賞新題 一等五圓 以下數十名＝懸賞、和歌、俳句、繪畫、習字、一等二圓 以下數等

振替口座東京一三一五

東京 神田 同文館

女子文壇

第七年第八號

明治四十四年七月一日



薔薇

グスタアフ・キイド作
鷗外譯

技手は手袋を嵌めた兩手を、自動車の柁機に掛けて、眞つ直ぐに馭者臺に坐つて、發車の用意をして待つてゐる。

白壁の別荘の中では、がたがたと戸を開けたり締めたりする音がしてゐる。それに交つて、好く響く、面白げな、若い女の聲でかう云ふ。

「ボヂルや、ボヂルや。わたしのボアがないよ。ボアはどうしたの。」

「こゝに御座います。お孃樣、こゝに。」

「手袋は。」

「あなた隱しにお入れ遊ばしました。」

別荘の窓は皆開けてある。九月の晴れた日が、芝生と、お孃樣のお好きな赤い薔薇の花壇に差してゐる。

入口の、幅の廣い石段の一番下の段に家來が立つてゐる。褐色のリフレエが、しなやかな青年の體にぴつたり工合好く附いてゐる。手にはダネボルクの徽章の附いたシルクハットを持つてゐる。もう十五分位、かうして立つて待つてゐるのである。

主人が急ぎ足に門へ出て來た。鼠色の朝の服を着て、白髪頭にパナマ帽を被つてゐる。

「エストリイドや。早くしないかい。御馳走のブレックファストに後れてしまふよ。」から云つてじれつたさうに手を揉んでゐる。

「もう直ぐですよ、お父うさん。ボヂルや。手袋をおくれよ。あの色の明るい方だよ。」

「あら。お孃樣。あなたお手に持つて入らつしやるではございませんか。」

「おや。さうだつけね。」お孃さんは玄關の天井が反響するやうに笑つた。「さあ、もうこれで好いわ。」

家來は電氣の掛かつたやうに、姿勢を正して、自動車の戸を開けた。

お孃さんは晴れ晴れとした、身輕な樣子をして、主人と並んで、階段の上に立つた。髮は亂れて黃金色に額と頰とを掩つてゐる。褐色の目と白い齒とが笑つてゐる。

「まあ、なんといふ好いお天氣でせう。」

「お天氣は好いが、早くおし、早くおし。」

「あら、薔薇が綺麗です事。御覽なさいよ。」

「遲くなるよ。」

「なに。みんな待つてゐて下すつてよ。いつもそんなに早くは行かないから。そんなら、お父う樣、さやうなら。」お孃さんは兩手で主人の首に抱き附いて、頰に接吻した。

「さあ、行つてお出でよ。お午には歸つて來るだらうね。」

「歸りますとも。」今一度接吻した。そして石段を駈け降りて、自動車に乘つた。併し乘つたかと

思ふと、突然叫んだ。
「おう。籠籠。フランチスカをばさんに上げる果物の籠があつたよ。ボヂルやあ。」
主人は石段の上で足踏みをしてゐる。
「いや早。女といふものは始末の惡いものだな。」
それでもお孃さんは、主人の顏を見上げて笑つて、指で接吻の眞似をして見せる。
ボヂル婆あさんが、年寄つた足で駈けられるだけ駈けて、果物の籠を持つて來た。
「さあ、こゝに置きます。」息を切らしながらから言つて、籠をお孃さんの脇に据ゑた。
「もう出掛けられるだらうな」と、主人が云つた。
併しお孃さんはこの時又叫び出した。花壇の薔薇に目が留まつたのである。
「わたしあの薔薇を持つて行つてよ。ヰクトルや。走つて行つて、あれを澤山切つてお出で。」
「遲くなるよ。」
「だつてをばさんに薔薇を上げなくては。花も持たないで行つては、をばさんがなんと仰やるか知れないわ。ヰクトルや。もう一本お切りよ。もう一本。澤山切るのだよ。」
家來は兩手に握り切れない程薔薇を持つて來た。しなやかな枝が、花の重みで垂れてゐる。
主人は石段の上で足踏みをしてゐる。婆あさんは、旦那が本當におこらねば好いがと心配して身を顫はしてゐる。
お孃さんは突然大聲で笑つた。
「お父う樣。早く內へ這入つて戶をお締めなさいよう。わたしの今思ひ附いた事は、お父う樣が

見て入らつしやつては出來ない事なのですから。」
「なんだ。己は這入らないぞ。己の門の石段に位は己だつてゐても好い筈だ。」主人は頗る威嚴を保つて言つた積りである。
家來は薔薇をお嬢さんの脇へ、果物の籠と一しよに置いた。その時お嬢さんは家來の耳に口を寄せて、なんだか囁いだ。
家來は心配げに主人の顔を見た。
「早くよう。キクトルやあ。兩方の耳に、追懸のやうに附けるのだよ。」
家來の口の周圍には微笑の影が浮んだ。遠慮がし切れなかつたのである。「でも、お嬢樣、馬は附けて御座いません。」
お嬢さんは大聲で笑つた。
「ほんとにねえ。馬はゐなかつたつけねえ。わたしすつかり忘れてゐてよ。そんなら好いから、あの明りを附けるものを取つてしまつて、あそこへ薔薇の枝をお挿しよ。」
家來は躊躇した。
「早くおしよ。早く、早く。」
家來は又花壇へ歸つて行つて、薔薇を切つてゐる。
主人は急いで石段を降りて來た。
「何をするのだい。まだ薔薇を持つて來させるのか。」
「好いから、お父う樣、あなたはそこに入らつしやいよ。」

「それでもお前はまるで薔薇に埋まつてしまふぢやないか。」

「わたし埋まんたいのだわ。」

家來は自動車の明りを付けるものを脱して、その跡へ、花の一ぱい咲いてゐる薔薇の枝を三本挿した。

「これをねえ、わたしの體の周圍へ振り蒔いておくれ。それから幌の上にもね。」

お孃さんは傍にあつた薔薇の枝を一摑み取つて、婆あさんに渡して、かう云つた。

「それではお孃樣、あんまり。」

「そんならお父う樣、蒔いて下さい。」

「なんだ。そんな馬鹿げた事を、己まで一しよになつてして溜まるものか。」

「そんならわたし自分でするわ。」

お孃さんは花をむしつて、自分の周圍と幌の上とに蒔き散した。薔薇の中にもぐつて坐つてゐるやうである。

「それからねえ。キクトルやあ。お前はこの薔薇を控鈕の穴にお挿し。ヤコツプやあ。お前もお挿し。」

技手も家來も、微笑みながら胸を飾つた。

お孃さんは帽子の帶に一枝挿して、胸にも花を一つ挿した。

「さあ、これで好いから出掛けるよ。」

「そんな風をして町へ出ては困るぢやないか」と、主人が云つた。

「だつて立派ぢやありませんか。」
「なんだ。まるで假裝舞踏に行くやうだ。町のものが呆れるだらう。」
「それは町の人は氣違ひだと思ふでせう。好いわ。ヤコップやあ。さあ、車をお出しよ。ボヂルやあ。お午の時テエブルの上を薔薇で飾つて置くのだよ。好いから薔薇を澤山お切りよ。」お孃さんは笑ひながらかう云つた。「そんならお父う樣、行つて參ります。さやうなら。ヤコップや。お出しよ。」
技手は柁機を廻した。自動車はゆつくり花壇の周圍に輪をかいて、それから速度を早めて、跳るやうに中庭を走つて出て、街道に續く道の、菩提樹の並木の間に這入つて行く。
石段の上には主人とボヂル婆あさんとが殘つて、見送つてゐる。
「まあ、なんといふ可哀いお孃樣で御座いませう。あの薔薇の中に埋まつて入らつしやつたお美しさつて御座いませんね。」ボヂルはかう云つた。
「馬鹿な奴だ」と主人は云つた。
「どれ、お午のテエブルに載せる薔薇を切つて參りませう。」
「どうも甘やかして育てたもんだから困る。」
「さやうで御座いますね。旦那樣は隨分お可哀がり遊ばします。」
「いゝや。お前が甘やかすのだ。」
「さあ。それはさうで御座いますが、旦那樣、あなたが廢せと仰やれば、致しません。(間)。薔薇を切つて參りませうか。」

「うん。」主人はくるりと背中を向けて内へ這入つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

午食の一時間前に、ボヂル婆あさんは、お孃さんのお好きな、刺繍のある着物を着て、薔薇を切りに花壇へ出た。

中庭の花壇では足りないので、花園の花壇のをも切つた。主人が幾ら厭な顔をしても爲方がないのである。

ボヂルといふのは、この別莊に附物の婆あさんである。御本宅で、お孃さんがまだ生れない内から勤めてゐた。十年前に奧樣が亡くなつてからは、この婆あさんが内ぢゆうの事を、誰が言ひ附けたともなく、引き受けてしてゐるのである。

食堂には、食卓の準備がしてある。そこへ婆あさんは籠に一ぱい薔薇を持つて來て、飾り始めた。食卓に載せる、小さい花瓶が六つあるのに、二輪づゝ花を挿して、二つづゝ並べて、卓の中通りに置いた。實に美しい。それから盤に花を盛つたのを卓の四隅に置く。それから枝を卓の上一ぱいにばら蒔く。主人とお孃さんとの膝に掛ける切れが、鵠の鳥の形に疊んである、その嘴のところに、薄赤の莟を一つづゝ挾んだ。それからお孃さんのナイフやフオクの置いてあるところへは、中に寄せて小さい花を、外廻りに大きい花をばら蒔く。實に立派である。それでもまだ氣が濟まないのか、どの鉢の上にも 控鈕に挿すやうな花を一つづゝ載せた。

主人は食堂へ出て來た。燕尾服に白襟を附けて、綬を佩びてゐる。

主人は卓の前に立ち留まつて、卓と婆あさんとを見較べてゐる。

婆あさんは主人の顔をぢつと見てゐる。

「どうもこんな風では」と、主人がつぶやいた。

「それでも旦那樣もお召をお改め遊ばしたではございませんか」と、婆あさんが云ふ。

暫く二人は睨み合つて默つてゐた。

「あの、シャンパンのコップを出しました」と、婆あさんが口を切つた。

「うん。出してあるな。」

「最初に鶉を上げる事になつてゐます。お孃樣のお好きな。」

「ふん。そんなに甘やかしてどうするのだ。」

「でもあなたが廢せと仰やれば致しません。」

主人は時計を出して見た。もう時刻迄に二三分しかない。お孃さんが今にも歸つて來る筈である。

「お前降りて行つてシャンパンを出して來ないか。」

婆あさんは主人の顔を意味ありげに見た。どういふ考へで言ひ附けるかと疑ふ樣子である。

「旦那樣はいつも御自分でお出し遊ばすではございませんか。」

主人は輪に通した鍵を婆あさんに渡した。

「これで出して來い。一番上の棚の右の方だ。」婆あさんは鍵を受取つた。敢て反抗はしない。併し主人の魂膽を見拔いたのである。なんでも主人は婆あさんを出し拔いて、一人で階段の上に迎ひに出て、燕尾服を着たところを、娘に見せる積りらしい。

「それからな、シャンパンは氷で冷さなくてはな。」

「それはさうで御座いますとも。」

婆あさんは不平なので、戸を荒々しく締めて出て行つた。

主人は微笑みながら婆あさんを見送つて、揉手をしてゐる。今度こそはあの婆あさんを旨く出し抜いて遣つたと思ふのである。

* * * * * * *

ボヂル婆あさんは穴倉の梯子の中程に、左の手にシャンパンの瓶を持つて、右の手で欄干を摑まへて立つてゐる。

この時恐ろしい叫び聲が二聲聞えた。氣の違つたやうな、荒々しい叫聲である。別莊の部屋部屋に響き渡つて、それを聞くものは膽を冷して、體が凝り固まつてしまひさうであつた。丁度その跡で、殆ど同時にどしんと物の打つつかる音がして、がらがらめりめりといふと思ふと、家中の壁が地震のやうに震動した。何か大きな動物が、家に打つつかつて死んだかと思ふやうである。

その跡はひつそりした。暫くしてから人の叫んだり、泣いたり、走り廻つたりする音が聞えて來た。そして婆あさんが梯子を登つて、玄關まで來た時には、お嬢さんの死骸が床の上に横はつてゐた。その傍には主人が跪いてゐる。燕尾服に白襟を附けて、綬を佩びて。

* * * * * * *

お嬢さんと家來のヰクトルと二人で、自動車に乘つて歸つたのである。技手は一時間も立つてから、歩いて歸つて來た。

技手の言ふには、どうも自動車の機關が狂つてゐたとしか思はれない。なぜといふにキクトルは自分と同じ位自動車を使ふ事を知つてゐるから、止められなくなる筈がないと云ふのである。併しなぜ二人が、技手を出し拔いて先へ歸つたかといふ事は、技手も說明することが出來なかつた。

仲働きのカレンが見てゐた時、二人は前の馭者臺に竝んで乘つてゐて、その車が恐ろしい速度で中庭の芝生を通つて、薔薇の花壇を蹂躙して走つて來たさうだ。そのとたんにお孃さんが、荒荒しい叫聲を出したのであつた。最後の一瞬間に、キクトルは今まで握つてゐた手を枕機から離した。そしてお孃さんをしつかり抱いた。そのとたんに自動車は別莊の石壁に衝突して、二人は死んだのである。

この出來事は無論世間の大評判になつた。そして誰にも可哀がられてゐたお孃さんは、誰にも惜しまれた。

氣の毒な父親も頗る世間の人の同情を惹いた。

葬の前に、お孃樣のお好きな花はなんであつたかと、諸方から問ひ合せがあつた。

葬の日には柩の上を薔薇の花輪が三層に覆つた。眞つ赤い薔薇の花の輪飾が。

* * * * * *

お孃さんはこれ程に可哀がられてゐたのである。平生この家と交際してゐる二三軒では、丁度葬の日に芝居の入場券が買つてあつたのに、遠慮して行かなかつた位である。

（完）

女子に出來易き職業

文學博士　建部遯吾

△根本はパンの問題

吾等人間が一度此社會に出た以上は、先づ第一の問題は何であるかといふに、極く粉飾の無い露骨な言葉でいへば、パンを求めるといふことが眞先である。今日のやうに男子問題や婦人問題の起るのも、歸着る處はパンの問題が根本である。

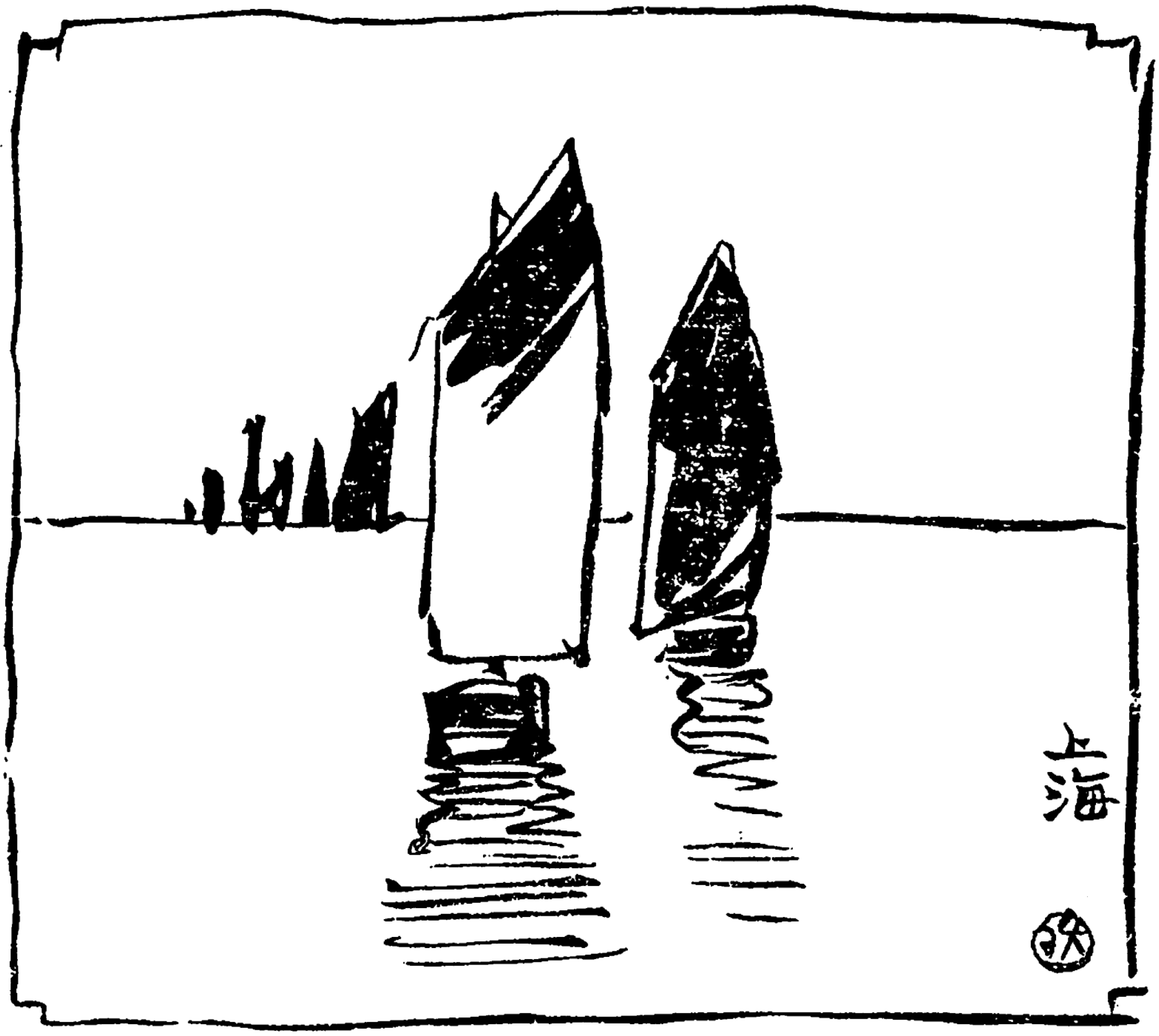
文明と云ふものは一方から云ふと非常に結構なことであるが、又一方からいふと、文明は人を苦めるものである。世の諺に稼ぐに逐附く貧乏なしと云ふが、以前は兎に角稼いでさへ居れば貧乏なしで宜かつたのであるが、文明の今日では只稼ぐと云ふ丈けではいけなくなつた。何故いけないかといふに、今日では我も人も一樣に働くので、相互の間に競爭といふことが起つて來た。其競爭の結果、優れたものは勝ち、劣つたものは敗けるといふことになつたので、力の強い者はずん〲世に出る代り、力の弱い者は始終失意の裡に呻吟して居らねばならぬと云ふことになる。斯うして社會の上下は日一日と懸隔が甚しくなつて來る。

△職業に伴ふ教育

女も亦從來のやうに、一生の苦樂は只その夫の貧富賢愚にのみ依るべきでなく、自分も一個の人格と能力を具へた人間として、自分の力で衣食して行く覺悟がなくてはならぬ。如何に立派な家に嫁しても、如何に歴然として夫を持つても、人生には不時の災難もあれ

ば、浮沈もある、何時どんな事があつても獨立して行けるだけの用意を持つてゐれば、たとへ其職業に從事せんでも、自ら大に心強い處があつて、始終婦人格を保つてゆくことが出來る。それだけの婦人格をつくるには充分に教育の力に俟たなければならぬ、教育の目的はそれである。

女子教育の進歩は、女子職業の進歩にも伴つて來たが、只、女子自らに適した職業と、適しない職業とあるのは自然の結果で致し方がない。



あらゆる學術の中にも女子に適するものと、適しないものとある。文學とか、美術とかは若い婦人にも能く適するでせう勿論例外としては女子にも種々の學術を好み、其が適すると人もあるであらう。

△奥村五百子は一人で澤山

家庭を持つてゐる婦人が、何々會とか、何々事業とか云つて、毎日のやうに外出する人がある。尤も小學校六年、女學校五年、合せて十一年の間

と云ふものは殆ど毎日外出してゐたものが、一朝家庭の人となつても、ぢつと家に閉ぢ籠つて居難いのは無理でないかも知れぬ。然う云ふ方に私の望むところは、其外出時間を一週に二度なり、三度なりに定めて、自分の得意の學科を無俸給で私立學校へ行つて敎へてもらひたい、それこそ眞實に意味のある慈善事業だと思ふ。

凡て物は不用になると腐るものだが、私の目から見ると愛國婦人會なども無くてもよくはないかと思ふ、成程戰時には役に立つ事業を成したが、其後平素の有様は何うであらうか。

また奥村五百子の愛國の觀念も極めて偏狹なもので軍隊以外に敎育も、文學も、實業も、社交も認めない。然う云ふ婦人は模範とは云へない、又理想の女子でもない。若し天下の女子が悉く奥村女史を眞似て、男性的活動を初めたら、却つて社會の秩序は亂れ、人生の趣味を傷くるに到るので、時代は唯一人の奥村女史を要したゞけで、多くの奥村女史を要しない。

△女ばかりで出來る雜誌

話が横に外れたが、前に云つた女子の職業のことでも、日本と西洋とは反對の現象を呈してゐる。西洋では女子の職業と云ふものゝ程度が高い、日本では程度の低いものとして女子の職業が發達してゐる、西洋では高等學校に位する學校の校長などでも、婦人がやつてゐる。

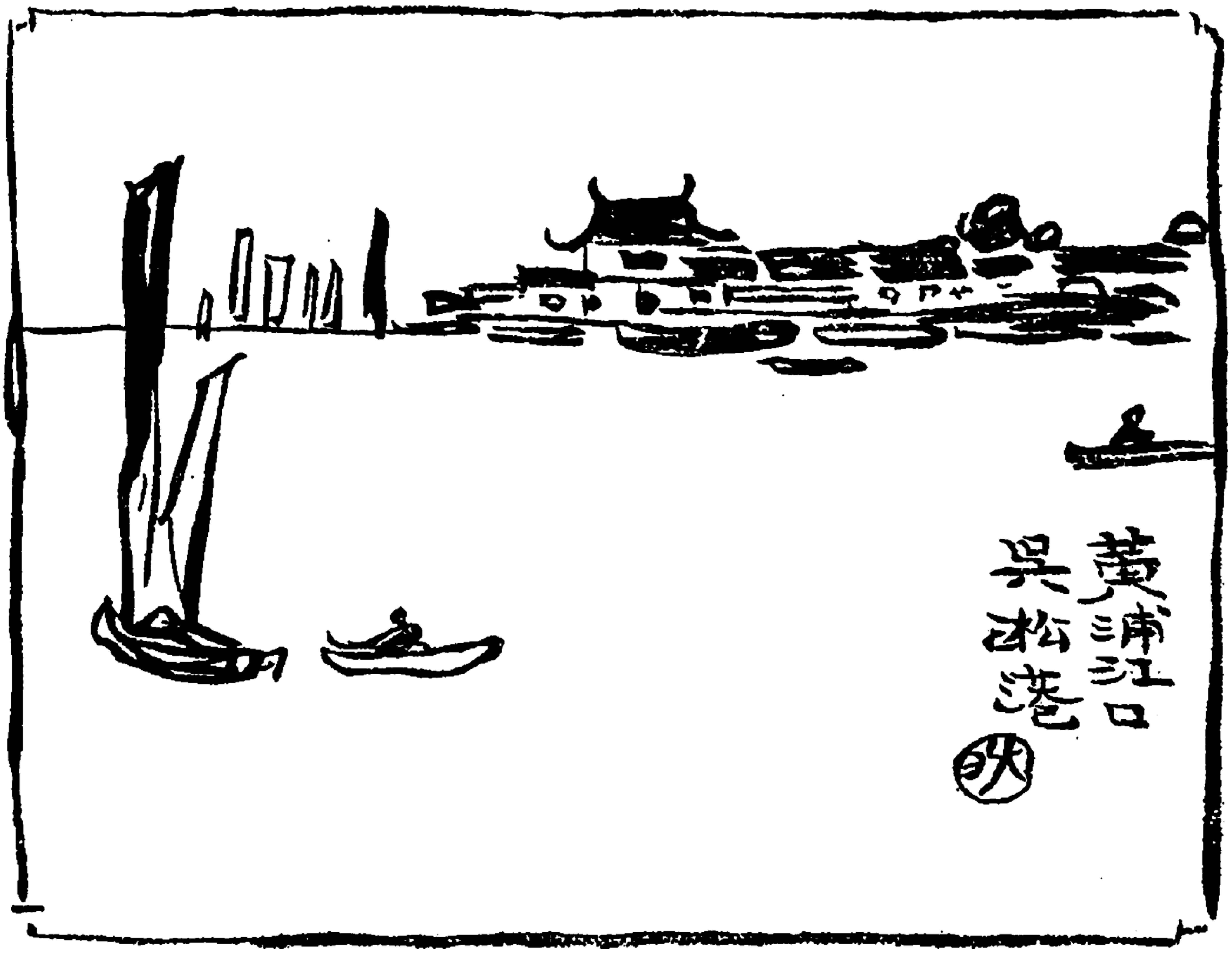
また西洋の婦人記者と云ふやうなものでも、新聞雜誌記者に限らない、役所、會社、銀行等の書記も含まれてゐるので、オーストラリヤの文書局では、課長以下のものに各一人宛のタイプライターの出來る婦人書記が附屬してゐて、日本の高等官ぐらゐの月給を取つてゐる。其他會社、銀行、又は中流以上の家庭にも、女書記を雇つてゐる。

我國では未だタイプライターの需用がそれほど廣くはない、だから其代りになる習字を婦人達が能く學んだら宜からうと思ふ。女は手先の働きが器用だから、

筆蹟なども男子よりみごとに書ける人が多い、役所の書記などは女子が爲つても宜い、男子では現に筆蹟の善くないものでも月給の二十圓位は取つてゐる、女子を此方面に使へば成功するだらう。また需用の範圍もなか〳〵廣からうと思ふ。

各ステーションで女子の切符賣を使用してゐるが、あれも大に宜い、あゝいふ所に勤めて居る女子は、感情が鋭敏になつて、大倉喜八郎や、雨宮敬二郎のやうな人物を産み出すかも知れない。

巴里で發行してゐるヲ、フラウーと云ふ雜誌などは社長



も、主筆も、記者も、皆婦人ばかりでやつてゐるが、なか〳〵盛んなもので、内容も男子の雜誌と變らないこれを見ても外國の婦人の職業の地位の高いことは分るであらう。その雜誌上では、婦人が女權問題、文學、宗教、教育、政治、哲學などを堂々と論じてゐる自分も此のヲ、フラウーの記者に會つて見たが、實に立派なもので、あらゆる點に於て、婦人格を發揮してゐるのである。

わが國でも、婦人の仕事が、もつと程度の高いものになつてゆかねばならぬ。

物足らぬ男子が多い

木下尚江

●女子の寂寥

此の頃の若い婦人は、男子に對して如何なる考へを抱いて居られるであらう。

ある若い婦人に尋ねると『物足りなく感せられる』と斯う答へた。又私の知つてゐる婦人に、女傑ともいふべき、意志の強い偉い婦人がある、其人が最近に寄せられた手紙の中にも『私達はどうしても現今の男子といふものに、滿足する譯には行かなくなつた。實は我我の不幸にして、悲しむべき事である』といふ意味の事が書いてあつた。それを讀んだ私は、全く然うもあらうと感じた。然し是は女子が男子に對して、不足を感ずる許りでなく、男子も慥かに女子に對して不平があるに違ひない。が、それは別問題として、從來最も型に囚はれてゐた日本の婦人でさへ、然ういふ傾向を持つて來たのだから、自意識の發達した外國婦人には然もあるべき事と思ふ。

彼の英米の婦人參政權問題等も必然の結果ではあるだらうが、實に婦人自身にとつては、寂しい悲しい事實である。それと同時に男子にとつては、男子の墮落を意味する、大きな恥辱である。

一體英國の女は昔から從順な女であつたが、それでさへ男子が物足りなくなつたのである。男子にしても英國邊りの男子と日本の男子とは、比較にならぬ程、外國の男子は進んでゝもゐる樣に、思つて居られる方もあらうが、何か要求して止み難い此の力は、何處を

通じても流れて行くのである。

是は一體に人間の愛が乏くなつて來たからである。

現代文明の裏には、人間皆犠牲の精神を失つて、利己主義にのみ傾いて行く、是が凡ての一大源因になつてゐる。

それが政治にも文藝にも宗教にも、有所方面に影響して來て、即ち『現代』といふものを形作つてゐるのである。

◉愛と威嚴が乏しい

愛と威嚴、之程壯嚴な、又美しいものはなからう。

此の二つのものゝ一致せられたる前には、如何なるものも跪かずには居られない。

愛と威嚴の一致は自然の絕對なる權威である。



昔から日本では男尊女卑と云つてゐたが、決して眞ではない。

尊ぶに足りる配偶を得た人程人生に幸福なものはあるまい。男子は妻君の威厳を認め、婦人は良人の威厳を認める、是程平和の根本義は無い。然し是が反對に『我は男子なり』と稱すべき點のない男子が、歴史的の惰力で女の上に立たうとする時は、反抗せざるを得ない。故に婦人參政權運動のやうな、問題が起つたのである。實に男子の恥を曝露したもので、一方には又婦人の制し難い寂寞の、現象とも見るべきである。

威は外部から附け加へたものでなく、内部から自然に現はれたもので無ければならぬ。例へば、釋迦が乞食のやうな風をしてゐても、女性から尊敬されたではないか。キリストにしても、キリストを最能く理解したものは、男子より女性に多かつた。

愛と威の調和問題になつてくると、日本の今の社會は呪はれてゐると云つても宜い。

●損はれたるモデル

形の上にも精神の上にも、何かゞ缺乏してゐて間が抜けてゐる、といふやうな感じを、有所ものから與へられる。

彼の裸體畫にしても、一日若干の日給で雇つた女をモデルにして平凡な畫家が筆をとつた所が、何で完全な畫が出來上るであらう。婦人がモデルに雇はれるに立至る迄には、如何程種々な歴史を經て來たであらう。而して傷はれた精神と、それに伴ふ身體とをモデルに借りて、それから名畫の製作に取り掛るのは、少し無理だらうと思ふ。

彫刻物等で見た、ギリシヤの女神、あれこそ愛と威の化神である、女性は皆ギリシヤの女神の如く有りたいと希望する者は、恐らく私のみではあるまいと思ふ。外國の婦人に比較して我國の女性は、可憐な趣きはあるが、壯嚴な處が一向に無い、婦人に限らず男子も然ふ云つて差支へないと思ふ。是が男女共に内部から發

揮せられて行かなければならぬ。

◉強健な心と體を要す

西洋の詩人や藝術家を御覽なさい、英雄の樣である。大文學はあゝいふ強健な身體を備へた人の頭腦から出なければならぬと、思はせられる。吹けば飛ぶやうな日本の文學者に、トルストイのやうな長命をした人は無いと云つても宜い。セークスピヤでもイブセンでも實に意氣の張り詰めたやうな體格を持つてゐる。三十や四十にして夭折する青い頭腦から何も爲し得ない事は、無理ならぬ事だと、私は何時も嘆息してゐる。

今の日本では、學校で修身を說く者が不完全な修身を說き、體育を說くものは不具な體育を說いてゐる。であるから、其間が調和されない、自分の受けて來た敎育を、呪つてゐる婦人もある。

學校を出て職業に就いてゐる婦人を見ても、どうして彼れで職務に堪へてゆくかと思ふ程、不完全な形をして絕えず不平を口にしてゐる。

それも其筈、其人達の身體は深窓に凭つて月を眺めてゞもゐる人のやうな、虛弱な姿をしてゐる。深窓の佳人では職業はとれない、職業にでも就かうとするものは、それを第一に自覺すべきである。

男は不行儀な、女は卑屈であるのを良しとした弊習は却々離れ難いものと見える。

日本の婦人でも、初めから現今のやうな窮境にゐたのではなく、光明皇后、孝謙天皇の如き、堂々たる婦人もあつたのである。奈良朝時代の婦人でも今のやうな狀態ではなかつたらしい。

今の煩悶は明治の敎育が、空虛なものにしたとしか思へない。どうか此愛と威の一致を理想として、體育の上からも、精神修養の上からも絕えず調和すべく心懸けられん事を希望してゐる。





山岳の趣味

小島烏水

流行といふことは、蝙蝠傘の色合や、衣服の模様のやうなものに、限られたのではなくて、古から今までの、自然にも、新流行だの、時代遅れだのがあるから面白い。例へば日本が支那大陸と交通を初めて、支那の文物を盛に輸入して以來、風景では、いつ頃からか瀟湘の八景に摸倣して、近江八景といふものが出來た。さうすると、いくらか似寄つた土地で、何々八景といふものが、到るところに簇生した。併し今日で自然を愛する人、又は研究する人に向つて、近江八景を持ち出せば、大概の場合に、頭脳の古いのを笑はれなければ、幸ひである。今日景色は近江八景に限るといふのは、戯曲は忠臣藏に限ると言ふのと同じく、時代遅れと言はれても仕方がない。

この自然にも流行と、時代遅れがあるといふのは、實に英國のオスカア、ワイルドが、喝破した言葉である。ワイルドの虚僞の頽廢といふ對話體の論文の中に、タアナアが、日沒を描いてから、人が盛んに日沒の美を嘆賞するやうになつたが、近頃まで英國人が厄介物にしゐた霧を、ウイッスラアが、印象的に描き出してから今まで認められなかつた霧が、人々に非常に美しいものに見え出した。今日では最早日沒の美などを說く人は、よほど時代おくれの人物である。云々といつたやうな調子である。私は知らぬが、倫敦の霧は、實際ひどいものださうで、白晝も濃霧になると、汽車が進行を止めることがある、人々は人家の壁を、手さぐりで徐歩するほどだと聞いた。そんなものが、自然と

して玩賞せられるといふのは、近代の文明も、頗る皮肉になつたと、言はねばならぬ。

そんなら、今日の日本では、何が流行の自然であるかを問はれると、この答辯は一寸困る。併し山岳といふことが、學術的にも、藝術的にも、又實行的（換言すれば探檢登山旅行の類）にも人間に扱はれて來たのは、十九世紀以來で、人間に見えた自然としては、新らしいものと言ふことが出來る。そして少なくとも、流行してゐるとも言へる。



此間、瑞西（歐洲アルプス山）から歸つた人が、五月八日東京和強樂堂で開いた日本山岳會第四大會で、かの地の寫眞や、

書籍や、器具を陳列して、公衆の縱覽に供したが、銀製の山岳小模型が、書齋用の壓尺になつてゐたり、高山植物の原生態を、さまで多くくづさずして、美しい模樣にあしらつた本が出來てゐたり、又他の人から、アルプスの少女が、籠に花を盛つて、停車場や宿屋へ賣りに來たりするといふ話を聞いたことがあるが、一般の生活に、山岳が密接の關係を有してゐることが解る。日本でも立山を有する越中の富山邊では、夏日になると少女が美しい花（高山植物では無かつたか知らぬが）を賣つて歩いてゐるのが、何となくローマンチックの詩情を惹く。これは鏡花氏の「黒百合」といふ小說にも、使つてあるが、一ト頃本邦でも、簪や衣裳にまで、高山植物を模樣に使つたものが見えたが、あまり勢力を得ずにしまつたやうだ。下界に立派な美しい花があるのに、何も高山のものなどをと、言ふ人があかも知らぬが、それは眼界の狹い人、握力の弱い人、驚異の情の鈍い人のいふことで、近代の生活は、出來得る限り、豐富に咀嚼するところにある。青物市ではバナヽや龍眼肉は、敢へて日本の桃李に劣らぬ顧客を有してゐる。異國趣味を取り入れてよければ、別天地の山岳趣味も、取り入れて然るべきである。高山植物にのみ、限つて言ふのではないが、山岳趣味を齷齪とした貧弱な生活に注入することは、痲痺した頭にも、眼にも、必要である。

花でも、雲でも、空でも、石でも、雪でも、高山のものは、冴え〴〵と輝いた、氣品の高い、それで濃厚に光澤のあるもので、世間の人は、山といふと、色彩が貧弱で、岩石峨々として、荒鷲や山賊どもの、住居のやうに思つてゐるが、事實は反對で、むしろ女性的な方が多いのである。高山は、富士額の名をありがたがらぬほどの女性にのみ限つて、嫌ふ資格のあるものであらう。

併しかういふ私の意味を以て、所謂女壯士のやうな「冒險家」を作らうとするつもりに、解釋してもらつては困る。私は女性に山岳趣味の咀嚼者なり、攝取者なりになつてもらへば、それで暫く滿足する、必ずしも生理上に、弱點のある、柔性を驅つて、勞苦の頗る尋常でない探檢旅行の、實行者にしやうとは思はぬ。

蘇生

横瀬夜雨

(中)その夜

(八男介の手紙のつゞき)

夜雨を欺ける人は多い。TかKかRかHか、誰か玉の如き詩人の心を破りて、精神的に堕落の人たらしめしか、好んで他を罵ると共に、自棄して詩を忘るゝまでになり乍ら、幸にして母の愛を疑ふまでにはならなかつた。一人の愛は百人の罪を贖ひ得てわが夜雨は今日まで生きてゐた。

こゝに生有りて生くる日有り。こゝに死有り、隧道に送らる。呼嗚隧道！わが詩人は母の涙に身をきよめられて草にかくるゝ人となつた、久しかりし苦悶の歴史は終つた。

「花ならば摸りても見ん今日の月願はくは保己一を以てわが夜雨に比ぶる勿れ。「名月は座頭の妻の泣く夜かな」夜雨に何が有つたらう。夢にまで萬人の侮蔑と嘲笑とに脅かされて生きながら、報いらるゝ事も無くて、いたましき命は終つたのだ。

自分はいつか庭を歩いてゐた。大町、新宅、入の小父樣たちは廣間に、小母さん等は茶の間に集つて今十年は生かしておきたかつた、親類中の自慢物を失くしたと返らぬ愚痴を言つてゐる。「せめてあと三年孝が學士になるまでは見てゐてほしかつた、脳だつて心臓だつて惡くはないのだから、どうして死んだかわからない、湯殿の石疊へ轉がり落ちたのではあるまいか、それとも二階の上から落ちたのだらうか、怪我に違ひないのだけれど……」と伯母さんは言ふ。一座靜まり返

つて「疑ひ」を解かうと力めてゐるらしかつた。

月は氷輪を天の一方に懸けてゐた。明け放したまゝの門を通して往來は煙のように物の影が行く。靜な夜なので前庫や辰巳庫や樫や欅や、影を庭一杯ひろげた後の、大きな黒い屋根の下に旅で死んだ人を迎へようとして人々が待つてゐるとは不思議にも思はれた。

枕團子を挽くといふ女が六七人、納屋でこと〳〵と廡からさし入る月をたよりに石臼の周りに動いてゐる箕をかゝへて前倉のひさしのかげから出て來たのはおはつだ。「早くしべいよ、寒いんだもの」

滿身に月を浴びて靜かな光の中に自分は庭を行つたり來たりした、藁束の白いのを猫と見たり、西屋敷の跡にある稻荷塚を廻つたり……チリチリン。

不意に門の方で音がした。と石を踏む音が聞えて、やがて、わつといふ氣たゝましい聲が家の中から起つた。

遺骸が來た。

と思つた。

思ふより早く中庭へかけてんで西の縁から座敷へ飛上つた。……

夜雨さんは生きてゐるといふ。誰も誰も上り端に立ちかゝつて貞雄さんの齎らした吉報を爭つて聞いた。

夜雨さんは生きてゐた。

三壺月浮んで七萬里の程浪を分ち、五城霞峙ちて十二樓の構天に挿めり。愚や。謬入仙家雖半日之客、恐歸舊里纔逢七世之孫、夜雨さんは生きてゐた。

萬歳。

二月十一日　尾見八男介

横瀨花兄七君　几下

(下) 廣間にて

まあお目出たうムいましたね。

おめでたう。

おめでたう。本當に驚きやんしたよ。

本とだ、夜雨先生ばんざいだ。

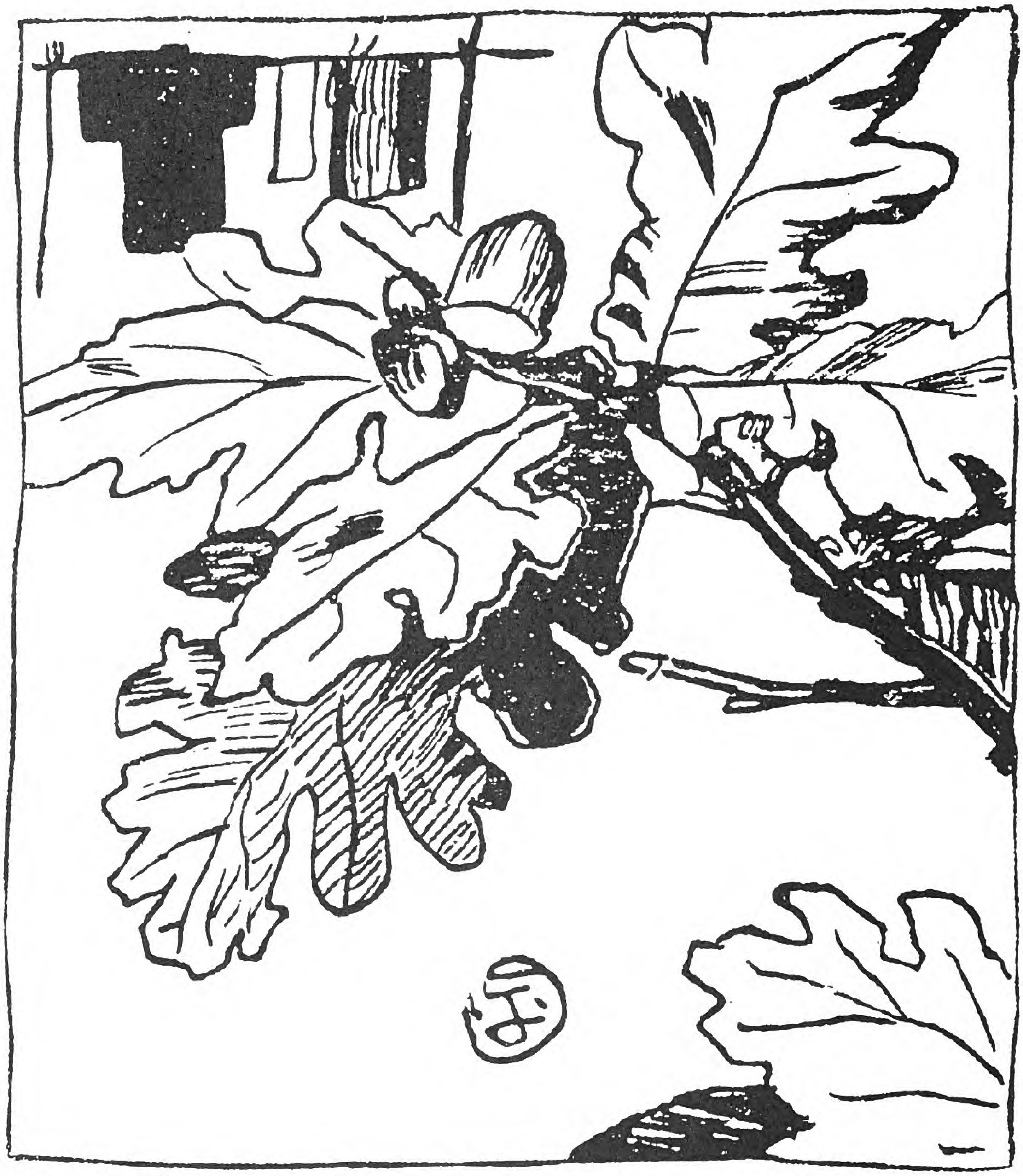
申しちや何だが、昨日はたまげたの何のつて、話し

はありやんせんでした。そでもねえ、如此して生きかへつてお歸りになつた。

まあ昨日つたらいつときに魂げらかされて驅けて來べいと思つてもどうにも腰がひつたたなかつたよ。

そうら、こんなにいてくしてるのに、昨日は死んだなんぞ、人のこと魂げらかして、まあ顔を見るようぢやないかねえ。

なアに、死んだ人が生きけえつて來たんだ、こんな又珍事ちんちようだきや、うとも言ひやんせん。萬歳だ。



かけいびやく以來有るもんだねえ。

こりや旦那、赤飯の一駄位ふかさなくちやなりやんすめえ。

序につめ切りを押立てるんですね然すると飲めらあばんざいだ。

お前先刻からひとりで萬歳を言つてるがまた飲つたんだらう。

うん今日はひる酒でさ。いつもは嬶の奴不平垂れやがるけんと、今日

そンぢやお前の方が萬歳だ。まあちやん氣をつけなすつた方がいゝ、あとであんたのお蔭でうちのに飲まれやんしたの尻が來べい。

べらぼうめ、おらちの嬶はそんな風ぢや無い。

　まあやあだ、おめえはまあちやんが生きかへつたに託けてやつたのかい、だから私ア香兵衛は嫌えだよ。

きらひで仕合せ、好かれちや困るだ。それ百人首に有つぺ、にくまれて世にあるかひはないけれど可愛がられて死ぬよりやましか、おめえと仲よくなつちや、辰つアんに濟まねえもん、なあ。

おきい、そんな香助にやかまふなよ。

お前は男におひやらかされるのが好きな質だ、しようがねえね。

　それにしてもまあちやんはほんに罪を作つたぞオ。村中の騒ぎどころか使に出た連中は古澤(結城)から高道宗(筑波)吉田(眞壁)駒籠(猿島)と足を摺古木にして終夜か〻つたさうだよ。

だつて、そりやまあやの咎ぢやないやね。ないけれどあの騒ぎをこれに見せてやりたかつた。騒ぎも何だか、あれだけ人に惜しがられてゐるんだからまあやは滅多に死ねないよ。濱(母の名)さん、もう何處さも出さないことですね。

　さうだともよ、姉さん奥へ押込めて閉て切つておいた方がいゝ。少ちやい時から言ひ出すと利かぬ子だつたが、去年は二十何人たら供を連れてつて筑波の頂上へも登つたし、雪の中を信州から越後の方まで行くなんてあんまりだツペ。

　八月にや、孝ちやんを連れて北海道へ行くんだつて

おゝ、とつてもねいこと!

　八男ちやんが學校から歸つて來た。

　八男ちやんは昨日は可愛相な程だつたね、次の間へ行つたりお納戸へ來たりして、居どころがなくなりでもしたように、しほ〳〵してるから、まあやが机の周圍を一しよに片づけようと言つたら、それでもぼろ〳〵

淚をこぼしながら一つ〳〵本を奥へ運んで……。

あら虚言だなんて、あんなに置き忘れて行つた七寶の時計を何處かへ藏ふように賴んでも藏つてくれなかつたかッペ。道理だアね寢起きも一しよなら、湯に入るにも勉强するにもくッつかつて來たのに、明日から一人ぼつちで机にかゝるンだッペと思つたら私まで泣けちやつた。机の上には三つ四つ封を切らない手紙がのせてあつた、大阪からよこしたんだつて改野つちや



らいふ目の大ッかい娘さんの可愛い寫眞も來てゐた。切角先生にと思つてよこしたんだと思つて佛さまさ上げてたつけ、線香臭くなつたかも知んねえ。

電信にやよく間違があるもんで、大串の「でい」の息子からカネ三〇オクレつて言つて來たので三圓つぱかしを何するんだつぺと思つたけんど、切角だからと送つた話がある。國生の源次郎さん(長塚節君の父君)とこでは舍弟息子の順次郎つちう工學士（小坂礦山技師かつて一高野球の選手たり）が聟に行つてる家に善次郎つち弱い弟がゐて見舞に行つた源二郎さんからジンジロシスカネオクレとかゝつたから節さんもお靜さんもさあ大事だと思つたつぺぢやねいかね。雨のぢつぢと降る晩だつたさうだ、節さんだけ起きて本を見てるところへ郵便もちに門を叩かれたんだつて、それを節さんは、夜の明けるまでそのまんまゐて、朝になつてからおしづさんに言つたんだつて。妹ノ嫁入先や何かでは彼方から知らしたらうし、たぶん順次郎は平野（平野敢朝、下妻の人、法學士、かつて一高黃金時代の野球大選手たり）の叔父と同じように山でエンジンの調帶に卷き込まれて死んだにちがひあるまい、村の手合に言ふのは父の差指を待つてからにしようと定めてお靜さんとたつた二人次の次の日まで堪へてゐたつて。さうしたら、どうだらう、待ちきつてた源次郎さんの手紙は向うの病人の容體から書きはじめて、危篤になつた日の事だの、臨終の容子だの細あかに書いてなほなほ順次郎儀は本日何時何十分上野着送葬致す筈とあつて、ゼンジロジンジロ、ジとゼの違ひだつたのさ。まあやのはマスがシスになつたからつて郵便局の技手に殺されじまひに殺されちやつたんでもなし、村中集つてたから炊出しの費ばかしも大へんだつたが、まあまあ生きてたんだから。

さうですとも。私家では丁度三郎が來てゐて死顔にいきあつてから歸んべつて夜まで待つてのでした、職業が職業だから人の死目に出食せるのは平氣な男だけれど、子供の時からの友達だの、身よりでもありして臨終を見てやりたかつたつて言つてたのでした。大あべこべだ。だれだつてさう思ふ筈ですよ。それに一體が始終弱いんだから藥を服みやいゝに、肝油で懲りさせたもんだから濱さんの手にもをへないさうですよ。

肝油か、肝油は辛かつたつぺいよ。あの頃は子供心にのまねばならぬとあきらめてか大人しく服み服みしたつけが、にほひを、嗅いだゞけで吐きたくなる程だつたもの。今更肝油は服めまいが、せめて四十までや生きてくれなくちやなんねい、だい一お祖母さんにだつて先立つち法は無い。お祖母さんて言へばあゝして耄け切つておなすつてもまさか親身だね、のぶが生きてたつてまあ可かつたゞつて、農夫也樣と間違へてゐると見えるよ。

わたしが行つてまあちやんが生きていらしてよう御座んしたねと言つたら、其けえり返事は無くて、「あの誰れ、誰れは何所へか行つたか」つておつしやるでせう。「誰です、お上さまですか、大町のお上さまですか」つて聞いても、「それがやねい、それ腹の大きな。腹の大きなと言や入(後の家)の嫁さま(貞雄君の細君)でもあるかな、それにしても來てゐやしなかつたがと思つて「うめのさんですか」つてたら、「さうがやねいあれ腹の」、「あつ分つた旦那樣だね。旦那樣とやつと知れたのです。宵の口に奥ざしきへ死骸を寢かせなくちやならないから隱居所へ連れてつて上げる時トラノカハを持つて來てくれるには弱つちまつて皆して判斷したがわからない。別な寢卷をいふのか、上敷をとりかへることなのか、あれでもない、これでもない、しまひにや怒つて了つて、御自分でめつけなすつたが、何だらうと思つたら毛布だつたの、毛布を虎の皮はあんまりでせう。お上さんはまあちやんには急に亡くなられる、あとへ殘つたお祖母さんちば彼あだし、病氣になりやしまいかと思ひまして……。

其時さ、お部屋の障子も張らせようと思つてね、天井から下ろしたら餘り數が多いので何れが何處へ當るのかがたぴしく當てたり外したり、じれじれするからよけいと泣きたかつた。それでも分家の役目だと思ふからぶんて倉から膳を出したのも私だつたが、柱の陰に有つた、角樽へ蹴つまづいて、ふいと村中の祝儀といふ祝儀には一斤だつて此の角樽を借りぬ家が無いんだ、昔は黑餅の重ねまで拵へておいて貸したものである。本宅で使ふのは別に有るとは言ふでう、幾十年かの間つめちや乾しつめちや乾しした角樽をたう〳〵丸やには見せずにしまつたと思つたら、鏡も底も突き拔いてやりたかつた。それでも斯うして何とも無え顏を見たから銚子三組もまあ〳〵壞させなくて濟む、丸やは長生をするよきつと。(をはり)

若草山

窪田空穂

巓のあれは何ぞと指して若草やまの明るきを見る

願ありて大臣不比等が建てしてふ南縁堂のふるきみ佛

寧樂の代の人が初めて見たる日の驚きをもて大佛に立つ

いにしへの聖武の帝おん胸にゑがかしましつての盧舍那佛

三寶の奴と宣らせたまひける其日の帝かしこみまつる

踏み踏みてくぼめる石のきざはしを二月堂にとわれも踏みゆく

いにしへの佐保の川行く御影石もて架けたる橋をわが渡りゆく

寧樂の代の大極殿の跡なりと田中に小さく殘れる芝生

大宮の跡といひては田の中に芝生殘れり春の日は照る

たたりある芝生なりとて大宮の跡よくづさでありしさみしさ

めぐらして寺は立てども大宮の跡は早くも打忘られつ

咲く花とにほへる都後にしてたどり惡しとや御輦は行く

何ものか殘れるあはれ殘れるは工匠が鑄たる古きみ佛



子供を可愛がる夫婦

女子英學塾講師　河井道子

私が亞米利加に滯在中、最も感じた或夫婦に就いてお話しませう。けれどもその方の名は申上げられませんからかりにK氏として置きませう。この方は日本で申したら、中流以上の生活を爲てゐる方で夫婦とも五十近くですが、只子寶がないのでございます、何れの國でも――お子供のお有りにならない方は悲慘な思をして居られるのですが、この夫婦は一寸もそんな樣子が見えません。さうして、私どもに子供の產れないのは、他のお宅に數人の子供が有つても、お世話なさる事が出來ない兩親があるから、さういふ子供を世話する爲めに、私どもに子供が授からなかつたのであると申されました。このK氏の兄樣が九人の子供を殘して死去されましたが、別に自宅に引取つて世話はされないでも、蔭になり日向になつて、親にも勝るやうに世話をして居られる。のみならず、近所の黒坊の住んで居る町の、貧乏人も隨分助けて居られます。正月や、クリスマス、又日本で新嘗祭、神嘗祭と云ふやうな竟り感謝祭が十一月の末にありまして、この感謝祭の風習として、七面鳥、鷄、パイなどを供へる事になつて居りますが、貧乏人はこれを求める事が出來ない、それ故にK氏夫婦は、これを買求めて數十の籠に入れ、また洗濯したる古着物などもいつしよに、貧民の家庭の人數、老若に應じて分配してやる。又たいろ〳〵の相談相手になつて、種々と世話し助けてやる。K氏に依つて慈善事業の興味を持つやうになつたと云ふ人が隨分でございました。

夫人は身體が弱い方でありました。良人は銀行に勤めて居られましたが、自分が寢て居つては、一日の疲れもあること、尚一層不快を感ずるだらうと、銀行から歸る時分には、出來得るだけ、床をはなれ、着物を着換へて、お待ちになる。さうして一錢半錢の仕立賃までも儉約して、それを滋養ある食物にかへて良人の膳を賑はして、終日の勤勞を慰藉し、獻身的につとめて居られる。良人も感謝の念に滿ち充ちて、天にも地にも掛け換への無い、愛すべき敬すべき吾妻よと、如何にも平和に、互に同情とよろこびを持つて、相愛されたのでございます。

或時立派な着物をお作りになりまして、私に、この着物は私に過當るでせう、一生着ないで終るかも知れないと申されました。なせかと聞きますと、近頃良人の職が上進した爲めに、良人と共に公衆の前に出なければなりません、その時にあまり見苦しい服裝をして居ると、良人の恥にもなるし、又着物がないから行かれませんなどゝは、妻として云ふべき事でありませんから作りました、併しこれを作る爲めにいろ〳〵と儉約し、仕立屋を雇ふて、私が手傳つて出來たものですから、價も安くて拵へる事が出來ましたと言はれました。

その時私は、夫人に、あなたの美しい精神は、實にダイヤモンドの冠を被つたよりも立派に見えますと申しました。

良人が病氣で入院せられた時など、夫人は病院の近くの旅館に泊つて。朝早くから夜遲くまでつめかけて看護されました。

日本では病氣見舞には病人の食べる事も出來ない、食物などを持つて行きますが、彼地では大概花であります。K氏の入院中、花が毎日〳〵幾軒からとなく來る、中には、おぢさんが病氣だから見舞に行くと云つて貧民の子供までが慕つて來る。夫人は又その花を、貧民病者に見舞にとの言葉のもとに分配されると云ふやうで、病氣中でも何時も夫婦は貧民の爲めにお盡しになりました。



雷門より銀座まで

葉山しげ子

南行の電車は一杯に込んでゐたが、隅の方にゐた職人が立てくれたので德子は腰を掛ける事が出來た。態と黒繻子の方を出して締めた帶の間から復りの切符を出して、是から帝國劇場へ行くにはどういふ工合に乘換たものかと幾度考へても〳〵、途中から或物がひよいと現れて、進まうとする考へを引戻す、德子は幾度でも快く引戻された。そこは向島の大分奥へ入つた閑かな〳〵料理屋で、青葉や青田や池の眞菰や蛙の聲や折々さつと夕立めいて降る雨や、心地よい初夏の自然に包まれた小座敷に清元の連中が十人ばかりゐる。黒人は丸髷に結つた品のいゝ師匠と、低い島田に結つた病身な師匠の娘と二人だけ、其二人と德子と女は三人ぎりであつた。

「十一時からと云つといても是だもの、女の連中はおめかしが長いので嫌になる」と師匠は不平ともつかず云譯ともつかず、德子に聞かせる目的でさう云つた。

けれども德子は別に寂しいとも思はなかつた。他の座敷に高座をこしらへて、三十人程の聽客の前に清元を語つた事よりも、樂屋から飛石傳ひに師匠の娘と相合傘で、片手に着物の褄を引上て演奏室へ行た事が德子は一番氣に入つた。師匠の娘は背が低いので傘の端を度々德子の鬢に引かける、其たんびに可愛い聲で「あら御免なさいよ」と云つては笑ふ。德子も「ほゝゝ」と袂を口に當てゝ笑つた。そこの處ばつかり幾度も幾度も頭の中で繰返されて、しまひには自分でも煩いと思はれて來たが、それでも德子はそれを自分の頭から追ひのける事が出來なかつた。

其うち車掌が切符を切りにやつて來た。丁度德子の前に、縮セルのインバネスを着た、垢ぬけのした、人の惡さうな若い男の四人連が皮にぶら下つて、帝劇帝劇と頻に云つてゐる。德子は慌てゝ又乘換先を考へ出した。そしてやつぱり考へつかぬうち車掌はもう前へ來た。

「あの……日比谷々々」と早口に云つて「三田線よ」と附加へた。

「三田行は須田町乘換、小川町でもう一度乘換です」

「二度乘換？、厄介ねえ一度にしてくれない？」

車掌はニヤ〳〵笑ひながら、

「どちらへ入らつしやるんです」

「帝國座の前で下りやうつて譯なの」

「だから尾張町がいゝんだよ、あれが一番近いんだ」

とインバネスの一人が云つた、無論車掌に向つて。

「あらさう？」、と云ふと殆ど同時に徳子は、何處からてんな輕い調子が出たかと自分で驚いた。そして何かとんでもない事でもしたかのやうに、暫く胸に小さな浪が打つた。

「すると……………」と車掌は乘換切符にペンチを押當て「五人さん御一じよですか」と今口をきいた男の顏を見た。

「連れぢやないんだよ偶然さ」

「ナニ隣りの人なんだよ」

「旅は道づれつて云ふのかね」

「はゝゝゝ」と四人で面白さうに笑つた。徳子は其時より形を正してニツコリともしなかつた。

帝國劇場へ行くのも、新しい女優を見るのも徳子は今日が始めてゞある、建築中には電車で前を通る度に出來たら人より先に行て見やうと思つてゐたが、いざ開場となつて何處でも此處でも帝劇々々と云ふ聲が高くなつたら、行て見る事がふつと嫌になつて了つた。親類も友達も周圍の人は殘らず、舊弊な兩親迄出かけて行つた中に、たつた一人名高い初興行を見ずに通した事が何となく快かつた。それで人が、

「まあゝなた御存じないんですか」と云ふと、

「えゝ、つひまだ」とおとなしく笑つてゐた。

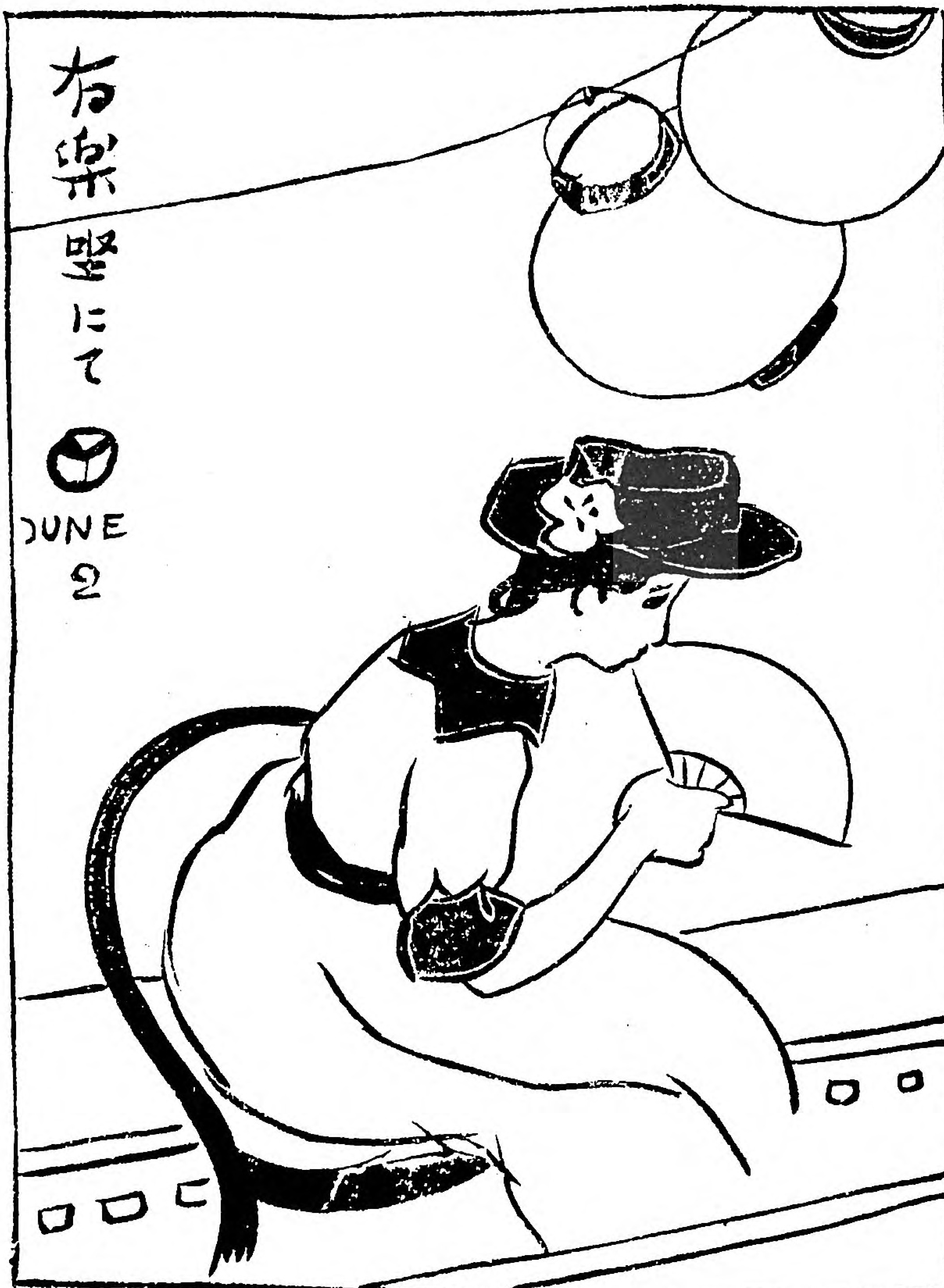
四時開場と云へばもう今頃は序幕が開いて、自分より二つ三つ位づゝ若い、美しい女優が花やかな技を演じてゐる頃だと思つたが只思つたゞけの事で、一刻一刻と背後に遠ざかつて行く向島の印象に、やつぱり引戻されがちであつた。

銀座迄はまだ幾つか澤山な停留場と、かなり長い時間とがある、それを時計の針と電車の速力とに預けて自分は安全に自由に、好きな事を考へる事が出來るのだと思ふと徳子は胸がむづがゆいやうな快さを感じるのであつた。尤もかうした心持は今日始めてゞはないのだが、いつもは其快いものを繰り出し〳〵してゐるといつかどんじりに暗い冷い自分の家が錘のやうに附て上る、今日は其錘がプラチナのやうな劇場である。胸から頭へと引上げ〳〵する絲のやうなものも、プラチナの錘にふさはしい光あるもの——少くも徳子には

さう思はれる——であつた。晝の半分を清元のおさらひ、夜の半分を劇場で費す事が珍らしいだけそれだけに徳子は此日を愛さぬ譯にはいかなかつた。

淺草橋へ來るとどかどかと前がすいて、國技館の大きな圓い屋根が見えた。インバネスの四人連は徳子から左の斜向へ腰掛て、あふむいて廣告を見ながら相變らず面白さうに高聲で話してゐる。それから何人か隔て左の方に、同じやうなセルの着物に絽縮緬の羽織を來た三人連の若い藝者が、紅い紐で括つた新聞紙包をてんでに持て乘つてゐた。徳子はいきなり立て行つて其一番左にゐる、色の白い銀杏返の藝者を打つ眞似した。

「あら」と、向ふも非常に驚いたと見えて笑顔さへしな



かつた。清元の稽古で知合になつた米龍と云ふ藝者である。二ヶ月程前に何か德子には解らぬやうな事情があつて鞍替をした爲に此頃は稽古に來なくなつた。女の連中は娘も藝者も隨分大勢來る中で德子は一番米龍が好だつた。何處か東國の方の人で、まだ國訛もほんとに脫け切らない、うぶな、しとやかな樣子が、ともすると德子に藝者と云ふ事を忘れさせた。

「さらひつてしませうよ」と云ふので、一度其人の抱へられてゐる藝者家へも行つた事がある、そして見臺の上へ鰻の丼を二つ乘せて一しよに喰べた。けれども德子は自分が藝者の友達であるとは思へなかつた、米龍が淑女の相手になるやうな藝者なのだと思つてゐた。鞍替の理由に就ては師匠も他の藝者も、居合した男の連中も一しよになつて口ぎたなく誹つた。德子は其人達を憎いと思つたが直に又、藝者と云ふもの丶生活を知らない自分は實際どちらを信じ、どちらに同情してい丶のか、恐らくどちらをも信用し同情する權利のない事を知つて其問題は投り出した。そして誰か米龍の代りになる人をと探したが、藝者の中にも素人の中にも氣に入つた女は一人もなかつた。

「お一人で何處へ？」

米龍はやう〱落着たと云ふやうな顏つきをしてから云つた。

「向島へ」と云ひかけると、

「あ、お師匠さんのおさらひでせう、あら、私も行けばよかつた、まあお掛けなさい」と立ちかけると隣にゐた男がふいと立たので德子は其後へ掛けた。

「私よつぽど行かうかと思つたんですよ、けれどもあなたが入らつしやるかどうか解らないし、電話をかけやうと思ひましたけれど掛けてい丶か惡いのか解らないしねえ、まあほんとに惜しかつた、××さん來てゐましたか、××さん來ました？」と二三人の名を立續けに云つて訊いた。德子は其一人もまだ來ない由を答へて、

「まだ始まつたばかりですもの、私是から芝居へ行くから早く歸つて來たの、ほんとにあなたが入らつしやれば私もどんなにかよかつたのに、今度何かあつたら電話をかけますわ」

二人は電話の番號を敎へ合つた。

「ちよいと鉛筆持つてない？」と米龍は連の藝者に云つた。

「有りますよ」と德子は帶の間から手帳を出して自分

の番號を記し、其ページを引裂いて與へた。米龍はそれを小聲で讀んで、一寸押頂く眞似をして帶の間へ入れた時德子は他のページに鉛筆を走らしてゐた。

「新橋でしたねえ」

「えゝ××番――×三桝。私は×奴と云つてますから」と肩を押つけるやうにして手帳の表を覗き込んでゐたが、德子が記し終つて帶の間へ藏ふのを見て、

「雨に逢ひませんでしたか、私今日は酷い目に逢つたんですよ、觀音樣へお詣りして公園をぶら〳〵歩いてゐたら、ざあーッと云ふ吹かけでせう、それから宮戸座へ入つたら醉ぱらひがゐていろんな事云ふんですよ怖くてしやうがないから出ちまつたの。ねえちよいと」と、聲を高めて、「隨分いやな奴だつたねえ」、と連の方を向いた。二人の藝者は默つて頷いた。其一人はよく繪はがきで見る名高い藝者であつた。束髮に結つて一寸令孃風をしてゐるが、寫眞で見る程よくはないと德子は思つた。

　それから今米龍が芝居と云ふ事を云つたので德子は此人と或る役者との關係を思ひ浮べた。鞍替の理由の重なのは其役者故であつた事を、師匠や連中の符牒のやうな會話の中から見出した時、德子は米龍に欺かれでもしたやうにくやしかつた。其譯は、稽古に來る商家の若主人で皆の女から好かれてゐる人がある。德子も其人と打解て話でもした日は、決して嬉しいのではないがいゝ氣持だつた。藝者は勿論、やつと十五六の娘達迄がぢやら〳〵して、お世辭を云つたり笑談云つたりする中に米龍一人は超然としてゐた。況て自分は淑女であると思つて德子は、ともすれば襲つて來る嫉妬――とでも云ふより外名づけやうのない妙な心持を追ひのけ〳〵してゐたのである。其男は今日向島へも來て、德子が師匠の娘と相合傘で飛石を傳つた時背後から見てゐた筈である。德子は何か其人の噂をしたく思つたが、取立てゝ人に話す程の印象もなかつたのでお天氣が惡いの、暑くなつたの、夏は嫌だのと平凡な話をしたり止めたりしてゐるうちに銀座へ來た。「今度電話掛けますよ」と別れ際に米龍が云つた、德子は「米龍と云はずに」と云はうと思つたが態々斷る程の必要は多分なからうと思つて其儘出口へと歩いた。外は大分雨が降つてゐた。

風呂敷の包むにあまる團扇かな　　太虛
あまた蚊の血にふくれゐる座蒲かな
手から手へうつしわづらふ螢かな



番町日記（二）

山田邦子

歌を詠んでも、詩を作つても私のものには才氣が見えるといふ、――いやだ、實にいやだ。私は自分の書いたものが、才で扱つてあるとき程いやな氣持のする時はない、私は才あるが故に眞率を缺いてゐる、眞面目を輕忽にしてゐる、事に出會ふ毎に私自身の心の中には、眞率よりも眞面目よりも何よりも先に、先づ才が逸早く瞳を開く。何といふ嫌な性格だらう、是ではならぬと抑へ〳〵て、眞面目を眞面目に取扱つたものを書いてみるが、人は矢張り私のものは才で書いたものゝ方が、却つて何かと言つてくれる。私の心は絶えず苦しい、私の本性は絶えず淋しい、言はうやうない此心もち。而して私は自分ながら夢にも天才でないとは知り切つてゐる。

二人は日比谷公園に入つた、女はもう十時過ぎだらうと思つた。空には月も星もない夜で、青葉の強い更けてゆく匂が、むつと腦に迫つた時、女はたまらなくびり〳〵とヒステリーが全神經に傳はつた。『どうしたの』『……』無言で此心が男になんか分るもんかと唇を噛んでゐた。ざわ〳〵と濕つぽい風が咽せかへるやうな夏木立の匂をゆすつてゐる。名も知らぬ實のやうな花がしつきりなしに、梢から地上へこぼれて來る。女は稍汗ばんだ全身に、しつとりと絡み付く着物の肌ざはりにいら〳〵しながら、こんな晩に散る花は肉の斷片のやうな花だと、厭なことを思つた。ひつしゆひつしゆ、さわ〳〵と噴水の音が聞え出した。青葉の伸びやうとする強烈な匂ひ、月も星もない夜の鬱陶しい空氣、それを搖り動かす重くろしい風、其中を歩いてゐる。醉はれない……其くせ離れられない青春の過ぎた戀、女は噴水の音を聞くとたまらなくなつて『あゝもう知らない！』と叫んだ、男は『又ヒステリーを起してゐる』と不快さうに云つた。

眼の縁が稍凹んで、何處となく痩れが見える、赤い紐を括けてゐる私を、ランプの灯は斜に射した。番町

の夜は靜に更けてゆく、物の足音もしない。『信濃』と云ふ名、十八と云ふ言葉、今はそれも遠くなつた。あれ程戀しかつた、あれほど懐しかつた故郷よ、我が青春よ。戀と涙と赤き血と、其美しきものを育んでくれた高い山、透徹つた靜かな水、落葉松から落葉松を潜つて四十雀は鳴いて居やう、山ふところの緑に交つて燃え立つやうな躑躅も咲いたらう、美しき夢敷きし丘、快よく我等の遊びし野。あゝ吾が故郷に抱かれて來た二十年の永い親みよ、其誇りよ。――斯くして全くそれから離されたる我が成長、――括けあげた赤い紐、更けて行く燈火に私は初めて赤い色を見たやうな氣がした。

日本の女は無責任を平氣でする、義務の觀念が乏しい。普通一般の道德、例へば忠孝と言ふやうなことには、流石に立派なものであらう。然し個人々々の精神から出立して、自ら信じて動くものが幾人あらう。其證據には、然ういふ一般から定められ、明かにされてある道以外に、一歩でも出やうものなら、もう平氣で――否、氣が付かないのかも知れない――無責任なことをする、義務の觀念の無いことをする。そして其をはづかしいとか、おとなしいとか云ふものゝ陰に隠て更に怪まない。蓋し女の集會の振はない所以、無意味な原因、何の爲に集まつたのか分らない抑である。新しく醒めた女と人も云ひ、自らも然う思つてゐる會にすら、普通一般の女の會に比べて、何れだけの意義を見出すであらう。勿論醒めると云ふ事は、はねかへりを意味するものでは無い事は今更述べる必要はない、女が集會の場所に於て未知の人の爲に手足を働かせる義務的の觀念と、お茶を運ぶことでも各の責任を重んじてすると云ふ思想とが、理解し、實行されたら、それでも女の進歩である。

新井勘司さんが死んだと言ふ、私は喫驚した。若い人の死には餘韻がある、私たちは死ぬのであつたと今更ながら驚かされた、あゝ死？。死の間際まで和歌を作つてゐた現代の青年には何んな響があつたであらう慰安であらうか、慰安とは弱いものゝ云ふことだ、充實した自己の表白、誇り、生命、それらを把持して而かも死に面した時の君の心は何うであつたらう。

内面的生活をしてゐた人の若い死を聞くと粛然とした人生の眞面目な努力を考へる。

巷のあかり

はやぶさ

感謝

月にも星の光にも、とほく別れをつげて來しか、永久にわが世は白日かとおもはるゝ晴れし日の午後二時人波の中におされて校門を出でし時は、疲れてわが心も足も重かりしかど………。

右に去り左にわかれ、いましづかなる土手の中すゞしき松の下道に見ゆるはたゞ、紫のいろなまめかしき傘ひとつ、肩もすれぐに語りゆく二人のみとなりぬ。

あはれ、そもいつまで、いづれの日までつゞく此の若さぞ。

高き天を凝視すれば、眸は吸はれ溶け入りて明るき青の一色のみ胸の隅までひろごりゆく。光！たゞ光の世界！。

わが目よ、疲るとも地に落つるな。

されどいかにせん綱はらぬこの聴き耳。

十歩とははなれぬ友が、かるくはなやかなる笑ひ聲は音樂のごと胸に入りて、その媚のまなざしを鮮やかにも浮べ出す。

赤きリボンかざせる年少き人の名は知らず、傘さしかくる他の一人とそかつては幾度か蜜の如き言葉もてわが胸の扉にさゝやきけん、いつまで甘きゆめの覺むるを知らぬわが友よ。赤きに倦み、紫をすて、そこと も知らず花より花に舞ひうつりゆく蝶よ。『一度さゝげて足らず、轉じて他に賣る玉の價いくばくぞ』と人は云ひき。

されどいま、我はとがむまじ。

たゞその若きがゆゑに美しきがゆゑにのみ、君が命よ永久なれ。

天にも地にもみち溢れたる、若葉の洪水、みどりの洪水、その中に洗禮をうくる人の子ら、おゝ自然よ、我はひざまづかむ……。

白き蝶

月光は蒼くさまよふ——
さびし古城のかべ

星のごとく咲ける野うばら――

あゝ若き悲哀の美しさよ。なつかしさよ。いくたびかくりかへすうち、痛き心、いつとしもなくしめやかなるゆめに吸はれゆきぬ。

槙子さま、およろこび下さいませ。こゝに自覺したる一人の女は、あやふくも生命つなぎとめて、わが信を固く守りて、光明を認めつゝ、悲壯極まる擧に旅立ちますの。

つめたき椽の柱にあつき頭を凭せて――。しづかなる胸の鼓動。

夕ぐれ、絶えまもなく雲とざしながら、つかのまを雨は小止みぬ。植込みの柔きみどりはいと幽かにもうたふ。沈める空氣の中に、氣味わるく青白き紫陽花よりほか、色添ふるものもなき庭はたゞ狹く、たゞ佗し。

眼はおのづから、おき臥せる忍び返しまばらなる塀をこゆれば、いかめしげに眉を壓してたつ向側の石の塀、古苔の黒くぬれたる上に、大樫のおほひかゝれるアラビヤンナイトの繪にみるがごとく、更に幽玄の空想をいざなふ。

此の沈める畫の深き靜止の中に、たちまちうごきひらめける影あり。

宛らゆめよりぬけ出しもの丶如く、ひら〳〵ひらひらと塀をこえ、梢をぬひ、つひに青ばのおくふかくまぎれゆきし、たゆげなるま白きつばさ二つ。

おゝその消えゆきし刹那よ。美しきまぼろしこそわがひとみにうつりしか。

かつて希臘の書にまみえしヸナスの神にや在さん、石の塀の苔の青きにゆたかなる半身を凭せて――若葉たゞ青きのみ、淋しき若葉。

すきとほる肌と、やはらかき曲線と、そこに見出す調和の美しさ！

詩にあこがれの幸福は、たゞ若き日にのみのたまもの、儚きはそのさがなれど。

風もなく音もなくしつとりと重き單衣の袖もうごかず。音なき雨煙、の雨は濛々と又天地をつゝみ來る。

あゝ暗きかな。

その中にわが胸はふと、草苺の紅き色と酸き香をいと強く、なつかしく、思ひ浮べぬ。

朝霧や一もと百合にまつはりて露と結ぶをあはれと見る哉　窪田空穗

はとゝぎす聲に驚き夢さめぬあはれ長くも眠れるものか　吉井勇



狸ちがひ

松並紫花

其の朝少し不快であつた父が、晝から一里餘りのところへ往診に行つた儘、夜の八時になるのに未だ歸つて來ない。

第一の心配は途中に最も危險な橋がある、川を上り下りする舟が通り得る樣に、又人も通れる樣に橋の中程を一枚板で架け外しの出來る樣にしてある、其の下は地獄の樣な恐ろしい青淵である、父はそこを通つて歸られる度に、今日は一足違ひで死にかゝつた、今日もあぶなかつたと話されるので、もう〳〵決してそこを通らぬ樣に、遠いけれど少し下つたら安心な橋があるから、そこから行かれる樣にと勸めたので、此の間からその方を通つてゐられるさうであるけれど、萬一又危險な方を通つて、水に陷て、泳ぐ術もなく、人も來ず、その儘恐ろしい淵の底に橫たはつてゐるのではあるまいか。それとも朝來の不快が重つて患家で寢てゐるのか、それも知れぬ、然しそれなればそれと通知があるべき筈である。と思へば思ふ程棄てゝ置れぬ。夫は遠方へ行つてゐるし、弟は學校の寄宿舍に、今日は丁度土曜ではあるけれど、前の日曜に歸つた時、今度は歸らぬ筈にしていつたので待つたとて歸つて來る事ではない、家には一人の妹と、今は世にないが其頃丁度這ひ廻つてゐた私の娘の里香と許り。人に賴めば直ぐ行つては吳れるけれど、人を騷すにはまだ〳〵早い。それよりは自分で患家まで尋ねて行つて見樣と思ひ決して妹に留守をさせて、里香を温うに脊負うて、提燈を點けて、マッチは袖に、麻裏草履引かけて家を出た時は十月中旬、舊曆は幾日やら、月は出さうにもない實り重つた稻穗に夜風さら〳〵と、露置き侘ぶる秋草に鈴蟲松蟲皆それ〳〵にないてゐる。

ア、父上よどうぞ〳〵無事で………。

母の脊中の嬉しくてか、未だ眠りもせず小さい手を中でそ〳〵動かしてゐる里香を片手で搖り上げて、「母さんに負して祖父さんを迎ひに行きまする、〳〵、祖父さんはまだ戾らんかいな、〳〵〳〵」繰り返し繰り返し斯う云ふ自分の聲が靜かな暗に冴え切つて淋しう響いて消えてゆく。

最初から遠い方の橋へ迎ひに行く心算故其橋のある

堤へ驅け上つた。兎も角も橋守に聞て見樣と思つて、もう高鼾で寢入つてゐるのを外から起して尋ねて見ると今日は通らなかつたと、寢恍聲で賴りない、「晝過ぎに白犬連れて通りませんでしたか」と念おして尋ねると、さう仰しやれば晝通られた樣に思ひますと曖昧な返事で慥でない。然し八十越した橋守だものそれも尤である起して氣の毒な事をした、いづれにしても患家を訪ねるに不如と思つて橋を行きかけたが、提燈をのぞいて見れば蠟燭がもう一寸程になつてゐる、尙一本用意してはゐるけれど、歸るのに一本は是非要る、此の邊は折々通つた事もあるけれど、父の行つた家はどのあたりやら只鳥居といふ苗字丈けが宛で方角さへも知らぬのであるから、勝手知つた今の内に蠟燭の儉約をして置かぬと先きでどう困る事があるかも知れぬと思つて、フッと吹き消した。然しそこには橋の袂の瓦斯燈が、白い光を廣く投げてゐるので、浮雲ない事はない。

••橋の中程まで歩いて來たが、不思議に心が後へ引か



れて、先きへ行きたくない樣になつた。そして、父は今日例の危險な橋の方を通つて私と行き違ひに家に歸つてゐられるかも知れぬ、萬一さなくば其の橋で悲慘事が起つてゐるのである、兎も角も其のいづれにしても一度家へ歸つて見樣といふ氣になつて橋の中央に立つた、イヤ、こゝまで來てゐるのに、いつそ行つて見樣――。歸らうか――行かうか――さらでも朦朧とした頭腦は只亂れに亂れて仕舞つた。

思ひ決して私は橋の兩端を見くらべた、丁度、橋の四分強といふところに自分は立つてゐるのであつた、先が六分、手前が四分の、此の橋の割合を、此の場合天の指揮と自ら定めて、斷然歸る事に定めて了つた。

歸るならば提燈をつけようと思つて袂のマッチを探つた時、靜に眠りかけてゐた里香がグス〳〵泣き出した、大かたお腹が空いたのであらう。其の儘叩きつけて寢さすも可愛想であり、それに道々泣かせ乍ら歸るのも……と思つて、心は矢竹にはやるけれど、道から二三間はいつた磧の中の萱原の中へ坐つて、大急ぎで乳を飲ませたが、飢かつたのであらう、何にも知らぬ子は場合も場所も知らずに、際限なく飲み續ける。無理に離せばすぐ泣くだらう、飲せながら少しでも歩かうと思つて、立ち上りかけた其の時であつた。堤の上からバタ〳〵〳〵と二三人の人が驅け下りて來た、折が折故父の上を報ずる人ではないかと夢中に立ち上つて耳をすました。すると其の人々は皆知らぬ人の聲許り、それが面白さうにたはむれ合つてゐるので、僅にほッと胸撫で下したが、考へて見れば其晩は隣村の秋祭であつたので、其の宮相撲がすんだ歸りの人であらう。往來の眞中で、東――天麩羅獄――、西――釜鉾――などゝいつて呼び出して、やがてほんとに組合つたと思ふと、直ぐ投げられたかドッと大笑ひ。

今にこゝを通るのであらう、さぞ不思議がるであらう、いつそ其の人達が行き過ぎるまでと思つてもとの所へそつて坐つて待つてゐた、そこを丁度通りかゝつた時、其中の誰かゞ見付けて仕舞つて皆に告げたものだから、どうして見逃して呉よう、それでも氣味が惡いのか怖る〳〵近よつて來て、口々に「何ぞ」「何ぞ」「乞食か」、「行き倒れか」「男か」「女か」と、一張燈した提燈をさしつけてのぞきに來る、默つてゐる譯のものでないと思つて、「乳を飲ませてゐるのです」と云はうとして亂れた束髮の顏を上げると、飛び上る程な頓狂聲で一度にヒヤ――イ――奴狸ぢや――イ！と橋桁な

ちらして提燈の首も切れよとばかり、韋駄天走り。天數羅獄も釜鉾も眞黑になつて逃げ出したその可笑しさ。逃げた關取より逃げられた奴狸の方がいくら吃驚したやら、それにしても人を騒がした自分の罪は小さなものではないなど思ひ乍ら、漸く眠りかけた子を負うて今度は提燈をつけて、堤を一散にかけ下りて、くねり〱つた野道を辿つて廣い往來へ出樣とする角まで來ると思ひがけなくもチヨロチヨロと驅て來たのは夢ではない、まがふ方もない「白」である、マアと思ふ内にも「白」は私の裾に狂ひ縋つて歩きも出來ぬ誰に從いて來たのかと向ふを見ると、人影が動いて來て、



姉さん！……思ひもよらぬ弟の聲である、「マア四郎さん……」と云つたが急に後が出ぬ、「お父樣戻つとる」——尋ねぬさきから答へて呉れる嬉しい一言……思はずそこに立ちつくした。「心配しただらう」と弟は脊中の里香をのぞきに來る、「心配したとも、ほんとに歸つてゐるの……生きて」……とつひ安心のあまり念をおしてみた。「ハヽヽ」と弟は晴やかに笑つて、「生きとらずに戻るもんか、白が戻つとるのに」と眞面目に云ふ、ヤレ〱安心した、夢かと思ふ、それにしても歸らぬ筈の弟がどうしたのかと尋ねると、それは少し先きで行く筈であつた旅行が急に行く樣になつたの

で、其の旅費を貰ひに遲くから歸つたところ、丁度父が歸つてゐたところであつて姉が此の方角へ迎ひに行つたといふので、今人を以て迎ひに行かうとする所であつたので德島から歸つた足ですぐ弟が迎ひに來て呉れたのであつた。そして父は思つた通り連れがあつたので例の危險な橋を通つて歸つたので、私と行き違ひになつたのであつた、何となく虫が知らしたといふのか、橋から先きへ行きたくなかつた。

弟は切に里香を負うてやらう〳〵云ふものだから又下して、其の廣い脊中に入れて渡すと、不格好に搖ぶり乍ら、「叔父ちやんが負うてやるぞ」、「泣くなよ」、「祖父ちやん戻とるぞ」、「叔父ちやんにおんぼして、祖父ちやんのとこへ歸の〳〵〳〵と不調法に歌ひ乍ら歩く。

私は急に身も心も輕くなつて、物忘れをした樣に、昔は小さかつた、今は大きな弟に從いて歸つてゆくのである。先へ〳〵とチヨロ〳〵走つてゆく「白」の白い毛色が暗の中にハッキリと、すべての無事を脊負うた樣に驅けてゆく。

* * * * * *

新刊

○瀬戸内海　『みづゑ』增刊

大下藤次郎氏の主幹してゐる雜誌『みづゑ』の增刊で、大下氏が吉田博、小杉未醒、中川八郎、渡部審也の諸畫伯と瀬戸内海から四國九州を漫遊した時の繪と紀行文とを一冊にしたもので、原色版、寫眞版、木版畫などに附せられた風景畫が澤山ある、繪も面白いが紀行文も面白い、彩畫に現れて居る暖かさうな南國の空氣は最も愛玩すべきものである（小石川區關口駒井町春鳥會發行）

○夜の舞踏　人見東明著

人見東明氏が第一詩集である、氏の詩は近來著しく進んで來た、此一冊に於て其詩風を窺ふことが出來る（定價金九十五錢、神田區神保町上田屋發賣）

○思ひ出　北原白秋著

北原白秋氏が幼時の思ひ出を歌つた一巻の詩集である、全部六號活字二色刷の特色ある製本を以て世に表はれた、以上二書とも近來の詩壇に注意すべき著述であるから次號に少しく批評と紹介とを試みやう（定價金九十錢、京橋區東雲堂出版）

○魔の曲　高安月郊著

藝術家を題材とした現代式の小說である、描寫はすら〳〵として讀み心地は好いけれど、內部の力が足りない、只此小說が作者の眞面目なる勞作の結果として推奬することを憚からぬ、製本は頗る贅澤である（正價金壹圓神田上田屋發賣）

○殘されたる江戶　柴田流星著

江戶が東京となつてから、江戶の風俗習慣は刻々に滅びて行く〳〵、滅びて行く〳〵ものゝ間に潜んでゐる興味を捉へやうとしたものは本書の目的である、殊に此頃は東京研究、江戶研究の聲が高いから歡迎せられるであらう（定價金六十錢、麴町洛陽堂出版）

○春光　好文會編

金子元臣、武島羽衣、鹽井雨江、阪正臣、池邊義象など云ふ所謂國文學者の國文を集めたもので、古雅な文章を味はうとする人には好摸範であらう（定價金四十錢、神田錦町一明治書院出版）



御嶽登山記

水仙子

▲御嶽山に泊る

日向和田の小さなステーションに降りたのは、丁度朝の十時二十分、結へつけ草履に紫のはかま、羽織をぬいで來ればよかつたと思つた。御嶽山の講中の人達が、何々講と書た小さな旗を立てゝ、ぞろ〳〵行くのを先へおひこして、ずん〳〵歩く。氣持がいゝ。

「どうだ車にのつて、車の行ける所まで行つた方がいいだらう、山へ這入つてから歩けないなんて云つたつて駄目だよ」と先へ行く兄樣がふりかへつて云はれる。私は初つから、とても歩けないだらうと云はれて、意地になつて、きつと歩いてみせませう、とごうじやう張つたのだから、

「大丈夫、御安心なさい、歩けないなんてそんな弱音は吹きませんよ。」と平然としてついて行く。眞青な空が一面にはりきつて、所々に綿をちぎつてつけた樣な白い雲がふんわり浮いてゝ、みどりこいお山がうつくしくそびえてゐる。白いほこりが無遠慮にパッパッと立つ。兄樣の黒い脚袢も、おつれのK樣のおくつもまつしろ、きつと私のはかまも白くぼかされて居るだらう、お二人とも中々早いのでおくれない樣についてゆく。橋を渡つたり、道を曲つたり、もう小一里も來たらうと思つてると、まだ半道も來ないよだつて一寸變な氣がした。途中で小さな男の子や、もゝわれやおたばこぼんに結つた女の子がちやんとならんで、丁寧にお辭儀をするのには少々きまりが惡かつた。前つから兄樣にうかゞつてたんだけれど、こゝいらの學校ではひげのはえた人や又洋服きた人、はかまはをりの人にはちやんとお辭儀をしなければならないと云つて敎るのださうで、さうしないと郡視學等が來てもわからないで、お辭儀をしない子があるといけないと云ふので——。

　岩の間から樋が出て、そこから高くざあ〳〵音を立てゝ清水が落ちて居るのを、下にたらひをおいて、お

かみさんが洗濯をして居る。山吹の花が時々ハラ〳〵と岩の上へちる。ハンケチで額へにじむ汗をふき〳〵それでもやつと、三里といふのを歩いて、お山へかゝつた。初はそんなでもなかつたが大分急な坂、日照坂とか云ふ石がごろ〳〵ころがつて、名の通り、日がまつすぐにあたつて、ぞしう氣味の惡い程汗が出て來る。足元が大分あぶなくなつて來て、とかく二人におくれがちになる。

もう直き瀧の茶屋があるから、と云ふので一生懸命茶屋のすぐ側の瀧で汗によごれた顔を洗つたり口をすすいだり、やつと生き返つたやうになる。そこでおひるをすますと、もう大丈夫、草履のひもをむすびなほしたり、はかまをはきなほしたりして、こんどは木のかげになつてる坂なので、そんなに苦しくはなかつた。すみれがうす紫や、こい紫にしとやかに笑んで、すぐ下の谷の水音がすが〳〵しい。岩にあたつて白くちる水、山櫻の白い花びらをうかべて流れる水、また山櫻がハラ〳〵と………。

せきれいが、せはしさうに尾を動かしては岩から岩へとび移る。途中もう一軒茶店でやすんで、四時半頃やつとの事でめざす家へついた。まだ新しい二階へ通されてすわつたら、もう足のうらが痛くてふみたてられない、ぢつとして、がらす戸を透して、遠くかすむお山や、すぐわきにあるこの山で名高い大欅等をうつとりとしてながめた。山うぐひすの靜になく音にまじつて、せきれいのりこうさうな鳴聲が可愛くひゞく。草の香のにほふ樣なみどり色の草餅やら、何やら心づくしのもてなし、心からよろこんでくれるのがうれしい。程なくお夕飯、山女の鹽燒が私には珍らしくておいしかつた。

御嶽山には家が三十七軒しかないんださう、それも東京の樣にすぐおとなりになつてないで、飛び〳〵なので靜と云ふより、淋しいと云つた方がいゝ。時々下で男の子のふく笛の音が、それもかすかに細くきこえるばかり。（二十二日）

▲面白い山あそび

所が變ると寢られないもので、それ共あんまりつかれたせいか、夜中にちよい〳〵眼がさめる、こはい程しんとしてゐる。

眼がさめたら戸のすきまから、光がさし込んで、遠く鷄の聲がのどかにきこえてくる。そつと床を出て音

を立てない樣に、戸を開ける。
　ぱつと眼の前にひろげられた美しい朝の景色。黑い程みどりこい杉や、山榫の若葉にまじつて山櫻の白いのが、赤い葉と一所に丁度極彩色の繪卷物を見て居る樣。うすくついてるランプを消して顏を洗ひに階下へおりる、山の中から湧く淸水はつめたく顏を引しめる。家へだのお友達だのへ出す繪葉書を買ひに行く。お山の朝はなか〳〵ひやひやする。此家の下女に出してもらふ。階下の男子が二人もうすつかりおなじみになつてしまつて、いろんな話をする。
　お宮へ御さんけいに行く人が皆私たちを珍しさうに見てゆく
おひるつからうらの山へわらびを取りに行きませうと云ふので御飯をしまふとすぐ草履をつつ



かけて皆と一所に出かける。途中わらびを折つたり、すみれをつんだりしてわざとみんなよりおくれて、ついて行く。随分けはしい道、石や木の根だのにつかまつて、それでも手のとゞくところにあるわらびをとりながら登る。初の内はやせて居るのでも、のび過ぎたのでもとるけれど、しまひにはいゝのばかりよる様になる。日出山と云ふ山へ登ついて、草の上へ坐つて珍らしい景色に見とれた。

あのきら〳〵光つてるのは玉川ですよと云ふ、まあずゐ分小さく…………。男の子はあぶをとつたり、蝶蝶をたゝいたり、丁度見頃のつゝじを折つたりして大さわぎ。

登る時にはどうにか、かうにか、登つたけれど、さあおりるとなると中々大變、ずる〳〵下からひつぱられてる様にすべる。日に照されていくら山の上だつて汗が出る程あつい、こんな苦しい思ひをするのなら、よせばよかつたと後悔しても、もうあとの祭り。でもまあやつと下られたけれど、いろんな物につかまつたものだから、手がまつくろ、血が出たりして、宿へついてお風呂へ這入つたら、やはり昨日と同じ様につかれてしまつた。（二十三日）

▲かたくりの花と山百合

「あッ、あぶない」自分の聲でめがさめた。厭だ寢言を云つて、昨日の道だ新ちやんが辷つちやつた夢、ホホヽヽヽ、でもお二人ともおめざめでないからよかつたけれど、昨日の朝よりいくらか早い様だ。戸を二枚ばかりあけて窓へ腰かけて、そとを見た。朝の新らしい空氣が、氣持よくからだへしみ入る、髪をとかして粉白粉を一寸はたいておく。其中二人とも起きられる。お山を通る人が丁寧に腰をかゞめて行く、この土地の人だらう。一體海岸等とちがつて、よほど人氣がいゝ。ましてこの山の人達は其中でも心持のよいものばかりだと云ふ。第一木こりなんかゞあんまり馬鹿氣た事を云つたり、さわいだりしない、三千數百尺と云ふ高さは、かうまで人の心を違へてしまふものかしら。

初め日本武尊がこの山に武具をさめて武藏と云ふ國名の源を作つたのだと云ふ。

その内下から堅ちやんと新ちやんが上つて來て今日ふじ峰へ行かうといふ。御嶽山の人は妙に言葉の後尾をあげる、そしてなと云ふのを多くつかふのできゝなれない私は一寸耳にさはる。昨日にこりたから結へつ

け草履で行かうと云つたら、昨日よりはずつとらくな道だから大丈夫ですよ、と云はれて、昨日のとほりのなりで…………。行く道にある山の井戸を見た。普通のとはちがつてひくい家の樣に屋根が出來て、水がすぐ上まで來てゐて、それを柄の長いひしやくでかい出す。風なんかちつとも無いのに、山櫻がはら〳〵散る、櫻ふぶき、あゝさくらふゞき、…………。道ばたに此土地でかたくりと呼ぶうす紫の、百合に似た花がしほらしく咲いてゐる。

山百合のたけ一尺ばかりになつたのが、そこゝにあるけれど、根が深くてどうしてもぬけない、やつとぬけたと思ても下の玉がとれてゐる。空模樣が大分怪しくなつて、つめたいしめり氣をおびた風がぞつと身にしみる。

御夕飯をしまつてからは、何にもする事が無い、女學世界が一冊あるけれどそれも皆よんでしまつたし、窓によつて眞黒なこはい樣な色の空を見る。いつもキラ〳〵してゐるお星樣も見えず、どこまでもどこまでもおんなじ色、遠くの方で瀧の音がゴーッとかすかにかすかに。早く戸をしめて寢る。（二十四日）

▲山中の霧、虹、雨

ざあ〳〵と雨の音、おやまの雨も又よいものだといふので飛び起きる。昨日まですぐ前に見えて居たお山や、杉の木なんか白い霧ですつかり包まれて、すぐ前の竹がすつとしなつたのが、それもぼんやりして見える。開けた窓から白い霧が靜に流れ込んで來る、大分寒いので持つて來たまわたを着る。今日は東京でも雨が降つてるかしら、たゞ雨の音ばつかり、外は霧でなにも見えず、可愛らしい小鳥の聲もきこえず、もうもう淋しくて、さむしくて。

おひる頃雨がやんで、きりがだんだんうすくなつて方々がやつと見えて來た。

「晴れたつて霧が上へ登るから、又降るよ。」と新ちやんが云ふ、おや〳〵上へいつちやあいけないのかしらと思つてると又サーッといふ音、今度はすぐ側の大欅も見えなくなつちまつた。

「今日なんぞはまだいゝ方なんですよ、いつもはな、足元がやつと見える位で水を汲に行く時大骨折でさ。」下女がお膳をさげに來て云ふ、でもだん〳〵明るくなつて來た…………。

「あ、虹！にじが出たから早く來て御らん。と云ふのであわてゝ窓ぎはへかけつける、とまだ晴れきらぬ霧の中から浮き出た天の橋、赤や紫の………、あゝ、うるはしのにじの橋よ。それもだん〳〵消えてあれあれと云ふ内、どこへともなくふつつりとなくなつて、淡い霧の絶え間から、露を含んだみどりの山が見えて來た。淋しかつた雨の一日ももう暮れて、空のお星樣のさゝめきもきこえはしないかと思はれて、かういふ夜におやすみの、黃金色の山吹の花が天へひら〳〵と登つておほし樣になるのじやあ無いかしら、しづかなそしてうつくしい夜。戶をしめるのがをしかつた。

（二十五日）

▲山の女は色が白い

今朝立つゝもりだつたら此家の人達がせめてもう一日……、奥のお宮を御らんになつてから、明朝お早くおたちなさる樣。とせつに留めて下さるのであしたの朝立つ事にする。前のやはりこの山の御師の家から手風琴のやさしい音がしづかに流れて來る。雨が降つても、どん〳〵ひくい所へ流れてしまふから、山の道は惡くはない。

パッとなげかける日光を全身にあびて桃割に結つた女の子がむしろの上へ坐つて、山から取つて來たわらびを、せつせとこしらへて居る。縞のつゝ袖に友禪の赤いおびを、小さくかひのくちにしめて、やはり赤い前掛をかけて、何て美しい姿だらう。つとめて美しくしようとするのではなくて、自然のまゝがうれしい。白い鷄が一羽なれなれしく側で餌をあさつてゐる。

此山の女の人は皆色の白いそして生々した元氣のある顏をしてゐる。私なんかきまりが惡い。其女達が肩へ水をけを荷なつて、水をくみに行く眞白な足をおしげもなく出して、素足にわら草履をはいて居る、實際美しい。おひるからK樣と兄樣とこゝの男の子二人と五人づれで奥の院へ行く、初はらくなもので小聲で唱歌なんかうたつてたんだけれど………。

七代の瀧へ來た、思つてた程大きくはないが、きれいな水流してしまふのがをしい。ザヤッとこけむした岩間から、水晶をとかしておとす樣な水、岩から岩へ飛びうつつて遊んでた新ちやんするりと辷つてころがつてしまつた。「わつ」と大きな聲で泣き出す、ホヽヽ、ホヽあの顏、ひざつこまで水にひたつてをかしいやら何やら。でも笑つても居られないので、いそいで側へ

行くと、K樣が着物をおしりはしよりにしてあげる、又そろそろいたづらを始めるので、あぶなくて目がはなされない。私だつて餘まり足元がたしかじやあ無いから人ごとではない、「今度は天狗岩へいから綾廣の瀧はよさう」と兄樣が又だれかがころびでもすると困るものだから。私だつてもうこんなつるつるする所は御めん、新ちやんの二代目なんかあんまり氣のきいた事じやない。

岩、まるで切りたつた樣な道、くさりにつかまつてうしろからおしていたゞいて、つめたい骨の中へしみ込む樣な岩につかまつて登る、あんまりこはくて汗も何もひつこんでしまつた。



天狗岩は谷の方へずつとつき出た大きな岩、その頂上に金で出來てゐる小さな天狗樣がある、右つ手の平なところにも一つある變な顏してることゝ

たつた一軒茶店がある、頭ばかり大きなお爺さんがお茶をくんでくれる、そこの干し柿がおいしかつた。この店で東京へ出す繪葉書を買ふ、そしたら私達へ一枚づゝ天狗樣の繪葉書をくれた、それにこんな事がかいてある武藏御嶽山大天狗小天狗御尊像……此葉書賣品にあらず、天狗岩登山の君へ紀念の爲め進呈御嶽山巖上亭だつて、巖上亭なんて云ふとさも立派な樣だけれどホ、ホ、、、。

疲れた足をふみしめ〳〵やつと上の茶屋のある所まで來た、皆は休んでから又上へ行くと云ふけれど私は一人殘つて居ると皆ぢきかへつて來たのですぐ今度は別の道から下る。

「あ、あうむ岩へ來た、呼んでみやう」と堅ちやんが云ひながら「新ちやんKさあん東京の姉さあん」とありつたけの聲で吐鳴と、向から新ちやあんKさん東京の姉さあんと小さくてだまに響いて、ホヽヽヽをかしい。堅公の馬鹿あ、おーいなんて勝手な事を云ふ。「新ちやんありまりさわぐとおいぬ樣が出てよ」と云ふと、「うそだい、おいぬ樣は惡い事をしなければ出ないんだよ」だつて、此土地では狼の事をおいぬ樣と云ふんだつて、いたづらなんかしてもそらおいぬ樣がといふとよしてしまふのださう。

家へかへつて坐るともう動くのがいやになる、水で顏を洗ふとさつぱりする。なんだか腰がいたくつて、あしたはてゝをたつのかと思ふと、何となくなでりをしい。（二十六日）

▲下山

一人で山の方へぶら〳〵散歩する。手のとゞく所にある山吹を四五本折る、朝露がつめたく素足へこぼれる。朝の御飯を手早くすまして仕度をする、色々山の名物を下さる。堅ちやんと新ちやんでそこまでお送りおしと、やさしい母樣がおつしやるので二人は荷物をもつてくれる。

「もうたくさんだよ、あんまり遠くまで來てかへれなくなつちまふといけないから、ありがたうよ。」と兄樣が荷物を受取る。

私達三人は坂を下る。「じやあ又秋にきつとお出ね、桔梗を折つて上げるからね、さようならつ。」何て可愛いんだらう。「オーイオーイ」いつて遠くなるまで呼んでゐる、本當に可愛……………。もう聲もきこえなくなつてしまつて、あたりはたゞ鳥の聲ばつかり、ふりかへると杉の木立の間から家がチラチラ見えて…………うぐひすのこゑがうら淋しく聞えて來る。（二十七日）

序に申します、武藏の御嶽山は東京から最も近い山岳の一つで、中央線で行けば、立川驛で乘換へ青梅か日向和田から登山するのです、約三四里、東京から一泊がけの登山には適當な地で、山に馴れない婦人にでもさう困難を感じないで登れます。



當世嫁探し

M 女

私は此の頃結婚された方から、嫁を探して歩かれた時の御話を承りましたから、其の聞いた儘を書いて見ませう。

▲十里の道を駈廻る

僕は友人のT君を賴んで、嫁探しにと八里から十里位の間を歩き廻つた。此のT君は自稱新聞記者と云ふ位なので、女など探したり、人を訪ねたりする事がなか〳〵上手い。で先づ第一にT君の知人の許に連れて行つた。其の家は老夫婦二人と、孫娘のHさんとの三人暮しで、多くの不動產を持つて、豐かに暮らして居る、卽ち僕の目的物は其のHさんと云ふ女なんだ。

僕の家はこれでも長野縣下でも、多額納稅者の中に指を屈せられるので、家柄としても相當の嫁を貰はねばならぬ。而して僕は少くとも、女學校位卒業して居ねば厭だと思つた。

二人はズーと其の家の中に入つて行つた、すると直ぐ暗いやうな座敷の中から出て來たのは、くつきりと色の白い女だ。赤い顏もせず活潑に僕等を招じた。其の應對が何となくスッキリとして快よかつたし、老夫婦が隔てなく引き止めるので、其の夜は其家に泊る事にした。

僕は全く眞面目に理想的な女を探すつもりで、決して一寸見て心を動かして、其の爲め一生を誤るやうな事は爲ない決心だつたので、どこ迄も女を試る積りであつた。

時は冬の事であるから、其の夜は皆炬燵に寢た。するとあられもない姬御前の、人もあらうに初めての客の僕の足の上へドサリと其の足を載せた、僕は直ぐこれでは駄目だと思つた。行儀が惡い女は家を治める事は出來ないと思つて、Hさんに心を移さなかつた。

▲口が耳迄裂けて居る

或る大きな百姓家であつた。其處に女學校を去年卒業して、今は裁縫を習つて居ると云ふ娘があつた。それを目的に先づT君が一人先へ這入つたが暫くして出

て來た。
『君什うだつたね？』と聞くと、
『駄目、駄目』と手と頭を振るので
『何故だい。』と聞くと、
『まあ君斯うなんだ、僕が突然這入つて行くと、母親らしい小さい丸髷の女が居たと思ひ給へ、而して僕の洋服姿を見ると丁寧に、誰方樣で御座います、と云ふからね、僕は新聞記者だがと云つたが、偖て何と云つていゝものかと考へると、丁度遠くに小さいお寺が見えた、で直ぐ、彼の御寺の御僧さんは此方に居ませんかとやらかした、いいえ。と不思議相に云ふからね、實は僕は△△町の者ですが、其の御僧さんに御目にかかりたいのです。お寺で伺ふと、若しか此方に居るかも知れないとの事で、實はお訪ねしたんですが。と云ふうちに、幸に娘が出て來た』と迄T君は云つてスタスタと歩き出すので、
『で、什うしたんだね。』と聞くと
『止し給へ。止し給へ。それこそ彼の口じやあ君を食つて了ふかも知れん。』
『何故？』
『口が耳迄裂けて居る。』

▲實に不潔な住居

例の通り二人で出かけた。
小學校の女教員をして居る娘に美人があるとの事でそれは僕の町から八里隔れた×町で、牛乳屋を營む娘の多い家の四番目の娘だと云ふ。先づ第一小學校に行つた。T君は例の通り新聞記者と觸れて縣下でも一二に數へられると云ふ莊大な小學校の正門の玄關から上つた。すると僕等の姿を見つけて、教員室から出て來た可愛顏のハイカラな女教員がある。直ぐ僕等を案内して應接間に通した。T君は其の教員が去つた後で彼れが目的のKさんだと囁いたので僕は驚いた。それから校長に合つて案内されて附屬の裁縫講習科へ行つた。此處こそは娘ばかりだ。其の歸りにそつと裁縫の女教師を呼んで生徒の事など内々に聞いたが、一番褒めたのは○○家と云ふ村でも財産家の二人の娘であつた。其の話を小耳にはさんで、兎に角女教師の方を調べる事にした。
又二人は牛乳屋に牛乳を飲む客となつて這入つた。這入つて見ると驚いた。實に不潔だ、牛乳など飲む氣にはなれない。女教師のKさんと云ふ娘の癇高い聲が

して居る。見て居ると一疋の猫がノソリとやつて來て
其處にあつた牛乳をペチヤペチヤとなめだした。
『君全くやりきれないね。出やう。』とT君は流石驚い
て飛び出した。
『全く不潔な家だね。あれぢやあ娘達の事も察せられ
るね』と僕は嘆息した。

▲火鉢の火のいけ方

或る大きな店へ煙草買ひに寄つた。而して此の町で評判の娘を聞くと、××屋の娘、〇〇屋の娘と敎へてくれたが、××屋の娘は此の町第一の美人だが餘り溫和過ぎて商家にはむかないと云ふし、〇〇屋の娘は凄い程のハイカラで、東京に三四年住むで、外國人の學校へ出て居たと云ふ、これも商家には向くまいと云ふのであつた。然し私の親戚に幾人も娘があるから見て吳れとの事で、委しく聞かれる事だけは聞いて、次の日再び先の小學校へ引き返した。

附屬裁縫講習に居るとの事で、又裁縫の女敎師に會つて、其の娘は誰だと聞くと、それが此の前お話した姉妹の娘だと云ふのでかいま見た。二人とも實に美人だ。姉の方は既う十八九のやうだが、妹の方は未だ無邪氣な十五六だ。

『君美人だね。』とT君も流石斯う云はざるを得なかつたらしい。然しあからさまに褒める事も出來ないので、二人はよく掃除の行き屆いて居る事を褒て歸つた。

今度は其家に訪ねて見る事にした。

二人は謹んで大きな門の中へ這入つて、此處の主人は盆栽が好きだと云から盆栽を見せて貰はふと願つた。時は冬の事であつて盆栽とは寧滑稽だつたので、幅物を見せて吳れと申し込んだ。

書生らしい若い男が出て來て主人の座敷に案内した主人は好む道の事とて喜んで色々の名幅を見せて吳れた。遂にT君は娘を見に來たのだと云ふと、勝手で立ち働いて居た娘に、火を火鉢に持つて來るやうに言ひつけた。

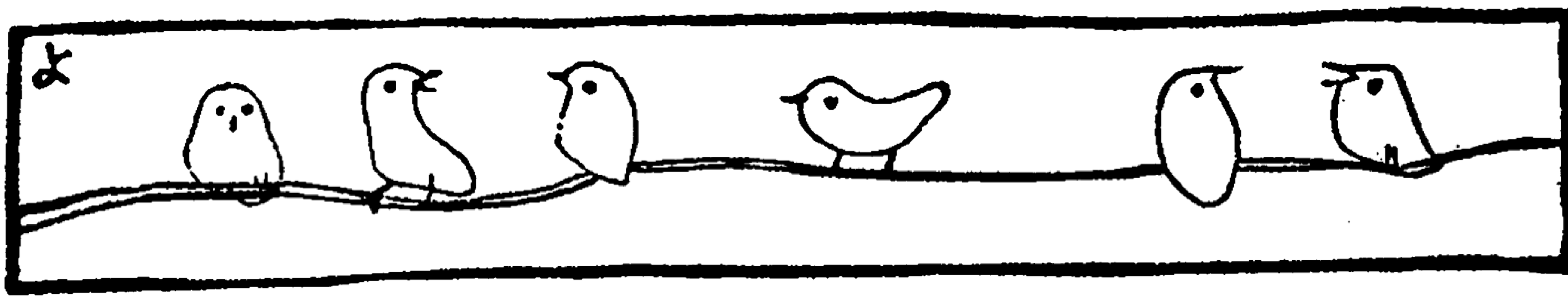
娘の優しい返事がしたかと思ふと、白いエプロンを掛けた廂髮の色の白い美しい娘は、火を持つて這入つて來た。火鉢を雅かに僕等の前へ進めて、火箸を取つて火を綺麗にいけて、小さい火を消えないやうに眞中に集めて、擦り膝で二足ばかり退いて禮をした。

僕は既う什麽場合でも冷靜に批評的に娘を見るだけの練習を積むで居るので少しも見落さなかつた。

二人は外に出ると思はず顔を見合はした。
『遂々理想的なのに出會つたね君。』とT君は笑つて云つた。
『さうだね。』と僕は無理と生返辭すると



『君未だ慾があるのかね。』と云はれて、僕は顔のほてる思ひをして頭を振つた。
『ハハハ、、、的てられたね君は。』と人の惡い無邪氣な友は嬉しさうに高らかに笑つた。



明暗（四）

原田琴子

うつくしき夢のみ國にゆく人もこのふるさとは
さりがてにせむ

妹を人にやるとて泣くもわれ人を得たるをよ
ろこぶもわれ

妹の車しづかにいづる時灰色の幕わが前にた
る

妹のよそにゆくをば追ひもせず釘づけられて
わが心泣く

うつはをば運ばるゝごと嫁ぐ子は車の上に身じ
ろぎもせず

かたきにはあらぬものをば妹を見ずと瞳は外に
あそびぬ

よろこびとねたみとはたはかなしみとうづまく
中にわが心おく

また見むとおもへどけだしとこしへに別るとい
ふにひとしきものを

さわぎつる人のうしろに石のごとたゝずみてあ
り嫁ぐ子の姉

十年わが眼を病むひまに妹は天の羽衣縫ひをへ
しかな　（以上その日に）

手をとりて生れしごときはらからもつひに別れ
てふたかたにゆく

さかしまに心をあける姉ゆゑにとけあひもせず
ありしひとかな

わが衣を縫はせしことゝわが愁わかちしことゝ
ありしのみかな

この姉の心のいまだ足らはぬををかしとや見む
あはれとや見む

いまもなほ姉と呼ばれぬおのれよりかしこき人
をたふとぶがごと　（以上その後に）

＊　＊　＊　＊　＊



喫煙

水明



生きる力

私の家に今年生れた嬰兒がある。
水腫が出來て病氣に罹つた、全身殆んど間隙なく腫物に覆はれた、夜に晝に泣きづめであつた、些と身體に觸つても外皮がずる〱と剝ける實に殘酷である、藥を塗るにも痛々しくて顏を背ける程であつた。併し嬰兒は少しづゝでも乳を呑むことを忘れなかつた。それで生きてゐた。第一の腫物が收斂ると第二が出來た、第三が出來た、斯くて一週間以上も苦んだが、小さな生物は其迫害に勝つて頓て全快した。恰も路傍の草苗が、踏まれたり、折られたり、挫かれたりしても、遂には生々と伸び出すやうに、此の小さな生物は只一つ生きると云ふ抵抗力あるが爲に、外から來る迫害に勝つことが出來た。それで私はつく〲思ふ、人は此嬰兒時代のやうに勢力の充滿たものでありさへすれば、必ず意味ある生活を爲し遂げられるのである、悲しいかな人間は生きることに馴致されると惰力ばかりで生活の途を辿らうとする。全力を擧げて生きるといふやうなことは、子供の間の事に止つて、大きくなるほど僅に一部の力をすら保たない、只推しつ推されつして生きてゐると云ふだけのことで、他から支へる力がなかつたら根の斷れた樹木のやうに其場に倒れて了ふ。弱きものは女ばかりでない、男でも女でも然うだ、然うだけれども兎に角現在に斯うして生きてゐる以上は、例へ女でも、より強く生きねばならぬ。大多數の女は何と云つても未だ抵抗の力が至極弱い、生れて育つて來たことを思へば、もつと強くなつて然るべきだと思ふ。

感情の浪費

感情を弄ぶと云ふことも、感情を浪費すると云ふことも似たやうなものだが、二つとも女子に多い、男子であつて好んで感情を浪費するやうなものは問題にならぬ。感受力

の深いことも、感動力の強いことも、孰れも人間として、良いことだが、感情を浪費するのは良いことでない。殊に極めて低度の感情を浪費するのは、婦人としては一番卑しいことで、人格の劣等を現はす外に何の意義もない。理智を辿り、思索にばかり耽ると云ふことも現代婦人の少數者の弊ではあるが、其方は未だとりえがある、假令其感情が純潔であつても、徒に好んで浪費するものは遂に其感情の覺めた曉には、水の干た沼の底のやうに乾いて了ふ。人はいつまでも感情的でありたい、美しい感情の消耗してゆくほど悲しいことはない。若き女の書いた文章を見ると、感情を大切にしてゐるものと、浪費してゐるものと、弄んでゐるものとの相違が能く分る。而して浪費してゐるものは女子に限りて尤も多いやうに思ふ。

親族の關係

如何に個人思想が蔓つて來ても、家族と云ふものは生存上に必要であるから、家族が滅びると云ふことはない。只此處に家族以外の一族、即ち親族と云ふものがある。此親族と云ふものが個人に干渉する力はなかなか侮れない、侮れないと共に此親族關係の爲に累されてゐる個人も隨分多からうと思ふ。都會生活をしてゐるものは、比較的親族關係も輕く、薄くなつて行くやうであるが、地方生活をしてゐるものには未だ然うはゆかない。一家一門の面目に拘はることを親類の顏汚しだとか云ふ言葉は地方に於て多く用ゐられる。其爲に個人の自由行動は隨分束縛されてゐる、勿論好い意味に束縛されてゐるのもあらうが、不幸にして吾人の知る處では、親族の壓迫、義理づきあひなどの爲に苦んでゐる若い人が相當に澤山ある、親族だからとて必ずしも意見が一致するものではない、却つて反對の場合が多い、形式ばかり親族で、利害關係の爲に離合することが多い。此の傾向は個人の思想が尊重せられると共に、追々破壞されるであらう。此も習俗打破の一現象として已むを得ないことである。親族と云ふ名に囚はれて、いろいろの弊害も起つて來るので、友人的關係、個人關係となれば問題はない、要するに親族に累はされるのは現代の若き人達の一の苦痛であらう。



新しき婦人畫家
（佛國印象派の中）

岡本一平

△女性と藝術

他の職業に於てもさうであるが、殊に藝術の上に於て、女子は男子に較べて、その成績が劣つて居る樣に思はれる。稀に女子にして男子を凌駕し、時代の巨匠と仰がれて居る人も無い事はないが、繪畫史の上から數へて見ると、指に折るに足りない程の僅かな數である。そして一般に女性藝術家の作物には、近代藝術の最も貴ぶ所の個性の強烈なる香と、獨創の勇氣とを缺いて居る。主に技巧の習熟や、溫順なる畫題の選擇などの方面よりして漸く持てはやされて居るに過ぎぬ。模倣と繼承を離れて女性藝術家は進む事が出來ない。粉本と誘導者を取り去つたなら、彼等の發育は覺束ないらしい。東西を通じて高名の女性藝術家の經歷を調べて見ると、ある有力なる師匠か、秀でた先輩の力によつて啓發されたといふ風なのが多く、從つてその畫風も前人の生んだ形式に、僅かの新味を加へるといふ位が關の山で、自ら新形式の先驅者となり、新運動の開拓者となつたなどといふのは、極めて少い樣である。それは彼等の多くが、その時代、時代の守舊派に屬して居つた事を見ても解かる。

處がこゝに一つの例外として十九世紀末佛國藝術界に興つた最も新らしく、最過激なる印象派（アンプレツシヨン、スクール）中に、四名の女性畫家を發見し、然も四名とも花の如き妙齡を以て、他のマネー、モネー、シスレー、ピツサロー、ルノアール、フワンタンラツ

トル、ルグロ、ドウカ、セザンヌ等の雄將と共に、新運動の開拓に從事し、遂に今日の印象派隆盛の勢に至らしめた一事は、獨り美術史上、女性藝術家の爲めに氣を吐くのみならず、又以て藝術にたづさはる人々に取つての強い刺激劑となるものである。而して彼等の作品には、創始時代特有の反抗的氣分に富み、獨創的のものであるのみならず、その間に優婉な女性を忘れない分子が含まれて居る。一味の溫情を湛へて居る。之れ又彼等を賞讃するに足るの一つである。

△十九世紀末の繪畫界

佛國印象派は一八六〇年頃より勃興し始めた畫派で、エドワード、マネーをその首唱者とした。一體佛國の十八世紀繪畫界は、婬靡の極點に達し、ルイ十五世王朝の反映は、繪畫は專ら戀愛を主題として男女間の女女しき纏綿を描くに在りとし、畫面の華麗ならん事を目的とした結果、浮薄となり、假裝的となり、見るに堪へぬ墮落を極めた。十九世紀に至るに及び、之の反動として、クラシック主義が唱道され、何事も古希臘人の遣り口に師らなければならぬ、希臘の彫刻に現れたる嚴肅なる精神、典雅な形線、品位の高潔は美術の極致である。グリース人の如くに吾人も諸の事物を觀ねばならぬといふ運動が興つた。これが丁度佛國革命時代、議政時代、帝政時代を通じて、數年間の人心の傾向に投じ、その嚴格にして武士道的氣分に滿てる處から、代々の主權者、政府の保護する處となつて、今日迄アカデミック派なる名稱の下に、美術の官權を握つて居る。その後クラシックに反對して、感情と色彩とを主張するロマンチック派出で、或は美醜の別ちなく、己れを空しうして、唯自然の有りの儘を描けといふ寫實派も出でた。ミレー、コローを含むバルビゾン派や、クラシックとロマンチックの折衷を主張する一派や、風俗畫派なども出でたが、クラシック派を承け繼いだ人々は、歷代の政府の同情を得、保守的な處から、學士院に擧げられて隆盛を極め來つた。翻つてこの派を除く畫家等は、如何に巧妙に、如何に眞實であ

らうが、世間よりは謀反黨を以て目された。

十九世紀の終に近づいた頃には、時代思潮の變遷から、自然の研究にも着眼する樣になり、寫實派の如きをも、大に參酌する樣になつたが、アカデミー派は何處までもアカデミー派である。彼等の守る處は相變らず、希臘彫刻の模倣に止まり、線を主とするより色彩の無味單調を來し、個人的思想を入るゝを許さぬ處から活氣を缺いて遂に時代とかけ離れた形式的の繪畫になり終つた。

印象派は之等守舊の暗い空氣に堪へないで興つた處の流派である。個人の思想を基礎とし自然を對稱として最吾人に觸れ生命のある繪畫を作り出さうとした。材題の如きもアカデミックの人々の古典や神話等或は希臘時代の生活を追想して描くに引換へ主として現代のもの吾人の周圍に見受ける事の出來る物を忌憚なく描いた。醜業婦の如きものまでが大作の題材となつた彼の單純な調色に比較して之は自然より訴ふる强烈なる色調を恐めず臆せず畫布に上した。印象派といふ名目は當初自然を寫すには自然其儘の形や色でなくそれによつて受けた吾人の印象を描かねばならぬといふ主張に基づくものであつたが後には空氣と光との結果を描き表はさうとする一派の名稱となつた。兎に角クラシック派も之に敎育され來つた社會もこの派の主張と作品には非常に驚かされて一概に奇を衒ふものとし一派の人々を悉く排斥した。のみならず殘酷なる壓迫を加へた。この派の首領のマネーの如きさへ驚歎すべき手腕を示しながら死に近き年迄嘲笑せられ罵倒せられ續けた。現今では近代藝術界の最大偉人と目されて居る畫家にして當時のサロン（公設展覽會）よりはねられ續けた。彼が死に際して友に遺した言葉に『この血鬪は隨分わたしに害をなした。非常な影響をわたしは蒙つた』と言つた程激しきものであつた。セザンヌの如きは彼の作品の競賣せられた時世話人が一枚一枚畫を取り出して示したら公衆は閧を作つて笑ひこけたといふ話しである。以て當時の人心が如何にクラシックによつて支配され痲痺されて新人を認め得なかつたがわかる。從つて眞摯なる畫家等の困苦の程も思ひ遣る事が出來やう。

四人の女性はかゝる混亂の間に立混つて他の畫家等と等しく强き自信を持て熱心なる研究を積け遂に淸新なる畫風を遺したのである。（つゞく）

坂はてる　てる
鈴鹿は　くもる

民謠の地方的特色

文學士　澤村胡夷

あひの
土山　雨が
ふる

各地方には種々な歌謠が行はれてゐる。是等の歌謠には馬子唄もあらうし、桑摘唄だの、田植唄だの、盆踊唄、手鞠唄、茶摘唄、臼挽唄、子守唄、船唄、機織唄など其種類も餘程多いが、作者は殆んど知られてゐないのである。而してかゝる無名詩人の手に成つた多くの唄の中には餘程優秀なものがあるのだ。

今日吾々に知られてゐる民謠中には恐らく多くの滅びた唄の間に在つて生存する事を得たものが尠くなからう。言ひ換れば幾百幾十年間の淘汰の結果に依て殘された唄のあるものが吾々に知られてゐるのだらうから、現存の民謠中に佳調逸作のある事も強ち理由のない事ではない。然るに民謠を夫々地方的の色別の上から考へてみる事は必要である。何故なれば民族の相異に依つて彼等の民謠に種々の特色がある如く、同一民族の歌謠に於ても地方々々に多少の相異があり、特色がなくてはならぬからである。卽ち民謠には能く考察すると局徵があるのである。

凡そ民謠と呼ばるゝものゝ中には前述の如く種類が雜多であるが、第一に氣のつく事は、是等の唄の種類それ自身にも地方的に先づ限られてゐるものゝある事である。例へば盆踊唄は盆踊の行はれてゐる土地に限つて存在してゐるもので、盆踊の行はれない地方には勿論そんな唄の在るべき筈がない譯だ。是は風俗習慣の相異から來る所の唄の種類の局在といふべきものである。然るに尙地勢產業等の地方的相異に依ても同樣に種類の制限がある。船唄、桑摘唄、茶摘唄、機織唄の

類は明かに其實例である。かくの如く唄の種類に於ても、或は風俗習慣、或は地勢産業等の相異する事の爲に或地方にはあつても他の地方には存在しない事がある。然し多くの種類のなかでは殆んど何の地方に於ても存在せぬ事のないものもある。例ば子守唄の如きは其文句は夫々相異してゐても、子守唄といふものが全然無いといふ地方は恐くあるまいと想ふ。

第二に吾々が注意をせなければならぬ事は唄の種類と云ふ事ではなくて、寧ろ種類の如何を問はず、一切の民謠を通じて一々の歌自身が夫々地方的特色を發揮せる事是れである。此方面から觀察して行く特徴は所謂民謠の局徴の最も大切な部分である。此觀察は二方面から之を行ふが適當だ。

第一は歌謠の外形に關係のある部分から觀察する事である。大體此方面から民謠の局徴を見ると、言語の地方的色彩の映じてゐる事が分るのであるが、其著るしい事實を擧げると、同一の根源を有してゐると覺ぼしき唄が部分的に地方に依て變動のある事その一つである。子守唄には此類例が尠くないやうだ。

○寢ろ、寢ろ、寢ろ。寢た兒可愛や、起きた兒憎くい、起きて泣く兒は面憎い。（伯耆地方）

○寢んねころ〳〵。寢た兒は可愛い、起きて泣く兒は、起きて泣く兒は面憎い。（伊賀地方）

○寢んねせよとて〳〵。寢る兒は可愛。起きて泣く兒は餘計つらい。（伊勢地方）

○寢んねころいち、寢る兒は可愛親だすけ、起きて泣く兒は面憎い。（大阪）

○寢んね寢て呉れ。およてくれ。およれば兒も樂親も樂。（東京）

○寢んねェた子の可愛さよさは、起きて泣く子のつら憎さ。（筑前地方）

○ねんね寢てくれ、ねてさへくれば、守も樂なが、子も樂な。（因幡地方）

○ねんねしなされ、御寢なりなされョ、ねたら子も樂、守も樂。（紀伊）

○泣ちや呉れな、後生だから、眠れば子も樂、親も樂、子守の妾はなは樂だ。（十勝地方）

是らはほんの一例であるが、かゝる實例は他にも決して尠くない。次には方言が唄の中に挿入せられてゐる事が其二である。此例は子守唄子供唄などに澤山現れてゐる。その他の唄にも無論尠なくない。

可愛らしいはいんど(豌豆)の花よ、花は小花で濃紫。(十勝)

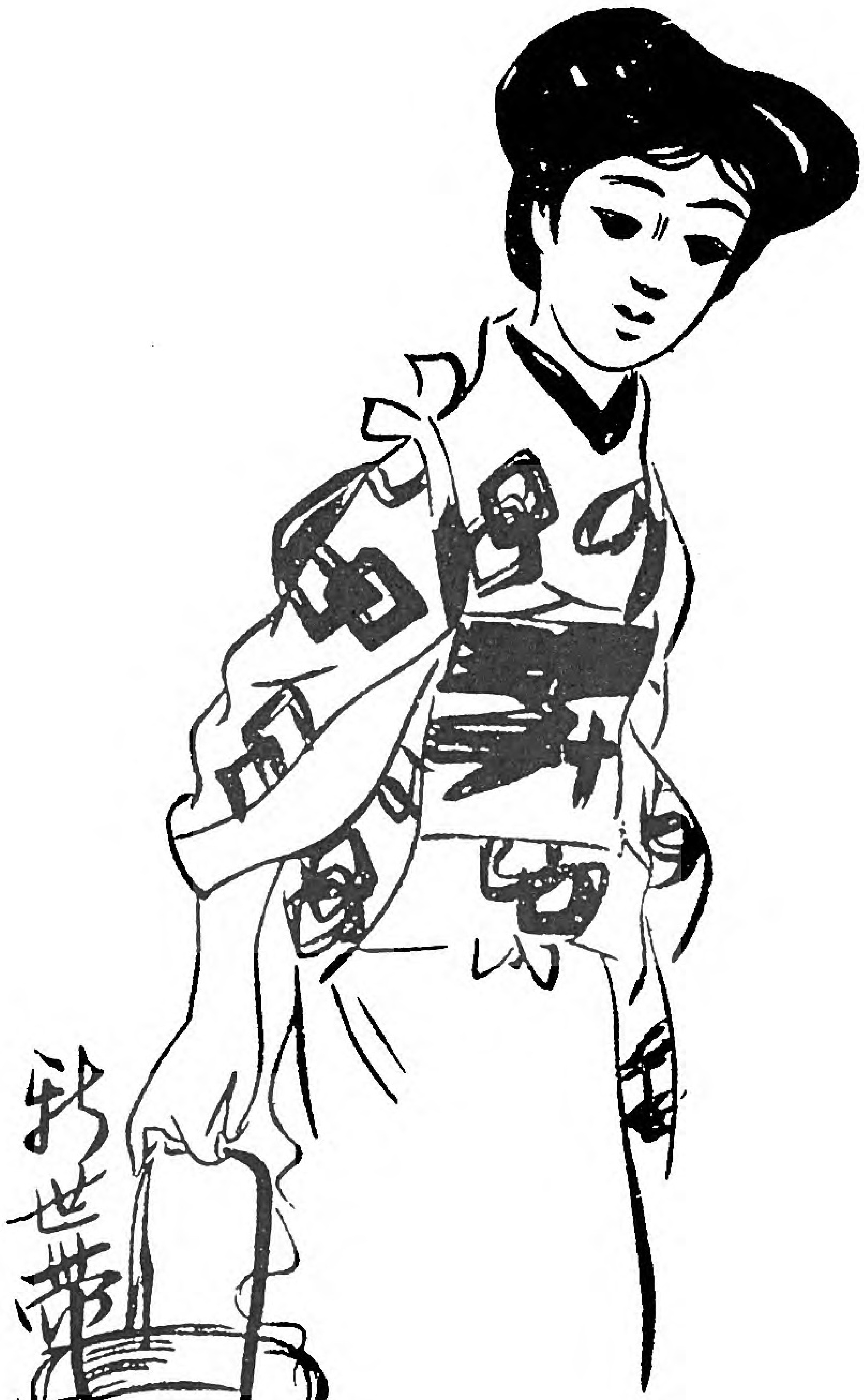
おゝいそ(鱚)が、鳴くで出て見る、サアお出でよ、お前跣足よか、アア嫌だのい。(三河)

場所は場所だよ、妹尾は場所だ、壁表の、ほんまに出る場所だ。備中備後地方)

鮊とちん(鯛)の魚と、ちんの魚と鮊と、肥前山をば、今朝越えた。(筑後地方)

まづ以上の二項が歌謡の外形に關係した方面から民謡の局徴を見た著しい事實である。

第二は歌謡の内容に關係のある部分から觀察する事だ。此方面から民謡の局徴を攷へて行くと、種々なる結果を得るのであるが、特に著しい事は作詩上に用ゐられてゐる材料に於ての地方的特色である。其最も明かに示されてゐる地方色は唄の中に用ゐらるゝ山や川や崎や浦や、其他地名等の所謂固有名詞が夫々其地方と親密に關係してゐる事だ例へば、



○土佐はよい國、南をうけて、薩摩あらしが、そよそよと。（土佐）
○坂は照る照る、鈴鹿は曇る、合の土山雨が降る。（近江、伊勢）
○大山お山の二股椿、枝はひめ路に、葉は日野川に、花は米子の城で咲く。（伯耆）

是等は夫々其一地方を離れて考へる事は出來ない。卽ち固有名詞に依て歌の内容が極て明確にせられてゐるので、之を捨てたならば唄の生命が危くなる譯である。換言すると、民謡の局徵の一つはその地方に固有な自然其他の名稱を唄の材料に用ゐるといふにある。次にまた注意すべきは夫々地方に特有なる地勢氣候風物を唄ひ材料に採つてゐる事だ。

○眞光寺だらり（柿の名稱）七つむいたら夜が明けた。（佐渡）
○一里二里ならカノ（Oanoe 小舟の一種）でも通ふ、近くながらも灘の上（伊豆、八丈島）
○指江牛蒡に狩鹿野が煙草、山田ナンバで、氣屋大根。（加賀）

是等は各ある地方に特有ともいふべき物を材料としたのだが、またある地方の地勢氣候がよく表現せられてゐるものがある。

○みやま六月孤子を着るは金がないやら冷るやら。（加賀、飛驒地方）

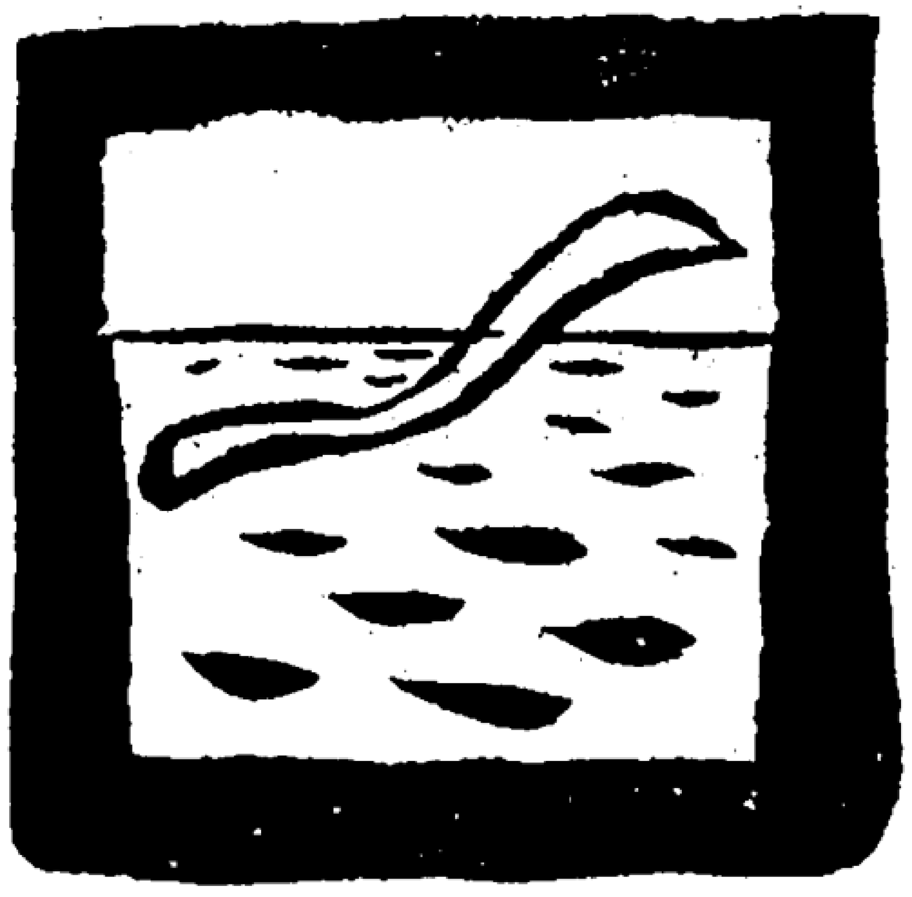
この外に其例は決して尠くないが、以上の局徵を概括すれば、畢竟地方の地勢風土の上の相異に其根柢を保てゐる所のものだと云はねばならぬ。卽ち是等の地方的相異から唄の材料を特色づけて、内容的方面から唄の局徵を作上げて行かうとするのである。然し是だけでは此方面からの局徵を充分に攷へたものとは云へない。卽ち、人情、風俗、傳說、信仰、或は迷信の地方的相異に依て作上られた局徵を見なければならぬのである。例ば、

『佐倉宗吾の子別よりも主と別が尙つらい』

これは下總地方にある唄だが、是等は傳說的方面から來たものと云はねばならぬ、又風俗の方面から來たものと思はるゝものには佐渡の唄に、

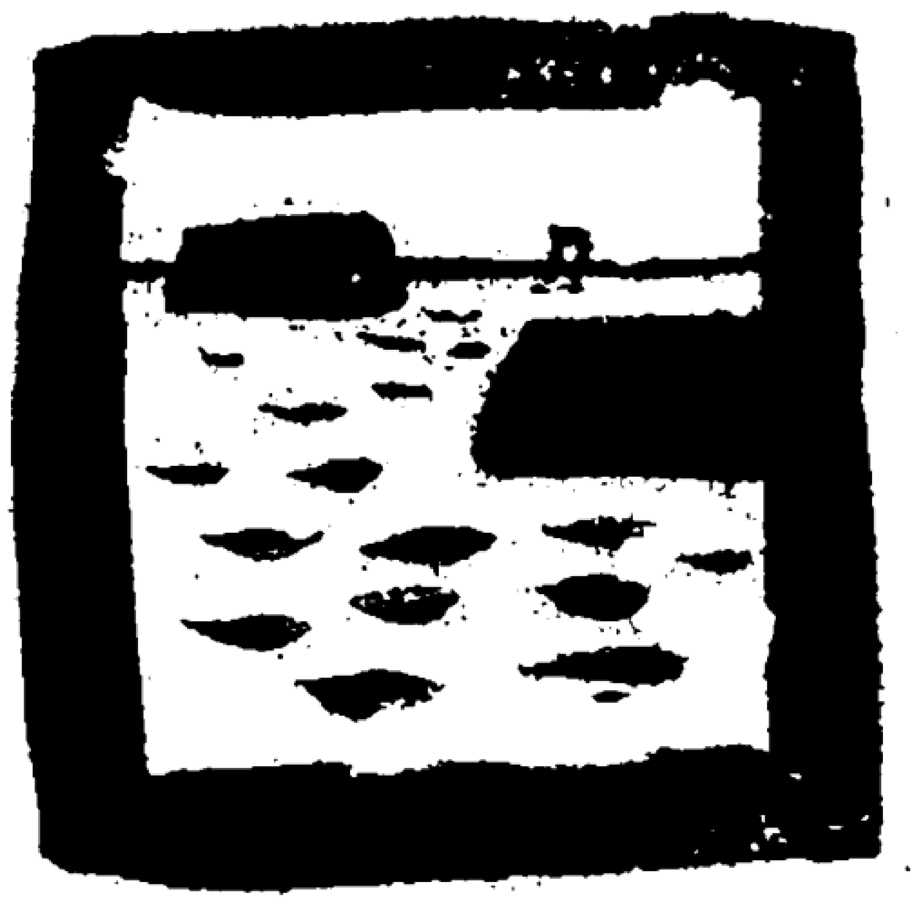
『おらが隣で嫁とるさうな、揃うて行きましよ、すゝ立てに』

の如きものがある。次に面白い事は加賀、越中、越後、能登の地方には民謡として宗教、特に淨土宗の信仰に關係した唄の表はれてゐる事である。その他地方の傳說などを知らなければ充分に意味の分らぬものもあるが一々の例は煩はしいから是には省いて置く。



情操論

辯護士　平出修



◎貞女とは何ぞや

結婚する時肉體的に處女であつて、終生一人の夫の外に男に見えない。之が日本で云ふ貞女である。不幸にして夫が死んだ。婚家に夫の兄か弟がある、それと再婚する、又生家へ戻つて再婚する、これも社會的感情からは公認されてゐる。夫と離別して生家又は婚家に寡婦として生活し行くことが出來ぬ、それで止を得ず再婚する、之も亦稍公認されてゐる。其外の再婚と云ふことはあまり好い感情を以つて迎へられて居ない。

人の心の奥は容易に窺ひ難く、殊に處女の胸に秘められたる想は、永久の暗に葬らるゝ事が多いであらう。處女がつく夕暮時の靜かなる嗟嘆の中には、何程の意味が含まれて居ることであらう。世の批判は大方形の上にあらはれた現象の上に基礎を置く、されば結婚と云ふことを一つの舞臺に見て、其所作が克く溫良貞順を盡くした時に、女子は卽ち貞節を完うし得たものとして許される。此場合女子の深く秘めたる胸中の事は條件とされてゐない。否條件としやうとしても事實秘密を探り出す事が出來ないから止を得ぬ。そこである者は、貞女と云ふものを嘲の意味で迎へる、女子は大なる詐者なりと罵りもする。情操と云ふことを嚴密に考ふれば、單に婚姻の時に肉體的に處女であつて、婚姻後克く一人の夫を守つたからと云ふ丈けでは、女子はまだ許されぬであらう。更に其女子は婚姻の前(又は後にでも)に當りて、心中に何等の秘密を抱かなかつたかどうかを詮索されねばならぬであらう。

只夫れ斯の如く嚴しく情操の意味を考へるときは、一面には、戀愛と婚姻とは相終始すべきものであると云ふこと、他面には、肉體上の節操と云ふものは、さまでの價値がないものであると云ふことの二つの結論を生み出して來る。而して解し方によりては、此二つの結論は頗る危險なる結果を生まぬとも限られない。

◎嚴密に謂ふ情操の意味

情操と云ふことを嚴密に云へば、二人の男を愛さないと云ふことでなる。女が一人の男を想つた以上は、其男と終生の苦樂を共にする。決して他の男に愛は移さないと云ふことである。即ち婚姻は戀愛に始まり、戀愛に終ると云ふ結論になる。從つて戀愛のない婚姻は先づ之を排斥すべく、戀愛の心認めた結婚は之を繼續することを必要とせぬ樣にもなる。然るに夫婦と云ふものは、結婚後に於て、愛情が發生して來るものである。戀愛とは一種違つた味の愛情が生じて來るものである。其愛情に基いて夫婦關係を繼續して行くことは、今日の社會には之を是認せねばならぬ。是に於て情操と云ふ意義を少しく修正して解釋する必要があらはれて來る。

情操とは、女が男に對して、混りのない愛情を持つと云ふことだ。利害、名譽等の俗情や、虚飾、詐欺等の奸曲や、さう云ふ事を加ふることなしに、自分が許した男に全身の愛を傾けると云ふことだ。誤つた戀愛、遂ぐることの出來ぬ戀愛、欺かれたる戀愛、之等は世慣れぬ處女には陥り易いものである。其樣な戀愛をどこまでも固執し、維持せねばならぬと云ふ義務を女子に負はせることは、餘りに殘酷であると思ふ。

◎容赦すべき點

最初の戀人をすてゝ、新なる男に嫁した、たゞそれのみで女子を責むると云ふことは、餘りに無慈悲であると思ふ。素より之は單純な理論からではない。もし單純に云はせれば、それを以て女を責めてよいかも知れぬ。又女子自らが情操と云ふものゝ嚴肅にして且重

大なる意義あることを思つたならば、男に心を許すと云ふことに、錯誤や虚欺や一時的の盲動などはある可からざる譯である。何分にも人の青春時はものに動され易い、異性の愛にあこがれて、思はぬ不覺の涙を見ることにもなる女の一大事を敝履の如く取扱つて顧みない場合も出來て來る。思慮が淺はかだと云はゞ云へ、操守が輕いと云はゞ云へ、生きた人間



には生きた行動が伴ふものである。その一旦の迷に對して、終生の桎梏を社會が結び付けてしまふと云ふことは、即ち若い女の命を奪ふと同じ事である。社會は斯の如き殘虐を女子に強ひてはならぬ。それ故に情操論は一歩を假して之等の事情の上に、女子の生くべき前途を拓いてやることが必要である。實際以前の戀愛の誤れるを悟つて、新しい夫に其全幅の

愛を捧げたとせば、女子はそこに許されねばならぬものであるまいか。自覺した後の情操が淸かつたならば女子はそれにて責任が解除せらるべきものであるまいか。

◎結婚は社會組織の一條件

又考ふるに、愛のない結婚が無意義であるとすることも聊か誤がないでもない。

婚姻と云ふものは、一つの社會制度である、而して人類は社會制度の組織者である。人類が自己の生活を經營して行く、それに適應する樣に社會を作つた、既往三千年來の經驗が今日の制度を馴致した。人間が結婚すると云ふことは、卽ち社會の組織者として爲る一つの事業だ。戀愛が必ずしも基礎を爲さずとも、夫婦相集つて、共同生活を經營し行くことが出來るとの信念さへあればそれで結婚の條件は完備するものだ。其共同生活の條件が、男女二人の間に適合するや否やがむしろ結婚の最重要事項だ。之が調査は、世故になれた、父母、長上、知己、朋友がむしろ適任者として一般から認められてゐる。只此際結婚當事者の意思が、條件の一部であることは云ふ迄もない、それを條件の全部とする戀愛結婚說も惡いが、それを條件中に數へなかつた日本在來の結婚の方法も亦誤つてゐる、之は相互を折衷した上に、利弊を取捨せねばならぬ。

◎小春の情操

更に情操を嚴密に解釋すれば、肉體上の節操と云ふものは左程重いものではないともなる、之は一應考へて見ねばならぬ問題である。

元來此肉體上の節操と云ふものは、普通の處女にありては、生命よりも重いと考へらるゝ。乍併、容貌、風姿を以つて營業とする女には、左程重要のものとはなつて居らぬ、さりとて之を一概に醜業婦なりとして論外に置くことも出來ぬ。『時雨の炬燵』の小春は此の種の女だ、彼は肉體の上に於ては何等の節操がない、しかも治兵衛に對する根强い、美しい情操は、千百年

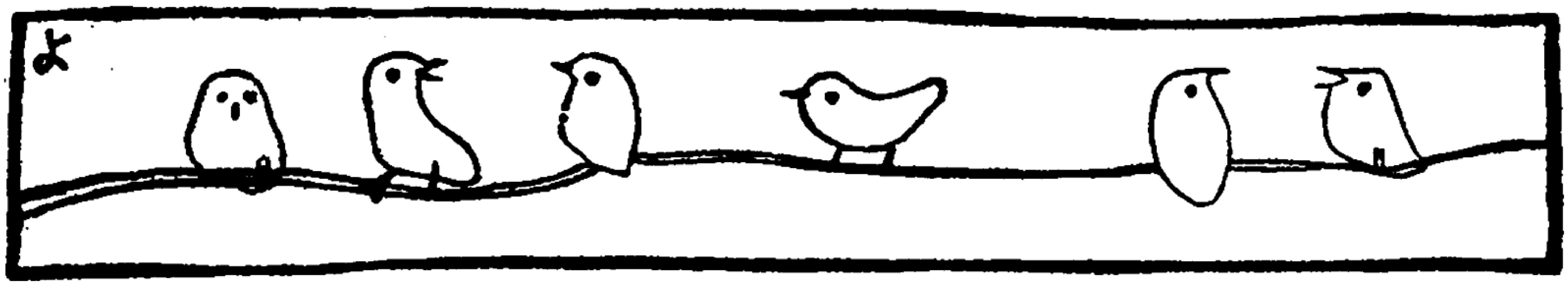
に渉りて消えざる生氣があるではないか、實在の小春はあれ程で無く、畢竟は近松と云ふ大詩人の手によりて、あの樣に美しくなつたと云ふかもしれぬ。しかし事の大小輕重があつても、肉體の節操を蹂躙せられた彼の種の女でも、美しい情操に生き、之を立て通して居るものは、今日、現在、我々がよく見聞し得る事實だ。斯の如き種類の人に向つて、節操の問題を批判するには、それに相當する標準を立つる必要がある。彼等を玆に到らしめたのも、社會の缺陷なりとせば、社會は之を看過する事が出來ぬではないか。彼等をすべて社會外の人間として、終生眞面目なる社會組織中に編入することを拒むことは、決して徹底した意見ではない。故に之等の人に對しては、情操と云ふ義を稍嚴しく解して、其情操さへ確立して居たならば、特別の事情は斟酌し之に相當の價値を與へよ。との主張を余は提言する。

◎口實とすることは許さぬ

然りと雖も之を以つて、普通の處女が、生慾の盲動に任せた後の口實になさんとすることは、決して認容す可らざる事だ。眞の節操と云ふものは、靈肉の二元から出立すべきものである。女子は此點に於て、性來力強き排拒性がある、此排拒性は、むしろ死を以つて確守せねばならぬものである。

文學は屢々情操の美を描く、それが時に反道德的思念を包むと見らるゝ場合がある。倫理は屢々貞操の善を說く、それが時に枯淡に流るゝ場合がある。人は情緖の前に一種悲哀の美を味ふと共に、倫理の前に襟を正して相對する禮をも思はねばならぬ、枯淡なる法則のみにては生きた人間を解釋し、規範して行くことが出來ぬ。また情感そのまゝにては、社會の組織を確立し維持して行くことが出來ぬ。

婦人問題は、此世紀に於て重大なる意義を加へて來た、婦人は如何にして解放せらるべきか、如何なる程度に、如何なる分量に、如何なる方面に解放せらるべきか、論議漸く闌ならんとしつゝある。余は婦人が社會上如何に解放せらるべきものなるかを考へて、此小篇を草したのである。



ホイツトマンの散文詩

八橋有春譯

我れに似たる影

其の影は、我れの姿に似て居る。彼所此所と生けるが様に、動いて居る。喋々としやべつたり、ちやかしたりして居る。影が、飛びまはつて居る所に、私自身が立つて居り、ものを眺めて居るのを、屢々私は見出した。其の影が、私であるか屢々自ら尋ねたり疑つたりした。けれど、わが愛人達の中に、わが歌をよろこび、うたふ人々の中に、おゝ、私の眞實の影を見出した。

わが疑惑

もの丶、形相の存在の恐ろしい疑惑や不定に我等は欺むかれ、希望や信任やは、遂に空しいものかも知れない。

墓門に眠むれば同じ事、もの丶形相は、皆美くしいお伽噺に過ぎない。

私の知覺するものは、動物、植物、人、小山、輝き流れる水であるかも知れぬ。晝の空、夜の空、色彩、密度、形、是等のものは、浮幻物にすぎぬであらうか？

眞實の物は、未だ知られずにあるのだ。彼等、浮幻物は、屢々、突き進み來て、私を困惱させ、嘲笑ふ。

屢々、私は、彼等を誰れも知らないと考へる事がある。

其の何者であるかは、私にそれと知られる。又變つた點より見れば、彼等は無である。如何にしても無である。

是等のものは、わが親友なる戀人によつて不思議にも答へられる。

智識と旅するとき、或は、手を握りて、共に椅子によれるとき、觸知し難き、魔の如き不思議なる空氣、把持する事能はざる思想や言語や理性やが、我等をとりかこみ、守護するとき、私は、不言不語の智識に抱れる。私は其よりも他に要求しない。私は、もの丶形相の疑問に答へる筈はない。墓門の外なる願に答へたい。けれど私は歩む。恙なく椅子による。私は滿足してゐる。智識が我手を握れる時、私はいともよく心は足りて居る。



やはらかに降りそゝいだ雨は
底も知れぬ土の下へ
じけじけ喰てんで行つた。

窓は青く明放れて
また青く暮れて行く。

森は歔欷をつゞけてて
重々しい雲の影は
その頭を壓つけてゐた。

梅雨の午後の光は
軒に彈飛されてゐる。

胡　爽



幽靈（外一篇）

幽靈の心持

海底の篝火が燃ゆるやうに
無言の鄕の
水の間を昇る
烟のゆくへ
幽靈のわがまゝよ

偶然に
興奮した幽靈の
誰にでも
縋らうとする
ものなつかしい昔の燈火
錆たペン尖と

折れたピンとの外に
何もない空な抽斗を
覗いてみた
幽靈のけうとさ

朽ちた柱の根より
一匹づゝ、後から後からと
無數に現れて來て
空に飛んでしまふ羽蟻の
何うすることも出來ぬ
幽靈のいま〳〵しさ

薄暗い土藏の家の
窓よりは薄日の反射
晝間の瓦斯と

電氣のあかり
なやましき幽靈の
黄いろい呻吟

人間の脂肪で
汚れたやうな古障子に
蚰蜒の這ふ紙ざはり
嫌はれた幽靈の
やるせない顫き

街道の
芒や萱に逐はれて
見あらはされた落人の
あられやうなき
幽靈の耻かしさ

松原つゞき

河井醉茗

松原つゞきの松の木が
隣の松の枝振に
あんまり好いと思ひ込み
身ぶり手ぶりを見習うた
次から次と松原の
松はあるだけ出來るだけ
揃ひも揃つて皆眞似た

松原つゞきの松の木の
枝はよう似た枝ばかり
すなほな松は只一つ
若い小松が松原の
砂にしつかり生えてゐた



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉

問　アザの大きいのが幾個も出來て居りますが、これを取ることの出來る薬を（大分、お尋ね女）

答　青アザならコロヂームで腐蝕さして除去ることが出來ますが、赤いもの殊に大なるものは容易に除驅ることが出來ません、それを譯もなく取り得るやうな事を申す者がありますけれど山師のホラです。「淡路の夕汐様」も御同様の御尋ねでしたが、右様御承知下さい。

問　おしろいをつけまして、外は綺麗になつて居りますけれど、鼻の先から汗が出て、直ぐ剝げますが（大津、愛讀者）

答　要するに煉白粉や水おしろいでは駄目です、強いて此等をつけて其鼻端の剝けるのを防ぎたいとあればおしろいを塗ける前に、ビネーグルかオードトワレツトを水と等分に混せて鼻の周圍につけるか、ブエストゾールを塗るかすれば、汗の出るのが止つて、從つておしろいも比較的長く保ちます。

問　鼻を高くする法は實際見よくなるものでせうか（淺草、つゆか）

答　上手な隆鼻術の手術を受ければ見よくなりますけれど、若しチヨイとでも手が狂ふと、一生取返しのつかぬ畸形鼻となること、往々にしてある事實ですから、なるべくは其様な不自然な美容法は御止めになさつた方が安全かと存じます。

問　ニキビやソバカスが澤山ありますので美顔薬をつけて見ましたがチツとも効目がありません、どうしたら早く療りませうか（横濱、かをる）

答　その御使用になつた美顔薬と申すのを承りたいと思ひます、その上で然るべき適當の療法を考鑑して御知らせ致しませう。

問　髪にクセがあつて困ります、殊に洗髪した時前髪が立つて思ふやうになりません、手易く治す方法はございますまいか、それに洗髪にフノリを使つて居りますが如何のものでせうか（滋賀の愛讀者）

答　フノリで洗髪するのは別にわるいことありませんクセ直しには色々ありますけれど、手數をかけずに直

したいなら銀座尾張町明進堂の荒川如水といふ人に問合せなさつて、クセ直しを讓つて頂きなさい。

問　或雜誌に胡瓜の汁とケーエッセンスを交ぜて塗けると日に燒けぬとありますが、そのケーエッセンスと申すのは如何なものでせうか（筑前、一少女）

答　ケーエッセン又など申すは、それを商賣にして高い利をむさぼる爲めに、勝手につけた名で、實は過酸化水素水のことです。

問　毛が非常に柔で前髮など横になりますが、堅くなる法を御敎へ下さい、聞けばフシの粉を煎じて洗髮すると堅くなるとのこと、本當でせうか（京都はざくら）

答　「滋賀の愛讀者」樣への答を御覽下さい、フシの粉と申すは附子ですか、木附子ですか、木附子なれば從來御聞きの通りのことゝ申して居りますけれど、さしての効能ありません、附子は支那流の生毛劑に使はれる藥ですが、毒藥ですから滅多に使はれません。

問　肌理があらく、コールドクリームを擂込んで粉おしろいを打ちましても、すぐきたなくなります、それに顏が漏脂性なんですが、どう致したら綺麗になりませうか（京都、花すみれ）

答　コールドクリームは如何なのを御使ひですか、粉おしろいにも種々あつて、それによつては直ぐ剝げるのもありますから、なるべくは其使用になつて居る品を見せて下さい、漏脂性の顏は御化粧の前にオードトワレットで御洗ひなさい。

問　シモンクリームを塗つた上にシモン白粉を打ちますが、汗が出ますとムラになつて困りますが、何とかして白粉を落付かせて置く手段はないものでせうか、私は至つて多汗性で殊に夏は一層はげしいのですが（登美靜子）

答　多汗性の人にシモンクリームは不適當です、元來クリームといふ化粧品は、その性質に於いて脂料からなつて居るので、多くは乾燥性の人に適するやう製せられてあるので、シモンクリームも其種類に屬して居ります。併し近來化粧科學の進步につれ、兩方に適するクリーム劑を發明され、就中コールドクリーム、キセロールクリームの如きは其尤なるものでせう。兎に角粉おしろいをクリームの下地の上に打つて長く保たせ且つ汗ばむのを防ぐには、クリームを塗る前にオードトワレットか化粧酢で洗顏なさるが、一番扮裝法に適つた遣方です。

評壇

募集
毎號評壇の原稿を募集す
二十一字詰十五行以内とす
文學のこと、婦人のこと、社會のこと、
誌友のこと、雜誌のこと何でもよし。

▲私は太田喜志子さんの あらはれていらつしやつたのを悦びます、『尚香の芽と心』は謹んで拜見しました、考へさせる文章ね。

▲考へさせるといへば 年さんの文章も其方でせう、冥想的つて云ふんでせうか、あれで十だいの女の方が書いたんだと思ふと、ほんとうに感心してしまひますわ。現代式つて云ふんでせう。(月人)

▲皓天生の『東京朝日』に出してゐる新しい女は何處が新しい女か一寸も分りません(たよ子)

▲大阪邊の娘さんは澤山女子文壇を見てゐなさるのに何故もつと投書なさらぬのでせう、あんまり御遠慮すぎると函入にかびが生えますよ、男氣を出して頂戴な、失禮。(おたやんより)

▲私は月の前半がいかに短かく後半がいかに長いといつもいつもさう思ひます。なぜつて十五日締切の原稿を書くのに前半は殺します。もの、そんなに長いものを書くわけでは御座いませんけれども、出すまでには何度なはすでせう、書いてはあゝこんなものをとまるめたり、墨を塗つて仕舞つたりする内に、もう十二日十三日が來てしまひます、仕方なしに氣に入らないだらけのものをポストに入れます、入れて仕舞へば もう安心致します、たとへこんなのを投書しましても、そりやめ十中の八九沒書のことは承知ですが、たゞこれだけ骨を折つて作るだけでも、どんなにか自分の勉强になりませう、私はそれを思つて沒書は重々承知の上投書致して居ります、たゞ悲しいことには沒書になればあの奇拔なかざりけのないあからさまの記者樣の批評が伺へないのが殘念に存じますけれども、それも自分の腕のにぶい故とますますはげむで誌上にのせていたゞくことの出來るまで投書する考へで居ります。月の十五日が過ぎれば今度は月末の發行の日がまち遠でなりません、一つ本屋にさう度々參りますのも極りが惡いと存じまして、あちこちの本屋をかけめぐつて求める次第です。(古那無)

▲元來私は文才がないと云ふ丈でなく、至つて字がまづいのです、小學校に通つて居た頃は、作文でも、習字でも人に賞められぬ位で有たが、性質凝り性の方で、爲めに耳を惡くして聽えなくなつたのが元で、學校を止めてしまつた。好な學校を止められたが辛さに宅に居ても絶えず讀書に親んだ、雜誌は本誌と女學世界、女子學術、其他、太陽、中學世界、秀才文壇など讀んで居りましたが是丈では淋しくて堪りませんで、折々お父樣や兄樣の書籍箱を搜して、おしるこ(小說脚本の類)と云はず、おすし(傳說)と云はず、皆讀み盡しました、かうして教科書お習字に遠ざかるに從て、いつの間にかペン持つて走り書する事を覺えたのと、神經衰弱やら血行器病に胃されて短氣になつたのとで筆持つて一字一字の楷書など自烈たくて書かれなくなつた。字がペン字と云ふ我流になかれて、思ふやうに筆が運ばないので、今に原稿をかく度に泣たくなります。泣いた處で矢張り下手だ、書けない、然し字は天性だからと諦らめて、いつも眼をつむつて投書致します。本誌も一卷二卷頃は只スツと讀通す丈けで小說なら可愛さうに位しか感じなかつたが、自分も投書しようと思ふと、人樣のお作を一々よく嚙んで味ひますから、從つて興味も出て來る、本誌は私の爲めには丁度、滋養ある食物で止めれば止められるが、其代り生命の消耗を免れません、私は病の身を養ふ爲めに、永久滋養をとらねばならないので御座います。(菊子)

▲一番印象深いのは自分の文だと思ふ、その皆幾度もよむのですもの、そして あかない心地がする、それから撰者の評である、一句一句覺えこんで、時々くりかへしてみる、私は水平線の上へ一歩づゝふみ出した生活を皆樣にのぞむと醉茗先生の仰有つたのを、此上ない道づれにして居る、氣に入らぬ事を人がいつても、ふんあれは水平線以下の人間だからと感揶つぽい事をくりかへさなくなつた。御轉婆な故かどうだか私は夜雨先生の評を最も好いた、先生當今はひどい事を仰有るけれど、昔の先生はそんなでなかつた。(葛の葉)

▲世間の娘持ちたまふ父君母君よ、女が本を讀むと生意氣になると仰います けれども、墮落したり、誘惑されたり、虛榮に身を誤つたりするのは、本を讀む女と讀まない女と、どちらに多いでせう、そんなことは言はなくても分つてゐると仰るでせう、そんならもつと本を讀むのを干渉しないで下さい、生意氣になる方もあるからでせうけれど、そんな方は論外よ。(田舍の女)

若き男女の不注意

顔一面に吹出物

ボツ〳〵のザラ〳〵となる

男女十四五歳より卅歳位まで顔に小さき吹出物がして中に黒點あり、之を爪で摘めば白い脂肪の固りが出る。恰も蟲の樣である。これを俗にニキビといふ。これは面皰といふ一種の病氣で、男子百人あれば少くも四五十人はこのニキビが出るもの故、世間の人は之を療治し樣とも思はず打捨て置くが、これは甚だしき心得ちがひである。もし不潔物が着いて口が塞がると豌豆大に赤く腫れ上つて痛みが劇しくなり、もし又運惡く局處に化膿黴菌が入つて膿を持つと嫌な臭氣を發して恰も癩病患者の樣に汚くなる。長く治さずに捨て置くと慢性病となりて一生なほらず、時に自然と治る事があるが顔色が暗褐色に變つたり、色素斑が出來たりして、終にボツ〳〵のザラ〳〵と柚の皮を擦る樣になり人には嫌はれ良き結婚談も破れて一生の不幸の基となる。

故に成るべく早く全治させる樣にするがよい然し世の中にニキビ取りの藥は少くないが、其多くは無效であり時に有効なれば劇藥を加へニキビは治つても顔は反つて汚くなるのもあるから注意せねばならぬ。

然るに維也納醫科大學の教授兼皮膚科醫長ドクトル、カポジー先生は苦心研究の結果ニキビに最有效なる合劑を發見し之を皮膚科講本に發表せられた。醫學界では之を先生の名を取りてカポジー氏軟膏といつて我國の皮膚科專門病院でも盛に賞用してゐる。此藥は又ソバカスにも特効あり數多の人を救ひたるのみならず顔につけてゐても人には知れる程の色も匂もなく且其效能は著しい。殊に顔の色を惡くせぬ許りか幾分か美しくする副作用があつて見惡い痕跡を殘す心配などは決してない故にニキビの藥としては是以上良いのは恐らく世にない筈である。輕症用五拾錢、重症用一圓五拾錢送料各八錢、東京神田錦町三ノ二、高柳藥房へ代金を添へて注文すると送藥する。此藥あつて始めて青少年諸君は天性の美を發輝し得る事であらう。

女子文壇『紀念第百號』

☞五月一日發刊 好評

◉現代婦人百人一首……肖像筆蹟挿入

◉男子も女子も家庭の仕事が減じて來た……文學博士 大塚保治

◉將來の男女の關係……法學博士 上杉愼吉

◉好んで藝術家になるに及ばず……文學博士 井上哲次郎

◉西洋の若き男女の交際……美術學校敎授 藤島武二

●脚本『祇王』……山崎紫紅

◉近頃の婦人問題……鳩山春子

◉母としての自覺……日向きむ子

◉屛風と日本畫……文學士 澤村胡夷

◉女庭訓……文學士 中村春二

◉正直に語る男子の見立……ほと〻ぎす

◉人の生命と食物（上）……澤田順次郎

◉日本百文豪……記者

◉寧樂……窪田空穗

◉與謝野晶子論

△婦人の作物に現はれたる色彩……和田英作
△短歌の爲に生れた人……森田草平
△强烈に我が生を愛す……窪田空穗
△尋常一樣の女流作家に非らず……藤島武二
△心持は貴族式、實際は謹愼な夫人の生活……馬場孤蝶
△和歌の創作三千餘首……河井醉茗

◉我が好む演劇と音樂……名士四十八人

◉門（落人、細道、破三味線、嵯峨、秘密、齋宮）……竹久夢二

◉世界百文豪……記者

▲有のまゝに現はしたる若き女の身の上

△何故時姫や初花に生れなかつたらう（市子）名家の令孃と言はれる苦痛（毒だみ女）△父は大酒家・母はヒステリー、其間に出來た私の個性（맞而女）△靑春の去りゆく時（斷崖の人）△生命より深い愛はないでせう（草の門）△兄の亂行に離散したる一家の悲運（重子）△華やかな時代（かげろふ）△涙多くなつたのも病身の爲め（木村淚花子）△眞實にお可哀想な百合子さん（佐分華影）△早く身の治りをつけたい（島守女）△春の寄宿舍（靜江）△吾を救はん、（露花女）

◉創作

△小說……（水野葉舟選）　△日記……（横瀨夜雨選）
△和歌……（與謝野晶子選）　△詩……（服部嘉香選）
△花……（河井醉茗選）　△動物に對する感想……（溝口白羊選）
△俳句……（内藤鳴雪選）　△詩の言葉（鳥）△木瓜……（蘇生法師）

▲女子文壇追想記

△山田邦子、△長曾我部菊子△加藤重子、△平塚白百合△ふゞき野

▲化粧問答（藤波楽斎）▲誌友くらぶ▲第二回誌友會案内▲雜報

▲口繪▼

滿願の日　竹久夢二筆

本誌が企てたる新しき試みにして、明治の新錦繪とも稱すべきもの本誌二倍大、泰書摺、木版極彩色十六度刷

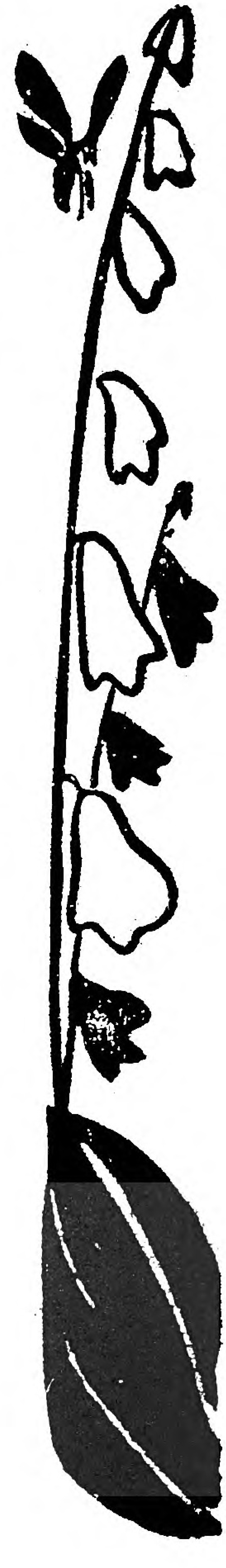
寫眞版　口繪は十二頁皆光澤紙色刷

▲表紙太田三郎▲挿畫渡邊與平、山中古洞、大下藤次郎、岡本一平、竹久夢二、萬代恒志諸伯の筆

紀念第百號に限り ▲ 紙數三百餘頁　定價金三拾錢　送料貳錢五厘

○發行所　東京京橋區大鋸町十、十一（電話京橋六〇七番）振替口座第壹七二九番　女子文壇社

●最寄書店品切の時は本社へ直接注文を乞ふ



創作



小説

水野葉舟選

○結納（天）

信濃　優梨子

お雪はうつとりと障子の縁にもたれて、座敷の敷居際へ坐つた。

どうしても昨晩の事が夢の樣な氣がしてならなかつた。けれどそつと床の間を振返ると、其處には決して夢でない事を證據立てる樣に金銀と紅白の水引が美しく入り亂れて、綺麗に蝶花形に結ばれた結納の贈り物が、六尺の大床に載せられない程列べてあつた。怖いものでも見る樣にちら〳〵それを見たお雪の胸は、今更の樣に大きく波立つた。ぽーつと淡く紅がさした美しい面には可憐しい羞恥がふくまれて、いつも何か見詰めるに恍惚と細い眼をする癖のある其大きな瞳には、限りない望みの色が輝いて居た。

荒い銘仙の袷の袖を膝に疊んで見るともなく垣根に咲いた卯の花を見詰めて居る雪江の胸は、春の夜の樣な柔かいふつくりとしたスヰートなるものであつた。

昨日店の長暖簾も小暖簾も新しいのに變へられて、「××屋呉服店」と襟に染め抜いた、紺の色の好い印袢纒を着た出入の男や店の者が、所在なささうに長い框にずらりと腰掛けて居た頃、お雪は何時もよりぐつと根の高い島田に結つて、派手な紋お召の二枚袷を、

髪結ひのお奈美に着せて貰つて居た。母のお仲は嬉しさうな顔をして、默つてそれを見て居た。さうして二筋三筋出て居た帶の中で、一番着物に寫る樣なのをすーつと長く廣げて、手の方を二つに折つてお奈美に渡した。

「お太鼓に致しませうネ」とお奈美は、何時も雪江が半襟のかゝつた着物に大形の前掛けをかけて居るのを思つて、お仲の氣に合ふ樣な事を云つて見た。

「えゝ其方が溫順しくてネ」とお仲は大きく頷いた。お奈美は何か好い事でもした樣な氣がして、そは〳〵しながら甲斐々々しく雪江の帶を締めた。

上の方へきちんと高く結んだ雪江の姿をお奈美はさも惚れ〳〵した樣に前から見後から眺めした。そして髪結ひらしい口調で無暗とお世辭を云つた。凝と坐つたまゝ娘の美しさを見上げて居たお仲は、お世辭と知りながらも柔かく微笑んで居た。そして

「此頃まで唐人髷に結つて居たものが、もうぢき丸髷になるんですネ」と滿足さうに云つた。おなみは猶更お仲の心持に合ふ樣なことを上すべりのした聲で止度なくしやべつた。いつもは輕い調子で嫌味なくはしやぐお雪も今日は昵と俯向いて恥しさうにして居た。

廣い勝手には手傳ひの人が大勢大きな聲で笑ひながら働いて居た。大抵の人は手傳ひといふのは名許りで皆東京の大店から來るといふ其結納が見たい許りであつた。

上野二番發の汽車が着く時分になると家の中は急にそは〳〵しだした。拭きぬいた長い廊下を急がしさうに行くもの、藏の中から大きな聲で何か聞く者、其騷しい中に包まれて、手持無沙汰さうに八疊の仕度部屋に坐つて居たお雪の心持ちは少しもまとまつて居なかつた。何だか他人の事の樣な氣がしてならなかつた。何時もよりぐつと明るくした店の電燈の光りが、廣い間口から一杯に外へ流れて、其處には近所の人が皆、暖簾の陰へ隱れる樣にして立つて居た。理由も解らない小さな子供までが、がや〳〵と騷ぎながら見て居た。がら〳〵ッと幾臺か車の止まる音がした。はつと思ふともうお雪の胸は息つかひまで苦い程大きく波立つたけれどそれを傍に居るお奈美に知らせまいとするそれだけ、餘計に苦しかつた。お奈美は平氣な顔して、煙草を吸つて居た。

奥座敷の廊下を行く幾つかの足音がする。お奈美は吸殻をぽんと叩いて、ちよつと障子の外へ頸を出して

のぞいて見た。けれどそこからは見えなかつた。とついと立つて勝手の方へ行つた。雪江は獨になつてほつとした。

じつと氣を落ちつけ樣と思ふと猶胸がわくわくした。

「お雪樣！まアそれは大したもので御ざいますつて、お結納を持つてお出でた若い衆さんがネ皆今店に被在いますよ、脊中へ大きく丸に菊の字を書いた印袢纏を着ましてネ」とお奈美は力の入つた低い聲で雪江に云つた。

「さう」と只それだけ云つてお奈美をそつと見上げた雪江の、瞳は美しかつた。

「雪江、さあおいで」と母のお仲が障子に片手をかけて椽に立ちながら呼んだ。

お雪は氣を落ちつける爲に大きく一つ息をしてそして靜かに立つた。



（地賞）　白い藏　京橋　鈴木よろづ子

此間高麗縁に變へた奥座敷には同じ樣な羽織袴の人許りが五六人居た。お雪はぼーつと夢の樣な氣になつて云はれるまゝに下座へ坐つた。

皆の中で一番ゆつたりとした年上の小原といふ今度の仲人の手によつて改ためて贈られた結納、祝ひ物の島臺から末廣までずらりとそこへ列べられた。お雪は只どれにも華美やかに結ばれた水引を美しいと思つた許りで外に何を思ふ暇もなかつた。

「それではお前失禮して」と小さい聲で母に云はれて雪江は人形の樣に丁寧にお叩頭をしたまゝ默つて座をはづした。

ほつとしてそつと頰に觸つて見ると湯上りの時の樣にぽつと上氣して居た。

お奈美は荒い縞お召に派手な長襦袢を重ねて待て居た。ぐつと襟を拔いて恰好よくそれに着變へると、黒ぽい燻んだ色氣だけれど、猶前より粹に艶ぽく見えた。

奥では御酒になつたと見えて、ゆすり上げる樣な小原樣の笑ひ聲が賑やかに聞えた。

雪江はとこへ坐つて好いか解らない樣な氣がして椽の柱によりかゝつたまゝ、今脫ぎ捨てた着物を疊んで居るお奈美の手先を別に注意するでもなく只ぽんやりと見詰めて居た。そして少し氣が落ちつくと今迄に覺えない違つた心持がした。

「雪江あのお父樣がお前に何かお彈きつて、獨りで嫌なら八重ちやんに琴を彈かせるから」とお仲が忙がしさうに云つて來た。

「まア困りますわ、急にそんな事仰有つたつて」と吃驚した樣に云つたけれど、さう困つた樣な色は見えなかつた。

「住吉位ゐなら好いじやないか、それに御祝ひ物の高砂でもしたら」と母も雪江に彈かせたかつた。

「さうネ」と輕く云つたお雪の面にはどこか誇りが見えて、それと同時に自分ながら不思議な程氣が落ちついた。

琴の前へ坐つた可愛い八重子の左側へ、紫縮緬の帛紗から出した撥を持つて俯向いた雪江の姿は、もう振るひつきたい程美しかつた。

お雪はいつまでも〱障子の縁に輕く脊を持たせたまゝ恍惚として居た。中庭に咲いて居る花橘の強い香が、初夏のすつきりとした空氣に溶かされて、ゆるくゆるくすーつと胸に流れ込んだ樣に、ぼーつとなつて――。

○音（四）

草葉つゆ子

たよりの着いたのが、さう、四時頃でもあつたでせうか、其から仕度をして、本家の姉さんと連立つて、行く道々、もう薄暗い新田の雑木林をぬける頃には、利鎌のやうな五日月が、澄み切つた空に、ほんのりと輝いて居りました。

途中も、平素は大の話好きの本家の姉さんさへ、折折二言三言話しかける許りで、二人とも何だかかう云ひしらぬ不安におそはれて、時々話しはしても、始終暗い方に引ばられて行くやうな、淋しい氣持がしてなりませんでした。

一體此度のお俊さんの產（私の從兄の嫁なんです）については、祖母をはじめ、誰れでも喜こんだ中にも、又不安の念は始からあつたのでした。

十八の時に嫁付いて、二十年の間一度も子供を產んだ事はなく、自分は勿論、親類のものも、もうどうしても養子をする事と極めて居たのに、其れが三十七の今年になつての初產！しかも三十七と云ふ年まはりのよくない時の事で、聞いたものは誰れでも一寸眉をよせて考へたのでした。けれども平素が極く丈夫なたちである丈けに、半ば氣遣ひながらも、さして心配する樣子もありませんでしたが、其が私にはどうも、始めからお俊さんは此度の產で、死ぬんぢやないだらうかと云ふ事が、どうしても胸を離れませんでした。

二月許り前でしたが、お俊さんの兄嫁が死んだ時に親類皆より集つて、葬式もすみ、翌日の後客の手傳をし乍ら、山田の叔母さんが、

「お俊さんの腹の太さ、御覽じよ」と私に囁きました時に、私は默つてうなづいたまゝに又一層の不安心になつたのでした。

大きいと云つても馬鹿に大きい。初產の腹は六月位迄は餘り知れないものだと聞いて居りましたのに、之は又七月目の其頃に、まるで人の產月よりももつと大きく、そして苦しさうな樣子をして肩で息をし乍ら、長火鉢によりかゝつて、折々涙をふいて居る有樣を、私は叔母さんと二人、澤山な御膳をはしから拭いてゆき乍ら、私は例のお俊さんは死ぬんぢやなからうかと思ひ〳〵時々眺めて居りました。

其が三日前に產氣付いたと知らせがあつて、母がとりいそぎ手傳にいつたまゝ、其安否を氣遣つて待ちあ

ぐんで、いろ／＼噂をして居りますところへ今のたより、どうしても産れずに、醫者に立會つて貰つて、いよ／＼手術をする事になつたと云ふのです。

二里の山道をせつせと急いで、家に着いた時には、汗はびつしより襦袢の脊を通して居りました。平素は靜かな百姓家に、あか／＼と灯のともつて居るのが、何よりも重大な事のあるのを知らせて、中の口の土間一杯に散らされて、下駄や草履の多いのが、又今更に心にしみました。裏の小川でザッと顔を洗つて、臺所の方にまはると、手傳に來て居た村の御神さん達は忙しさうに炊き出しをして居ました。其時折よく出て來た私の母に、

「母樣どんな樣子？」と、小聲でソッときゝますと、母は頭をふつて眉をよせ乍ら

「さあ、とても駄目だらう」と、小さな聲で囁きました。

座敷に這入つて見ると、重だつた親類のものや、村の人達も多勢集まつて居りました。奥の六疊に、木綿の布團を二枚重ねて、其上に花莚を敷き、白手拭で鉢卷をしたお俊さんが横になつて寢て居ります。側には從兄が、お俊さんの兩手をしつかりとにぎつて、心配さうな蒼黒い顔をして居りました。

無言で一寸目禮した許り、私もズッと側によつて、お俊さんの頭をじッとおさへますと、誰れかと思つたのでせう、伏せて居た眼をじッとあげて私の顔を見つめました。

手術は丁度今始まつたところ、手術と云つても田舍の事ですから、免許のない産婆と開業醫の内科の先生とでする事ですもの、消毒も何にもあつたものではありません。

私はおそろしさと、氣味の惡さと、何ともしれぬゾッとする樣な氣持になつて、母があつちにゆけと云ふらしい眼の知らせを幸に、ソッと次の間にすべり出ました。田に鳴くらしい蛙の聲が、折々二聲三聲とだえがちに聞えてきました。

柱によつて坐つたまゝ耳をすませて居りますと、チキリ、チキリと云ふ鋏らしい音と、プツリッと引ぱつたものゝ切れるやうな物凄い音とが、一座森として水を打つたやうな夜の寂寞を破つてひゞきます。

「さあ、後産丈けになつた。しつかりなされ」と云つた、産婆のお濱婆さんの聲が、ズーンと頭の心まで徹るやうに聞えた時、私は始めてホッとしました。

然し其は遂に駄目なのでした。最後に又急にひどくブッリッ……と云ふ音がしたと思ふと同時に、あッと云つたお俊さんの聲は、遂に死と生との境に起つた最後の聲なのでした。

ドヤ〳〵と人の入るのに附いて、私も無意識に這入つて見ました時には、氣ぬけした樣な産婆と從兄の顔が異樣に眼にうつりました。

何と云ふ悲慘な光景でせう。三十七年の生涯を我子の犧牲として捨てた、お俊さんの蒼白い冷たい顔の横には、水盤に切り出された、子供の手足が血みどろになつて入れられてあります。



（入賞）まひる　朝鮮　横田月子

私は一眼見て、あやふく倒れさうになりました。

○藻のやうな女（入）

豐橋　月靈子

お養父さま——實に私は情なうございます、私はもう一日だつて信彌の傍に居るのは嫌になりました。私はお養父さまに對して、今までに一度だつて信彌の日常に就いて、兎や角う申し上げた事はありませんので、突然這那事を云ひましたら、お養父さまは吃驚もし、又どんなにかお立腹な

さる事でせう。

信彌は此の節ちよい／＼夜を更かして、歸つてくるやうになりました。其して歸つてきましても、呆然疲れたやうな、氣拔したやうな風で居ります、藝者と何とかしたつて云ひますけれど、私はそれは何方でもいいのです。信彌が私を詰らなくなつて、他の女が戀しくなつたのなら、キッパリ私に然ういへば、私は直ぐにも身の振り方を付けたいと思ふのですけれど、眞個は僅とも信彌の態度が私には不可解せん。『暇を下さい』つて云へばホロ／＼涙をこぼして、『何卒俺が惡かつたから居てくれ』と賴むやうに云ひます。

お養父さま――

一體私は始めつから信彌といふ人は、氣の多い人だと思ひました。私が嫁ました當時も、ちよいとした女と見れば、あゝだの違うだのと批評して、揚句の果には『彼女ならちよいと暮せるぜ』なんて云ふんですもの。お養父さま、おとうさまは違ういつたらハヽヽッてお笑ひなさるでせうけれど、私だつて信彌がその時分どう云ふ心持で私に平氣で彼那こと云つたか、今ならそれはお養父さまよりはよく可解てゐるつもりですわ。けれど此の節の信彌ね冗談は愚か、全然微笑ともしませんのですもの、ヽヽヽヽ、ヒョロリッとして居て、眼付きが氣味が惡るくつて。嫌だあゝ嫌だ、思つても嫌だ。

お養父さま――

此の間私が何氣なくきいて居ますと、信彌は友達と這那ことを話していました。

『高等下女かハヽヽ』これは信彌。

『然うさ君、僕ら嬶が何云はうと、ハイ／＼まあどうか宜しくて濟して居る。無月給で家事の負擔を背負へるだけ背負はして居ると思へば、文句は云へん、どんな酷い事をいはれたつて、ふん下女めと思ふと、其れがすぐ憐憫の情に變つてくる』これは友。

『要するに甘いんだね』

『いや大いに違ふ』

『違はないね、僕なんぞ齒牙にかけんと云ふよりは、寧ろ恐い』其れから稍話聲が杜絶える。暫くして、

『有るからだらう？』友の方。

『あゝ君はさう思ひたまへ』信彌。

『美いんだもの君、全く』

『わるかつたら如何解釋する？』

『どうつて……僕等の眼に醜くたつて、君にはどうかもしれんさ』

お養父さま——

この會話をきいて下さい、二人とも私には不可解いと思つて言つてたんですよ。それからまだ黒人は表情がいゝの、快活だの身だしなみがいゝのつて、私だつて身ぎれいにも快活にも、仕やうと思へばいくらでもしますわ、けれど誰がもう信彌の前なんぞで仕ませう。あゝ寧そ私藝者になつて了ふかしら！

お養父さま、お養父さま、つひ口が辷りました。お養父さまは面白い事有仰つては、私にからかつたりなぞなさるものだから、何んでも思つた儘を書いてしまつて。何卒這那ことは豐島の實父には云はないで置いて下さい。

寂しい愁い感情が胸一杯になつてきました。

『汝のやうな者は事務員が嫌になつたやうに、屹度細君が面倒臭くなつてくる、ま其れもいゝさ』。私はお養父樣にいはれた事を思ひ浮べました。あれほどお父さまの前であゝした風に信彌を語つておきながら、今わるく云ふのは厚顔しうございますけれど、併し私は始めて男の一面を知りえたやうな氣がします。

お養父さま——

今度こそ私は確然しますから、どうぞ私を引とつて下さい、どう云ふ事があつても何をしても屹度獨立しやうと思ひます。教員だの事務員だのつて、其那コセコセした事はしないで、私はもつと〳〵自分の性質にしつくり合つたものを選びたいと思ひます。

お養父さま、私は此の前始めてお養父さまとお遭遇しました時、おとうさまは何故あんなにスッ〳〵と素氣ないやうな話やうをなすつたの。私は眞實はあの時信彌の事を云つ付けて終はうと思つたのですけれど、お養父さまは信彌のことを變に、褒めてばかりいらつしやるのですもの。

其れではお養父樣、是非お返事を願ひます。お養父さまが、豐島の實父のやうに『馬鹿ッ』なんて、御返事下さると、私はもう死んぢまふより外、仕方がありません。

咲郎さんによろしく、此の手紙のことは咲郎さんにはきつと〳〵話さないで下さい。さようなら。

里子より

父上樣へ

○開封

濱横　千鶴子

Ｓと別れて、此寄宿舍に三枝子は入舍つた。慣れない土地で新奇しい人に接した三枝子は、孤獨の淋びしさを痛切に感じた。Ｓを思ふ情が、淋びしみを深く感じる程、強くなつた。幾度か音信をしやうと思つたが、異性にとの人の思慮を恐れて、思切つたことをしなかつた。

二月たつた雨の夜、頭痛がすると三枝子は夜學を休むだ。そして現在の身と、別れてからの胸を、事更に誇張して書けるつたけ書いた、其れで胸の蟠を一時に吐き出した樣にせい〳〵した。其翌朝通學生の岩子に

「ね岩子さん、後生一生のお願があるのよ、聞いて頂戴ね、此手紙從兄に出すのよ、ですけれど皆樣に變に思はれるといやだから、誰にも祕密で投れて頂戴ね、きつとよ」

と賴むだ、然し不安でく〳〵たまらなかつた。先生に知れたら、着かなかつたら、此樣な思ひを繰返した。

「岩子さん慥に投れて下すつて？」

「え……慥に投れてよ、未だ御返事來なくつて？最早來さうなものね、きつと今夜あたり來るわ」

我慢ができなくつて三枝子は此樣事を聞いて見た。

四日目にやつとＳから返事が來た。彼女に同情した熱した文句や、別れてから彼女に對する熱烈な思ひを長く〳〵書いてあつた。封筒の裏面に女らしい弱々しい筆蹟で、美代子と書れてあつた。三枝子は嬉しかつた。彼女自身が抱いてる悲しみを、より以上に同情し、然して別れてから、自分を戀してる心が豫想以上なので男心を嬉しくも思つた。哀とも思つた。

此樣にして三枝子は、嚴格しい舍監の眼をかすめてＳとの交際をつゞけた。

三枝子は慣るにつれてよく東京の事を話した。興にのると上野や、日比谷で演せられる、男女學生の戀を臆面も無く語つた。先生や上級生の手前に氣を兼ねて側の人達ははら〳〵してた、が、若い血を躍らせる樣な戀物語を、面白く聞いた。

「三枝子さんは何故東京に彼樣に學校が有るくせに、わざ〳〵横濱なんぞに來たのでせう？可笑いわね」

「きつと曰くがあると思ふのよ」

其樣な風評を耳にした時三枝子の胸は後暗かつた――知れるとも無しにＳと三枝子との關係が父の耳に入つた。昔氣質の彼女の父は堪當すると迄立腹した。三枝子は其權幕に恐れて泣いて謝罪つた、母も泣いた。其夜から彼女は一歩も戶外に出る事は許され無かつた

三月許り後に品行匡正の爲めとミッション寄宿に入舍つた、——其夜の恐ろしかつた父の顔が浮んだ時既うSとは別れて仕舞はうと思つた。が、眼の釣上つて男らしいSを思ふと堪ら無く戀しくなつた或物が二人の間に結びついて切つても切れ無いと三枝子は思つた、それを無理にも切捨てる程の決意もつかなかつた。三枝子は人眼を恐る恐る不安な快樂を續けてた。

六七月たつた或朝の事だつた、誰云ふとも無く開封されたと云ひ出した。



わが友の一人　水戸　玉川すま子

不意の出來事、寄宿生達は大事件でもある様に騒ぎまはつた三枝子が食堂の前の樓下を歩いてた時、向ふから三人の上級生が小聲で語りながら來た。「其手紙が異性からだと云ふから驚いたわね、然も女名前だつたんですつて」と一人は云つた。三枝子が側を通つた時、左側の人が「不安の快樂！」と云つて三枝子をちろりと視た三枝子はぎつくりした。開封の話は其れから其れへと傳達されて、パッと學校中に擴がつて仕舞つた。三枝子は相

變らず快活に騒ぎ廻つてた、が、開封の話になると默つてしまつた。其日親友の秀子に、
「華美なるべき青春時代ですもの、たんと甘い思出をしたいわね」と語つた時、宗教學校仕込の秀子は驚いた樣に返事もしなかつた。三枝子は勝誇つた樣に弱い秀子を冷笑した。其夜三枝子はSから來た手紙を一纏にして燒いて仕舞はうと思つたが、手紙を出して見ると今迄にないなつかしみを感じた、一つ／＼繰返して其當時のSの姿や思を追想すると、たまらなく戀しくなつた、其手紙を燒のが殘多くなつて仕舞つた。何處か人眼に觸れ無い處に隱さうと、戸棚から柳行李を出して、冬物の一番下の着物の間に入れて仕舞つといた其れで三枝子はほつとした。

○お　清（つゝき）

土佐　はざくら

お淸は化粧すると『孃さん私の顏は妙に澤がありますぞのうし、宅に居る時分は名代で御ざいました』と口ぐせの樣によくこんな事を云ひました。

本たうに、面高の眉も目も調なうた、二十九の年には若い女でした。そしてお淸には春枝といふ女の子があつた。お淸が二十三の年、夫に死なれて、其時七歳の春枝を祖母の手にのこして、人の家に奉公する身となつたのです。お淸が私のうちに居る時分には、學校が休みになると必つと春枝は來ました、私より二つ年下の春枝は、おませで口のたつ勝氣な娘でした。

小ぎれいにした店の間に腰かけて、お淸と並ぶと、矢張り三十の女とは見えぬ程に若い。氣づいて見るとお淸は丸髷に結つてゐる。矢張り佐助さんと一緒にゐるんだなと思つて『こゝはお前さんの宅？佐助さんとの……』

『いんげ孃さん、もうあんな者とは別れましたぜよほほゝゝ』と若く笑うて內らに這入つたお淸は、やがて紅蜜柑を十四五持つてきて、白紙の上へのせた。

『孃さん何にもおあいそなしで御ざいますのうし、これでも食つてつかさいませ』と皮をむいてくれた。

『淸、かまふとうせな、何にもいらんから』

『まあ孃さん聞いてつかさいませ、お宅に居る時分には佐助の親切にほだされて、あんな不始末をしましたが、今になると阿呆らしうてたまりません。あれから××へ行て世帯を持つて共稼をして居りましたが、半季と經つかたゝんうらに、遊うで金をつかひ出して、

少々の溜金どころか、着物も何も一つもなしになつてしまひました。私はもう腹が立つて〱のうし嬢さんあんな事した報で御ざいますろかのうしほゝゝ、食ふや食はずで、ずつない目に逢はされました。それから去年の暮に、とうたう別れてしまひましたほゝゝ』『そして此家は』『それからはもうちやんと眞面目になつて、家へ歸んで手つなうて居るうちに、世話のしてくれ人があつて、今年の春此家へ來ましたが、存外眞面目な働人の樣で御ざいますきに、まあどうぞ、かうぞやつていけよりますが、働いたら食べん事もないきに、精出してやつて、佐助にこゝ見よがしにしようと思うて居りますほゝゝゝ』と卑しうに笑ふ。

『春枝さんも大分大うなつつらうのうし』

『アイ、あれも軀ばつかりは太うて、心はまだ子供で御ざいますが、そんでも看護婦になると云うて、祖母が憤つて止めても聞きませず、とうたう看護婦の見習に行きましたが、どうなりますか、嬢さん等の樣に學問があつたらよござい ますけんど、春枝もどんな者になるやらわかりますか』『さうかね、存外面白い娘だやてと、早そんな年になるかね、早いもののうし』『いつぞや春枝も行て居つた時に、お花見に行きがけに、嬢さんの樣な着物がきたいの、あんな頰の色になりたい云うて、皆を笑はしましたがのうし、早いもので御ざいます』『それから佐助さんはどうしたぞね』『彼等が事を知りますものか』

談のきれめにお淸がみかんをはいでゐたから、私はいゝ機に立ち上つて『えらい長いからもう行かう』『まあ折角で御ざいますに、ほんの素談ですみませざつたのうし、お歸りがけにはお寄りつかさいませ』『はい、ちつと來なされよ』私が出ると、お淸も軒口まで出て來ました。

いやしい行を意識せずにゐる、あんな女が世間にあるのを思うて、道々も淡い悲しみを感じました。(をはり)

○其初め

常陸　木村那賀子

「お賀代ちやんの情人はね……あの人……ほゝゝ」

「さう〱、お向ふのねえ……私も知つてるわ」

「ほつほゝゝゝ」

「ほゝゝゝ」

同じ長屋の娘達が井戸端へ集ると終ひには必と此麼事を云ひ合つた。お賀代は其娘等の中で一番年上の二

十一だつた。自分よりは三つも四つも年下な、まだ子供に見られてるやうな娘の云ふ事を半分眞面目になつて訊いた。して其人を妙にきゝたい、「誰々」と名を云はれて見たい。で「誰だと思つてるの……知りもしないで、敎へて上げやうか」なんて、故意と戯談らしく其實お腹の中では一生懸命でかゝつた。すると誰がいひはじめたともなく「知つてるよう……だ、お向ふの信一さんだよ、ねえ……」と誰でも云つた、さう云はれる毎にお賀代は、信一に對する懷しさが一層增した。信一と云ふのはお賀代の家の眞向ふの、大きな荒物問屋の店の者で、お賀代よりは一つ下の二十で、色の白い丸顔な丈の高い、割合に子供〳〵した、無邪氣な男で、七八人もゐる若衆の中で一番人懷しい男だ……と最初はたゞそれだけの感じしかお賀代の胸にはなかつた。其荒物屋の店の者の着物は大抵お賀代が縫つた。信一のも縫つた。で時々お賀代の所へ來た。其麽時お賀代はいつも弟に對するやうな態度を取つてゐた。自分よりは年下の、そして子供〳〵した信一には、何うしても他の年配の異性に對するやうな感じはしなかつた。此春信一が水戸の伯母の家へ行つて來た時其伯母なる人が買つて寄越した、と云つて呉れた、クリーム色のはでなはんえりを、お賀代は何とも思はずに貰つた。お友達に「まあいゝえりだてと、何處で」と訊かれると「お向ふの信一さんに貰つたのよ」と平氣で云つた。それが「お賀代ちやんの情人は、お向ふの信一さんよ」なんて云はれるやうになつてから何となく其はんえりが氣になつた。何うしても意味があるやうに思はれてならなかつた。「信一さん、本當に私の事何とか思つてるのかしら……」と思ふと、もう從來のやうに信一に對して平氣でゐられなかつた。それ迄は、朝夕顔を見合せても何とも思はなかつたのが、視線が合ふと思はず知らず顔が眞赤になつて了ふ。髮の形や、衣服まで氣にかける。して信一を見るのが恥かしくなつた。信一ばかりではない、他の者に見られるのも極りが惡いやうな氣がした。けれど、どうしても見ないではゐられなかつた。自分に對する信一の態度を以前よりは、より以上信一の樣子を注目した。お賀代が信一を見る時、必と信一もお賀代を見てゐた。してお互ひに顔を眞赤にして俯向いた。信一が横を向いてる時お賀代は信一が自分の方を見る迄見つめてゐた。して信一が此方を見るとツイと外へ顔をそらして、直ぐ又見た。其麽時には二人で必と笑つた。それから信一が

大勢の店の者に何か謔かはれてゐる時等、お賀代が見ると、店の者が一齊にお賀代を見て笑つた。して信一が背中などたゝかれて、眞赤になつた顔を見ることもあつた。そんな事が幾日も幾日も續いた。

顔を見合せても赤くもならず、店の者に信一が冷かされる事もなく、お賀代が友達や近所の娘等に何とも云はれなくなつた頃は、二人はもう深い深い交情になつてゐた。

選評

選者

△今回は投書が意外に少かつた。一應、讀み終つた後に以下の作を殘した。

△動搖(横濱 月草) 何かに例のカラクリをのぞくやうな心持を感じさせる作と思つた。

△結納(信濃 優梨子) 上手には成つた。しかし、この人の作はまだ「たゞ事」たる域を脱しきれない處がある。もつと落ち着いて深く考へて見て欲しい。藝術の生命と言ふものは何處にあるか。藝術が人間の必然の要求である故は如何なる點であるか。高等な人間が、靜かな心で藝術に聞かうとする所以は何の故か……たゞ、一寸したウイツトと、巧みにものを言ふといふ技巧とが出來てしまつただけでは、遂に眞實の藝術の境とは遠かつて行くに過ぎなくなる。靜かに考へて進んで欲しいものである。

△長閑(長岡 秋月すゞ子) 拙い。

△友の一人(土佐 葉櫻) この作者の心持からして、習慣的で、平俗な心持だ、作は作者の心が孕むものである事を忘れぬやう。

△雨の日(福島 春子) この人の才は、嫌味な感が多く伴ふ。浮付いて居て、本氣になつた處が足りぬ。中々才のある人と思ふだけに自



床几　本郷　稻垣光

分はその心がたつと沈んで、正しくものに感ずるやうになられん事を希望する。

△姉妹(伯耆　ふみ子)　如何も力が足りぬ。あまり調子がよく書いてありすぎる。つまり、本當でなく思はれる。

△女(豐前　美音子)　どうか、諸君は自分自身で眞實を見ようと努力してほしい。何時見ても、女の小說は小感情を誇張して、それでもつて自分の好きな事を言つて居る。そんな小說の爲めに言ふのでは無い。丁度、これを讀んだこれは必ずしもこの小說ばかりの多いのは心細いわけである。時に思ひついたから書いただけである。さてこの作は、やはりこの女子文壇で幾度も幾度も聞かされる、小嫉妬の話であつた。

△開封(横濱　千鶴子)　この作を自分は好いとは思はぬが、たゞあつた儘を書かうとした結果が、不自然な心持を起させなかつた。勿論、それ以上に、何にもあらうとは思はれぬ。たゞ、この奧に光るものが、自然にきらめくやうに、なるやうに作者は努力されたいものである。

△病院の香(東京　さすらひ)　一寸氣のきいた處があるやうで、案外幼稚な作。文章はうまいと思つた。

△狂女(高松　燕子)　もつと正直に目を大きく開けて「自然」を見るようになさい。

△藻のやうな女(豐橋　月雪子)　つまり觀照の度が足りぬ、と一語言ふより外はない。この人は隨分熱心に作をして居られるが、如何も、も一歩出づべくして出ぬ。多く考へ、多く讀み、多く觀る事も大切。同時にこれ等凡てが自分の心の伸びる爲めである事を忘れないで歩いてほしいものだ。

△お小夜(岐阜　葛の葉)　汚れたやうな感じのする作である。考察と言ふ事が少しもして無い作である。

△音(長崎　草葉露子)　これは藝術の境を出て實感の境にある作である。これだけ、刺激力の強い話であるから、これが一つの藝術品に成つて來て居たらば、非常によかつたらう。

△逝く春の朝(東京　水仙)　この作の値の少い譯はつまり、この人のものを見る目が幼く、習俗的だからなのだ。

△經子と夫(東京　くれたけ)　自分はこの人達に何か一番適切なアドバイスをして上げ度いと思つて、非常に困つた。しかし言ふ言葉が一寸見付からぬ。も少し、勉强をして欲い。いゝ小說を讀んで分るように先づそれから努力するんですね。

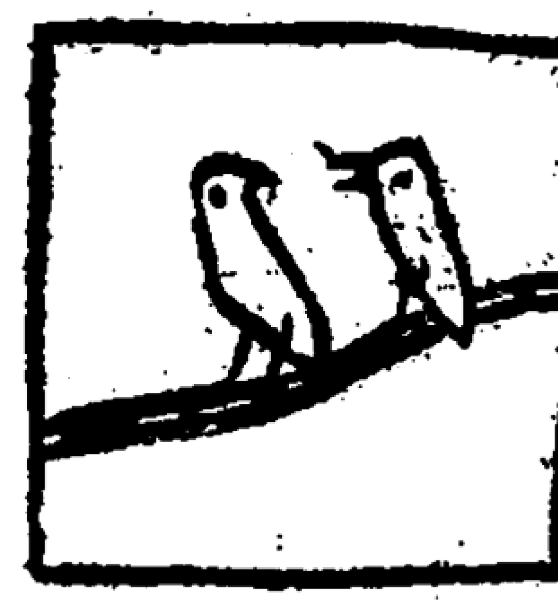
△事務員(中島幸枝)　自分と言ふものを見てない。自分の感情が全體になつて居る。これが缺點である。

△其初め(常陸　木村那賀子)　も少し充分に心持が書けたらよかつたらう。しかし、この作者のとしては、いゝ方である。で、以下の順序でとる。

(天)結納――(地)音――(人)藻のやうな女――其初め――開封

文壇よしなし言

▲文藝委員會の政府筋では金五千圓の賞を懸けて傑作を募らうと云ふし、委員連中は懸賞で傑作は得られないと云ふ、孰れが是か非か▲森田草平氏の『自敍傳』は第一着に委員會の審査を受けてみるとの評判である▲大阪の誓願寺と云ふ寺の坊さんは、門前に『文學士井原西鶴墓』と書いたしるしを建てた當年の浮世草紙の作家も文學士とやられては閉口したらう▲大阪と云へば同地から出る都會と云ふ雜誌は體裁等に於て地方雜誌中でも垢拔のしたものだが、內容は未たそれほど損はない▲雜誌『文章世界』で文壇十傑の投票を募つてゐる、飜譯家の森鷗外氏、史論家の山路愛山氏、歌人の與謝野晶子氏、詩人の北原白秋氏などは先づ動かぬ處であらうが、小說家や、戲曲家や、批評家は誰が一番になるだらう、少々困つたことを企てたものだ▲島崎藤村論があちこちに出る、生田長江氏の議論は明快であつたが少し氣取つた處が見える▲文學雜誌の中心では『三田文學』が最も面白い、荷風氏の浮世繪の夢は詩を讀むやうだ。(S)



散文

編輯局選

○麥笛（他）

大分　赤きはな

京人形の心地よく眠つた樣な幼子の小さな軟い䫌にふれてゆらぐ常夏の新綠清々しい朝を、斯う唇と唇とをすり合せ乍ら、蝶々のリボンなびかせて、袴の後を心持ち高くきりつとはいた、優しい十四ばかりの子が每朝每夕時を定めて通る。朝は七時、歸りは四時きつと／＼麥笛か、新らしい綠葉かの笛を四度ふいて……調子の高く低く、長く短く、水の底に——コバルトの空に、溫い呼吸のつゞく限りに面白くふく。あゝ！床しい其調べ！愛らしい其姿!!其眸！あゝ其唇!!!私は何うしても忘るゝ事が出來ない！命のある限りは……吁此の少女が——私の——私の妹であつたら、無邪氣な愛らしい顏は、美しい顏は、自分では洗はせまいものを！私が心のまゝに美しう、思ひのまゝに愛らしう、つくつて、彼の麥の笛も私が取つて、優しい、細い指に握らせて、側からうつとりして見る事も出來ようものを！するり後にたらした黑い髮も、艶やかに結つてやつてリボンもくしも……吁々！神よ！御兩親樣よ！妹と呼ばして下さいませんか?! 妹と——妹と。あれもう七時！笛がなつた。足音が聞える。私はかけ出した。休みなく進む時計も、笛の音も、足音も皆私に知らせる合圖なのか。美しい人のきた事を……。若々しい梢の葉を紅い唇にくはへて、ぶる／＼と細やかな波をゆらせて、美い音を、床しい調べを、新らしい青い香に浴した朝の空氣に運ばせてゐる。まあ美しい音だ事！床しい調べだこと！リボンが紅にそと流れる。心地よい朝の風が枯れた木の葉を——老いて死に落ちた去年の葉を、くる／＼とまきあげて庭のくもの巣に吹きつけた。乾ききつた道の砂を吹きまくつて私の前をよぎりもした。こぼれ毛がハラ／＼する。ほてりは北に走つて少女の後を追つた。彼のほてりの中には小石はないだらうか？可愛い心の妹の足にあたりはしないだらうか?!ほてりよ小石よ！妹の後を追はずともよくはないの？北に走らなくてもよいのだらう？私をいぢめるの？苦しめるの？吁！吁！風よ！止んでほしい！紅いばらが倒れるわ！少女の袂がちぎれるわ！紅い

友染の振がこぼれるわ。髪が亂れるわ。おゝみね子さん私の妹！あらみね子さんていふお名ですのよ。私はまだ突立つてゐる。見送つてゐる。若葉が風にゆられる。あれ〳〵〳〵。

内容はつまらぬけれど、手腕は侮るべからず、けれど疑はしいのはこれだけの文を書く人が、今までどうして下流に沈没してゐたかといふことだ。もう二三べん見なければ眞僞のほどは確められない。麥笛は誰でも鳴らせるものだが、さう〳〵毎日引こぬいて笛にされてはもつての外の「畠荒し」としてお百姓にとつちめられませんか。(X)

それはどのものとも思はないが、何處かに熱がある、其熱のある處が一寸人を引つける、鬼に角見出されたる一人であらう(醉茗)

○わが世界（地）

金澤くちなし

再びは出じと心に誓つた庭へ——

何の醉興で共に出たか、着飾りし友と小紋更紗のところ〴〵涙のにじんだ跡のある着物を纏た私と竝んで花壇の前に立つた時は言葉は笑つて居たけれども胸は泣て居た。骨のやうな梢もいつのまにか青々とした綠り葉をつけて春は疾に逝つて居た、咲き榮はどうであつたか淋しい椽側へは二三片白い花瓣が翻つてきたけれども今はあとだもなく青くなつて居て頰にあたる風も何となく初夏らしい感じがした。暫く見ぬまに庭はこんなに變化したのかと思ふと私は自分ひとり出し拔かれたやうに悲しかつた。くわつと燃えるやうな霧島を二人共一片摘んで唇にあてながら靜かに語り出した「私よく杖をついたことがあるのよ」「あなたも足を患ひなすつたの」「いゝえ私のゝぢやなくて篤ちやんのをおもちやについて遊んだの」あゝ必要なき人はおもちやに思ふだらう、友がおもちやがはりについて居るのを御覽なすつた時の篤さんの感じはどうであつたらう、私は、私は自分の姿を知らぬけれども妹がまねをやる時には涙が出る。垣根のところから喋り好の隣りの神さんが私を覗いて居た、「あなたあちらへ行きませうよ人が覗いて嫌ですから」と言つて萩の五六寸程のびた所へ逃れるやうにして來ると「贅澤だね」と友は言つた、あゝ此擧動が贅澤なのか。けれど、けれど贅澤だと言はれては私立つ瀨がない、女が生れもつかぬ癡人となつて百度千度悔いて居るのを世の人は贅澤だ虚榮だと罵る、私は唇をきつと嚙んで林檎の花のはらはら散るのを淋しい想をして眺めた。

宵の間から蚯蚓がなき出してひとり眼さめて居る枕もとへきこえる、十日あまりの月は明るく二間四枚の障子を照して廣い部屋に一つのべてある床が夜目にあり〳〵と見える。

かねてから斯くあらんありたいと思つて居た、さうして時には冷やかな微笑を洩して居たが、今日慫うと

氣がついてみると唯涙が出る。

あかるい洋燈の灯に照らされて何氣なく披いた我が胸は夜とは言ひ條自分ながら白いと思つた、机の上のガラスの花瓶に挿してある白躑躅とくらべてみて花よりも我肌の方が柔かさうで尊いと自分を愛する念が一時に湧いてきて横にあつた鏡をとつて長い首の邊をうつとり夢心地で眺めて涙ぐんだ、何を偽はらう、此時ほど自分を美しいと思つたことはなかつた、さうして此儘朽ちゆくべき自分の運命を此時ほど淋しいと思つたことはなかつた。誰も居ない儘に凝乎と我肌をうつしみて最後に再び左の方の乳の下を輕くおさへて胸を掻き合せた。十時だつた、柔かな胸を見た時の淡い淋しさと腫れてゐる痛き箇所を見出した時の言ひ知らぬ心細さとを歌ひたくなつて鉛筆をとつて「悲しきさだめにひとりなく哉」と書いて上の句をつがうとしたけれども出てこなかつた、たつた十七文字にこの迫つた感情を言ひあらはすのはあまりに句が短かゝつたのであ



むすぶの神　北海道　岩本とよ子

つた。鉛筆を措いて抽斗から日記帳を取り出したペンで今日のところへ晴れと書いた「ネルに着かへる」「終日左の胸が痛む、深く呼吸をする時は乳の下が激しくいたんで不安な氣持がする、朝目の醒めぎはは左半身が切なくて起きたくないやうな氣がする、今日も例により九時打つてから起きる」「夕方風が出てきたので非常に嬉しかつた緣側に出て欄干に腰かけた儘柱に凭れて居ると月が出た、いつの間にか朧ではなくなつて清く澄んで少し赤みを帶びて居た、星が一つ油書をかく人が眸をこしらへたやうにあらはれた。三代子が出てきて「月だの星だのは私等には近いものでせう」といふ、同じ太陽のぐるりに居るからならば私と三代子はなほ近いものだ、けれど心は片時だつて同じであつたことがない、淋しい、淋しいと思ひながら、私よりは賢こい妹をつくぐ見入つた。淋しく取り殘されたる哀なる姉よ、影が明らかに緣側に映る頃机の前へ來た。夕飯後胸の痛さに堪へられず衿を掻き擴げてみる、左の乳の下がぼうと腫れて格好が變つて居た、右の方は押へれば指のあとがついた儘いつ迄ももとの通りにならない、やつと肥えたと思つて喜んで居たに、愈々遂の日、と恁う思つたら悲しさが一時にこみあげてきてこれがあんなに死にたいと願つた私であらうかと怪まれた。自殺をするとか死にたいとかよく口走る人はきつと不眞面目に口の先ばかりで言ふか、さもなければ無意識に表面だけの神經が言はせる根據なき言葉だと此時始めて痛切に感じた。不具の身の望の絲も切れてしまつた、自分から死んだ方が幸福だとひたすら死を願つて居た私も、さあ今死ぬと眞けんに考へてみると唯たよりない、唯心細い、死ぬのは決して可恐くないけれども一人土の中へ埋められるのが悲しい、が生きて居たところいつ春がめぐつて來やう――、私は私はよし心細くとも悲しくとも、生れた前は覺えがないから死んだ後も覺えがなからう、もう一つ書き殘しておきたい事があつたけれども死んで行く私がこの思だけ人に知られたくないと思つてわざと書かなかつた。

時計が十一打つた。

「滑稽なる書置の一」となるかどうかは今問ふを要しない、死後人に知らるゝを厭ふ或る一事は、不犯に終る誇りを以てつゝのふことが出來よう、されどつゝのひ難きはその涙――千たび悔いもゝたび歎けども囘すべからざる悲みであらう。

頌松亭の集りに私を指さして笑つて居た姉妹の女があつた、姉なるは現に少女小說などを書いてゐる若き婦人で、妹は本誌に寫眞を出したこともある△△子といふ女だ。厭施、何の罪か有りて衆人公座の中に於いて二人の女に辱しめられたか自分は知らない。住むべき世界の無いのはもとから覺悟してゐた、私を聖なる兄と呼んだ人はあつた、師と呼んだ人もあつた、けれどそれは或便利を得んが爲の一時の方便であつたのだ、癡人にとつては萬人皆路傍の人である。私は二人によりて與へられたる侮辱が最後の侮辱であつたと思ひたい。呪はれて居れよ、わが涙は七生にわたりてなほ新しからん。(Y)

○南洋の思ひ出（八）

麻布　静代

今や夕陽は幾條かのまばゆい金の征矢を浪の上に投げ出しつゝ勇將のかちどき上げて進む其如くに沈みゆく。オレンジ色に染め出されたる空はだん／＼と變りゆき暗のとばりはやがて靜かに……靜かに……無限の秘密をつゝみながら此の世を掩ふべく下されてくる。熱さに耐へがたき赤道直下の海の上も、さすが夕方なので、絶えず涼しい潮風が身をおそふて、後れ毛がはら／＼とほゝを掠める。私は一人甲板の上に立つて、暮れゆくこの自然の景をじつと眺めてゐると、猛り狂ふ浪の響と共に、そゝりたつ胸の血汐は、次第に高くなり、果てはこの身も其のまゝ何物かに引きいられさう。みどりの島影が地平線の彼方に隱れた時には、いひ知らぬ淋びしさが胸に湧いてきて、涙がほゝを傳ふばかりだつたが……何處を見てもたゞ蒼い空と、果てしない水の外に目にいるものとてなき私にとつては何よりこの夕ぐれがなつかしい。

船がだん／＼と遠ざかるにつれて、樂しかりし追想の糸はそれから／＼へと亂れて、私の心は常にかの地へと馳てるのである。父がある重要な任務を帶びて、この南洋のトクウに行くこととなり、共に伴はれたのも早幾年かあととなつた。昔は難船して流れついた人を、土人が寄つてたかつてたゝき殺し、舌づゝみしながら食べたといふ所——私はそれを聞いた時にはいやだ／＼と柱にかぢり付いて泣いたけれど……船が玄海灘を過ぎて周圍の有樣がちがつて行くのにしたがひ、前の恐ろしさはどこへやら、未だ見たり聞いたりしたことのない珍らしいことばかりなので、少な胸はたゞ想像に充される外はなかつた。

住めばいづこも同じ都とか、故國を三千八百哩も隔つた野蠻な土地でも馴れゝば思つた程の不自由もなく月に一度寄港する貿易船により、僅に世界の有樣をしるの外、何も分らないごく平和な生活だつた。土人といへば夏でも冬でも腰へ少し布をまとふたぎり眞裸で顔や手足はまるで赤銅色、髪の毛は伸び放題で栗の毬の樣、入れ墨した口のあたり、ぎら／＼光る眼、どうしても鬼としか見えないおそろしい姿だけれど、なかなか親切にしてくれた。椰子の實をくりぬいた器に、正體も知れぬ食物を盛つてきて食べるのに閉口したことや、手づかみでむしや／＼やるので驚いたのもまだはつきりと印象されてゐる。椰子樹しげれる其蔭で、丁度十六世紀時代の天主會堂風な學校でスペイン訛り

のある佛蘭西の宣教師から、二十何人といふ土人の子と共に教はつたり、海邊に出でゝ赤い月のするくと昇る頃手にくたいまつふりかざして音頭と共に盆踊りの様に幾群かの男女のをどるのを恐はがりながら見たのも、あゝ今は過去となつて仕舞つた。歡樂の醉さめた少女が二度とこぬ青春を惜むごと……私は……去りたくないけれども今はたゞ暗いその影を逐ふて泣くばかり……僅にせめての名殘りと寫眞ブックにをさめられたその面影よ……私は決して忘るゝことの出來ない南の國を思ひでゝいつまでもくこの夢より醒めたくない……雨の袂を胸にあてゝこの夕ぐれにありし昔の夢をくりかへす、これが何より淋しい心にとつては命なのだ……さらば幸多かれよ南の國よ……人よ……海よ……。

一少女の身で南洋に住んでゐたとは、話としても珍しい、前半の文章はなまじつか文飾をしやうとした爲に眼を驚かすやうなこともないが、後半南洋のはなれ島の生活を描いた邊りは、まアあなたが——と云つて驚きの眼を瞠りたくなる、一種の好奇心と言はば言へ、一婦人の閲歴としては確に聞く價値が充分にある(醉茗)

半分までは事件其ものゝ面白味で、しかも冷眼に視れば、拍案驚奇といふ程のものではないが、兎に角珍らしいとは云へる。不要な裝の衣を捨て、今度はもつと直截に書いたものを見たい。(白羊)

○ニコライ堂にて　（人）

牛込　平塚白百合

静やかに鐘は深更の空氣にふるへながら誇張されつつなりひゞいた。

一音！二音！澄みわたつた空の下に私は輝ある星の光りをあびてニコライ堂の御影石の階段に立つた。

終日深くたてこめた塵埃は、少女のやうに活きくと華やかだつた都會の臨終にかける衣のやうに下り沈んで、天も地も清いくものである。この廣い天地に鐘の音と若葉の奔放な生氣とは、初夏の透明な夜の空氣をみたして、窓からさす火影に黒い木の下、石段の上に、集まれる人達は歡喜にみちたさゝやきがつゞられる。鐘はなりしづまつた。おもむろに、おもむろに讃美歌は堂の中から起つて戸口にと近づいてくる。

眞先に十字架は燭の火にきらめいてさゝげられる。つゞいてスックリ高い主教の姿、引そうて信徒の群れはつゞいた。皆手にく命のやうに蠟の火をかざして、丁度ナザレの群れが砂漠をゆくかのやうに、靜かに堂のまはりを一週する。

眞うしろにまはつた頃、讃美の歌もきこえなかつた。何もない沙漠にのこされたやうに私は只一人沈默の底に煌く星をあふいだ。——遠いはてしもない音のない國へでも引き込まれるやうに私の胸がふるへたとき、苔さびた高い建物のグラスに灯の影がして、大きな火の行列はおごそかに救ひの手のやうに近よつてくる。

ナザレの行者!!深夜胸をときめかして聞いたのは○○の女許りではあるまい。
　私は何となく涙が下る。
堂の中は眩ゆい迄に大燭燈にてらされて、影がない。私は胸に手をあて、乳香の高い香にむされた空氣の中に、せはしく息づいた。
ふと聖壇をあふいだ時、まばゆい十字架の上に、グラスを透して青い月光がぬれて、限りない崇さに私は打たれた。そして云ふ事の出來ない一種の心の間隙がやすらかに滿されたやうに、再び涙が下つた。
　ふりあふぐ聖壇よ、復活を讃美するむろ聲は幻のやうにとけ合つて、力つよく高い星の聖けき空さしてひろがつてゆく……。聖壇の灯は一樣にゆれた――。

叱られてもかまひません、此才氣だけは大切にはぐゝんで行くが宜いでせう、餘りに女子文壇の散文が主觀にばかり傾かうとする時、此才氣を抑へたくはない、藝術は才がなければ成立ちませんもの(醉茗)



先生のお顔　京都　加藤いと子

相變らず清楚な書振お嬉しい。聖壇のアトモスフィアも可なり崇高に再現されてゐる。この人の近頃の作中では、落ちついた、嫌味のないものだと思ふ(白羊)

佳作

○病める腦と白つゝじ

向島　名なしぐさ

　芍藥畑の東屋にかん〳〵日が當つて仕方がないから、これで日避を拵へてくれと、母樣が布を出されたので、早速裏の竹藪から竹を切つて來て、葉をしごいて、とぢ付けにかゝつた。大きな石で壓付けられるやうに頭が重い、後腦と、こめかみとが、ずし〳〵痛む。つひ此間まで頭痛といふことを知らなかつたが、年來の無理勉强の結果かと、情なく思ふ。やはり私も弱者なのだ。ころ〳〵と、泥にまろばる儚なき生物のよろこびと、雜色の世のどよめきは、林を透して、どん〳〵と波よせ、日光のはなやかな悲しみに溶けあふ。こゝに惱むものがある。こゝに苦しむ者がある……あゝ、

とうなとなれ、あせつたつて、苦しんだつてなるやうにしか、成らないのだもの。

思ひつかれて、池ばたのつゝじにめをやる。

青いこまかな葉……白い清らな花。

私もおまへの冷たい胸にとけ、何ものゝはえもなき生活を送らうか、夢に得しくれなゐの花を捧りて……ふと衿もとをみると、さき、刺して置いたはずの針がない。かた／＼と下駄の音がして、裏木戸から母様が入つていらした。

「出來たかえ」

「……えゝ、もうすぐ」

私は一寸母さまのお顔をみて、わざとゆつくり、新らしい針に絲を通して、とぢはじめた。まさに來らんとするある恐怖に、わな／＼と手がふるへた。

母様よ、あなたは今の私の目の色を何とおよみなすつて？……

親に背く重い罪の子、いかに生活の安全を得られゝばといつて、あんな人格のない人に嫁くのはいや。

ひろき天地に我が縋らんは、たゞかの君のみ。されとあゝされど、君ものらせず、吾もゝのいはず、知らずしられず、あゝかくて、離れゆくさだめか。

木ぎれなど投ぐるがごとくものゝらす
　そのむかしひと吾は戀ひにけり
われみればつと背ひしていゆきます
　君よ吾は戀ふ人ならなくに

冷笑がふるへた、つゝじの白に、みづ／＼しい若葉のいろに。

文藝に生きんとする努力、人妻の名に葬られんとする處女の命、あなたが刄を執つて起つたことも私は知つてゐる、お痛はしく思ふけれど、たゞしづかにおはしませ、今しばらく（Ｘ）

紅い燃える樣な情熱は、なくて、只白い冷たい死んだ樣な色の薄膜が、文の全體を包容してゐる、人生れて世を呪ふもよし、冷笑するもよし、されど呪うて命に到らず、笑中の刀以て他の龍を刺すの力なくんば、寧ろ默するに如かず。先覺句あり曰く「牛窓櫺を過ぐ、尾巴何としてか過ぐることを得ざる」を愼んで君が大發明の資に供す（白羊）

○草とり

紅子

大掃除が近づいて來たので今日は朝のうち庭へ出て草とりをする、こんな庭なんかいつそ草で蓬々にしてしまつた方が、野原のやうでいゝと思ふけれど、母さんはイヤ／＼といふ、蛇が居てもわからないからですつて。蛇なんか何ですかあんなもの、といつたら自分は毛蟲にこわがるくせにと笑はれた。

とてもこゝもまあ……手のつけようがない、どこからはじめやう、花壇の中？こゝは面倒だから後まはしとしてそのわきの花壇と垣との間、幅三尺程の路を、ずつと取つてゆくことにする。

スッ／＼と長い大な株を片つぱしから引ぬいて、根の土をたゝき落しては、傍の穴になげ入れてゆくのが一寸面白くつて、今までは得意になつてやつたものです、が今ぢや、折角はえてるものを、拔きとるなんて慘酷な、同じ植物と生れながら、どこへいつても憎まれ役の雜草に私は同情するわ、なんて思ふ。でも一本ものこさずきれいに征伐して來たと思つてふりむくと思ひきや、九死に一生を免れて運の强いのが四五本も。まアそのまゝにして前の方へ急ぐ。

大な穴がもう山盛になつたが、取つた跡はその割にせまい、まだ／＼大へんだと思つて手をやすめてズッと、そこいらを見渡した。向ふにオランダイチゴが小さな花をたくさんつけてゐる、あれを母さんはムヂャムヂャして邪魔つけだからかりとつて了へつて、遠くからいふけれど、私はどうしてもいやだ、今まではむろんあの赤い實に未練があつたからだけれど、今ではそんな事位ではない。第一あの白いさびしい花が氣にいつた、そして低く地に這つて、木の間を漏れるわづかな太陽の餘光にあまんじて、いつの間にやら靜に花を咲かせてゐる、最後にはあのルビーのような、赤い美しい實を結ぶ、あゝほてらぬ處の可愛いゝ我イチゴ！お前の邪魔をする木は切つてもお前をかりとりはしない、私の大好きなイチゴ！

脊中の日がそろ／＼あつくなつて來たから木陰へ轉任する、こゝは主におばこで占めてゐる、おばこは容易に拔けなくなつてにくらしいのねえとよくいつた、小刀があれば何でもない。

こゝが日向になればまたどこかに移る、さうして今日は終日くさとりでくらしませう。

草とりに理窟をつけてみてつてつまらない、併し文章はらくに書けてある（Ｓ）

あまり樂すぎて、急行車で走つてる樣なのが病だが、一寸面白いところがないでもない（Ｈ）

○初夏の夜

大分　美音子

今朝あがつた雨のまだ所々の水溜りに美しう電燈の光る夜、多賀さんと町を歩いた、――唯譯もなく――白つぽい英ネルやメリンスのけぬき袷の若い女や氣取つた壯者！新婚の夫婦！など會ふ人、見る人皆歡樂に醉ふた樣な顏を、すが／＼しい初夏の微風に吹かれて晴々しう、誰も東の方へ歩んで居る、丁度若い血の流の樣だと思つた。

「イヨー別嬪」「濟してら」と擦違ひざま冷評かされたのに驚いて見たら、脊に幸と染拔いた印半纒に白ちりの三尺てふ若衆が、笑ひ／＼此方を見ながら囁き合つて居る、失敬なと思つたが口に出す勇氣もなく俯向いた、刺擊を受けて振向くだけ未だ妾は若いんだらうか。

「美音子さん五月蠅いから曲りませうよ」

「大變な人出ね—何故でしよう」
「さうね」
又もとの沈默にかへつた、手は固く握合つて………一つ曲ると火の消えた樣に淋しい町に月も無言で語らぬ二人を照してる、「人中行きて涙忘れよ」と或人は云つたが虛僞でも華やかな中に居るのには餘りに弱い、淋しい心を淋しい所で寂しく泣くのが好きだ、と覺えず指に力を入れると多賀さんもキユツと握りかへして見合つた、一秒二秒！あふれ相な涙に目を反して今更の樣に月を眺めた、「好い月だわ、幾日位でせう」「十五日には間がある樣ですから十一二日頃らしいわ」「アノ十一日だと宮地嶽さんの緣日よ、人出の多いのも其せいでせう」「ア丶さうだわね」オホ丶丶オホ丶丶丶と悲しく笑つた。青春十九の人生の春を俯向ながら行く二人の寂しい笑は、此閑とした天地の何處まで縺れ縺れて響くであらうか？

　家が次第に疎になるにつれ郊外に近くのが嬉しい、學校への往きかひによく休んだ松並木に、期せずして二人は歩みを止めた。青葉かをる空氣の中にネル一重の體がシックリはまつて呼吸する度に起る波動が目に見える樣、矢山の姿糢糊として森も家も總べての銳角も薄い幕に覆はれて、女の乳房の樣に柔かく丸つこく見える、空は渺漠として一片の執着の影もなく懊惱もない、唯廣く、ひろい。吁偉大なる自然よ！周圍の抱擁の手を拂ひのけて單り光明の道に行かんとして行き得なかつた二年前の自分！理性の綱に危く引きか丶つて、ひからびた坂路をあえぎ／＼登り行く今の自分！絕えず自然は自己の能力に服從せよと教示する、噫それを望なき身のせめてもの心遣りになし得ない事に努力する、憐れな女!!煩悶して經た十九年の歷史!!顧りみれば一つの光彩もなく異色もない、かうして苦しみながら……　刹那は何等の印象も與へず刻々と去る。田圃を隔てた向ふの部落から夜鳴する鷄の聲が聞こえる、と多賀さんは彈かれた樣に立上つて歩み出した。自分も無言で其後についた。

　町の十字路の電燈が微に／＼見える。

若い女の身空で鷄の鳴く時分までほうつきあるくとは驚いたことである、青春十九か、御年二十五か知らないがこれは早く嫁にやつて貰ふさんだんをすることだね(X)

何ぼ天下御免の惡口でもX君のはあんまりひどい、やみ打でも喰つたらどうするのだ、誌友會の日にたうとう逃られちやつたつて胴上係の幹事が言つてゐたつけ、實際あぶないよ(Z)

○死兒

水口鈴蘭

「まあ／＼何しても母親の助かりましたのが有りがたいので、ヘヱもう子供位又幾らでも出來ますから——」と平氣なもの、母親の無事を只管に悅んでゐる、兒を惜しむ色等見たくてもない。折角人間として生れて、生きる事も得ず其上兒にとつては最上の人である父に

すら何一つ恩愛の言葉をかけられず、冷やかに見下ろされてゐる死兒の顏、たゞ鈎と眺めた、つぶつた眼は絲の如く細い筋を描がいたゞけ口も白く横線を引いた許永久に語らぬ事を表示してゐる、頭毛の、ほやくと生えてゐるそれにも冷たい景がほの見える、蒼白い顏には何等子供らしい、ふくらみがない一種云ひ得ぬ凄味が顏全體を蔽ふてゐる。誰か知らん男が蜜柑箱のやうな物を持つて來た、金鎚と釘を左手に持つて——あはれ暫し現世に顏を見せたと云ふ許で此の儘箱に押し込められ釘打たれ、父母の愛も知らず永遠に葬むり去られるのだ、私はこの可憐の死兒を長く見るに堪へられなく、又兒に冷やかな父なる人の顏を見るのが、いやに成つたから、箱に入れるのを見ないで歸つた。

歸つて、不幸な死兒に、せめて葬られる時だけでも、華やかに有らせ度いと思つて種々美しい色彩の花を選らんで花束を作りかけた。父や母は私がこの花束を持つて行つたら、どんな顏をするだらう？



春の戸外　山口縣　糯畑かの子

花束をこしらへたので月並におちたけれど子供位いくらでも出來ますからつて平氣な亭主のつらが見るようである「いくらでも出來る」おもへば「生」もばか臭いものだ（X）

X氏の批評、メスを以て動脈を刺すもの（S）



かへりみる日

なぎさのみなし子

詮なきのぞみ

女といふに飽きはてたり、
微温湯、嗅ぐごとき
女といふに飽きはてたり、
挑めどもものいはず
趁はれてもそしらぬ貌にうち背く
白晝の梟、梟よ、なれになりたや。

夏のおそれ

すけるとん、跳れば青く
すけるとん、跳ればかなし、
こゝろは蝌斗の棲む水のぬるみをくゞり
伸びたる草はしげりつゝひたひに觸る。
断腸のごとく、血のごときのふの疼さ
そのきのふ、脱がまほしさに
その疼さ、すてまほしさに
あゝすけるとん……跳れども
黄昏はてず、
跳れども、跳れども、蹠の苔は剝がれず。
蝌斗はあまへつゝみのもにうかび
黒き尾をひるがへして消ゆ……。
跳りつかるゝすけるとん、その肋骨よりくだくる溜息は、
羚羊のごとく
草は吹かれてよるべなく漂ひうごき、
さびしげに、ひたひを撫づ……。
凹みたる眼窩と、戀しるものゝ夏のおそれ……。

磧なでしこ

磧なでしこの花咲く
窓の下、泥鉢に投げ植ゑしまゝ培はねば、
梢はいぢけて、葉はしろく
ひからざる紅玉のなげき——
待てども、待てども、かへりこぬひとを待わび
よしさらば、かゝれとて自殺しはたれぞ、
磧なでしこの花咲く。

詩

河井醉茗選

○割烹室（地）

東京　白鳥正江

新しい食器のとり散された割烹室に
和らかな春の光は流れ
小鳥はほのかに唄ふ——
食器の音もとき折り
所々開かれたる硝子窓から洩れ
そそるやうな香ばしき匂ひは
長閑な花園に匂ひ廻る。
胸にかけし白い前掛には
取り合せた甘い香のたゞよひ
大根の皮をさらさらとむく手のしな
やかさ、美しさ。
小鳥の枝から枝にうつる時
淡紅色の花びらはハラ〳〵と散りて
割烹室に彷徨ふ。
瓦斯にかけし鍋よりは、ゆるやかに
湯氣舞ひ上り
潤みわたつた姿見鏡には
行き交ふ顔はほのかに白く
獻立表の黒板は甘い薫りぞしたゝる
おとなしやかに味ふ紅の唇は愛
らしく
嬉びの顔には微なる頬笑は上り
しほれしもの丶顔と顔のさゝやきは
淋し。

觀察の細かいのは先づ好い、そのわりに感情が鋭くない、これだけ細かく觀得る人なら、只觀るといふだけでなく、もつと感受力が強く深くなければならぬ、鬼に角新しい味ひがある（評）

やさしみの色

溫室のガラス屋根に南國の赤き花に
銀の雨が甘へくる春の日の光り
しほらしく編まれてゆく
毛絲の色の憧憬よ
靜かなる歡樂に疲れた花の香と
何かを求めやうとする毛絲の色
聯想のひるがへる香ひの中に
さゝやかな毛絲の色は優し。

此作、感受力は相當に強いが、表現が弱かつたと云ふ風に見える（評）

○眞紅の瞳（人）

港の女

天鵞絨の様な緑の草の上に
蹲る小兎よ——
眞白い小さな顔に
ルビーの瞳をみはる小兎よ
汝は何を見やうと思ふの
汝は何を語らうと思ふの
おまへの耳は靜かにふるへ
白金の様な細い髯はをのゝいて居る

虚空の青い瞳と汝の赤い瞳と
たゞ默して何か暗示して居る
汝の毛は飽くまで柔かで　暖い
汝の瞳は飽くまで冷たい
眞白い顔に眞紅な二つの瞳――
朝の女の心をわけもなくふるはせる

印象的に歌ひ出したところは好いが、殊更めいた主觀には大した感興も覺えない(評)

綠の芽

黄昏となればあやしげの瞳をみはる
五月の苗代の面よ
あるかなきかの光線は氣づかひつゝ
滑かなる面に觸れ
底の柔地に黄なる籾を被れる米粒は
淡き淡き吐息をもらせり
微かなる光と淡き吐息に水はゆるゝ
寸ならぬ芽は綠の柔髪の如打ふるふ
静かにぞ靜かにぞ――
スイ〳〵と音もなく泳ぎ來る
銀の日高のむれ
半圓の大空の夜の色に苗代の面も亦
安らかなる樣こそすれ
あゝ安き夜はきたれり　あゝ安らか
なるときも――
延びる――闇の息吸ひて
何事をも知らざる綠の芽よ――

此作は更に印象的である、然うあらはに思索もなく、説明もないから大いに好い、佳作と云ふに憚からぬ(評)

――――――

○曇り日

つくし

午下り、日もなやましげに曇れり
生温き風のそよろと閉ぢし眼の
まつげをなぶる――佗しさよ
四月の末を病みほけて
胸にくむ手のむなしきまゝ
窓にはよれど――味氣なき――
冷やけき額に萎へたる荒髪に
まとへるショールの白色の黒くにじ
める
うとましさに、何をか賴まん――
あゝしら〴〵と心うむ、倦て疲れて
つひには空にかへらんに何の努力ぞ
セカ〳〵と呼吸のみ急かる、――何
の努力ぞ

情味ある作ではあるが、如何にも淺薄だ(評)

○籠の鳥

和泉やどり木

濕つた空氣を顫はして
かごの鳥が鳴く――
五月なかばの柔かいかはたれどき、
つゝましく咲いて居る麝香連理草の
強い香にも
蝶のやうな花の影にも、葉の裏にも
一人物思ひする自分の髪の毛のあひ
だにも
新らしいもすの袖口にも
勞れた指さきにも
淡い〳〵灰色の夜の影は
しづかにもふりそゝぐとき
痛ましい程黄色いてゐで

詩



梧桐　水戸　玉川すゞ子

籠の鳥が啼く——
青いびろうどのやうな柔かい頰に
目に見えぬ涙を滲ませて
器の中の綠の水も、菜も
ついばまうとはせず、
やるせない戀を悲しむのか
丁度、一人娘が戀しい人を思ひ乍ら
まゝならぬ身のねたましく——
——泣くやうな
心苦しい强い叫びに
灰色の空氣をゆるがして
青い、かごの鳥が啼く——
（五月七日曇つた夕方）

思ひ出

雄の鄕川の岸の柳に
初夏のみどりの風が吹く——
學校からの歸りみち
顫ひつ泳いだ彼の君に
お風召すなといたはつた
をさない昔の戀しうて
…………
今日の此の身の悲しさよ
雄鄕川の柳にも
初夏の綠の風が吹く……
（五月十二日夜）

「思ひ出」は白秋氏を下手に眞似たもの、籠の鳥の方が稍個性を認める（評）

○河口の夕

大和　藤田靜子

振りみだされし夕日の涙は
蘆の枯葉若葉にひらめき
よるべなき流離の女は
灰色の悲しき水を
やるせなく打ち見やる
夜の翼はおもむろにのばされ
紫の島は闇に埋められ
騷がしかりし町は
一日の休息に
淋しき沈默にかへる
黑い涙は
垢染みた石垣に
しぶきを殘し
ドド〳〵と過ぎ行く
「呪」の歌と
花街より流れ來る
耽溺の肉聲を聞き
悲しき追憶に耽る
さすらひの子の愁はしき眼よ
霧の中にまたゝける漁火の
朧ろなる光の弱き息づかひ
魔に襲はれたやうに打ち顫ひ
儚なき運命にすゝりなく火の心
水にしたしむ——

女の作とも思へない（評）

○私の歌

群馬　羽路朶榮

なまあたゝかき
春の夕のやるせなさ
暮れる空
餘光も照さず
いらだゝしく暮れゆくみだらなる空氣
二上りの三味は濁り
門をさまよふてゆくふけ猫の

黄色なる目玉の
怪きおびえ
悲しき夜は來りぬ

森の花

暗い森の濕り地をゆく
しみ入る風と
木の皮膚のたゞれたると
不安と
暗い森の濕り地をゆく

○世の叫び

土佐　はざくら

夢の如き階段をのぼりゆく影の
群あり、
群の中より
わびしげのわが影見出づ、
とぼ／＼と行くぞさびしき。
かへり來よ、群をはなれて、
ゆきすぎよ、群をぬけ出て、
あゝ階段の細長ければ――。
疲れたる足は根をおろす如くに、
そは階段の細長く、暗き色充ちをれば――。
いとも鈍く群のいきれはうめきけり。
ああ、われには暗き色あり、
人生には目に見えざる叫びは そこよりきこゆ―
あゝ――なやみ
群より離れんとする時――。

○かざしの花

枯尾花

ふとふりかへり、ふりかへり、
去る春を思ふ女よ
柔かき春の日は暮れ
蒼白きカーテンに吸はれたる、歡びの色も、
去ぬる日に沈みゆく、はてしなき動搖。
はら／＼とくだけ散る―― あざやけき色よ香よ
女よ――
去ぬる日の花はくだけて凋落のかげのさびしさ
かざしては眼路にあこがれし、さゝげては――
君がことほぎ胸もみつれ、
ふくよかに　口にあつれば、



息へる人　新潟縣　たけ子

あなあはれ　花はくだけたり、
「夢に逢にし春の夜の、
記憶は永久にこひしかり、
かすみひとへにへだてられし、
記憶は永久にかなしかり」
ふたゝび　昔をかへりみて、
女よ――やつれし顔をそむけぬ。

夕の色

しばし
雨やみしかはたれ時
うす闇とかすかにあかるい私の心と
うす青い憂げなる芝生の上に、
儚かなときを相見た時、
去りにし人を思ふが如きかなしみと、かへらぬ人をまつが如きさびしさと、しみ／＼と胸にしみ入る。
病葉のいたましき戰ぎ、
道をへだてゝ　雜木林のうすぐらき巣に、
もどる小鳥の　さびしさの如、
かすかに、ふるへる私のこゝろ。
黒き獸の死骸に
朱をそゝぎかけたやうな　土の色、
うるほひある土の香は、
なつかしい追憶の如　胸にふるれど、
痛ましい世の追憶は、
かげと共に消えもゆくか、
おぞましき夕の色よ。



詩の言葉（六）

海

解纜す、大船あまた――
て、肥前長崎港のただなかは
長雨ぞらの幽闇に海づら鈍み
悶々と檣けぶるたゝずまひ
鎖のむせび、帆のうなり、傳馬のさ
けび
あるはまた阿蘭船なる黒奴が
氣も狂ほしき諸聲に、硝子切る音
うち濕り――あゝ午後七時――ひと
しきり
落居ぬ騒擾さ（白秋）

『解纜』といふ詩の一節である、是は象徴詩でも何でもない、『解纜』の印象を歌つたものであるが、出船入船、騒擾と、恐怖と、動揺と、不安との漂ひみなぎる大きな港の自然が、展開せられてゐる。對象されたものと、その心持との明確な詩で、少しも難解な處はない、表現された通りに海も港も表はれてゐる、自然を忠實に觀照した詩句の一例として擧げて置く。

われは深みの底を出でゝ
またもうれひの深き知らぬ（泡鳴）

此句だけでは別に感受する處もないやうであるが、此句の由て來るところには深い意味がある。此詩は『磯姫の曲』の終りの一句で、磯姫の獨白である、彼女は海の底より生れて來て、獨り渚に咲いてゐるのである、彼は無限の空より來り、無限の空へつゞく、彼女は何處に歸るべきか、何處に行くべきかを知らぬ、汀は永遠につゞいてゐるが、わが足跡は一筋の憂愁と苦痛とを砂上に印して行くばかり、海の底に住む貝は暗きに生れて暗きを知らぬ彼女は海の底より生れて來たが、明るき渚に立ちても猶は海の底より深い憂ひがある。つまり人世の憂愁の無限なることを語つてゐる

八紘九野の水盡し空に溢るゝ天の河
流れの限り注げども無增無滅と唐土
の至人が寓言今こゝに見る目はるけ
き大海原（逍遥）

『新曲浦島』の序幕前曲の中の句で、曲は長唄がゝりとあるもの、此前曲は全體に莊重典麗で立派な歌詞を完成してゐる、句の意味よりも、技巧の老手なることに於て、所謂長唄がかりものとして問題がない、歌ふもの、即ち曲としての用意が深い。

海より吹きあぐる
降りそゝぐ空より
すすりなくやうな雨
（ああ、ああ、もう待ち勞れたらしい）
海は暮れ
涙ぐんだ空に雨の音がする
「船は見えず」（東明）

埠頭に人待つ時の心持を歌つた詩の一節である、海上一面、細雨に籠められたわびしさと、人待つ心のやるせなさと、そのまゝに海は暮れて行かうとする、其淋しい悲しい印象が率直に表現されてある。

海のあなたの遙けき國へ
いつも夢路の波枕
波の枕のなくなくぞ
こがれ憧れわたるかな
海のあなたの遙けき國へ（オオバネル）

これで一篇の詩である、意味も何とでも取れる、單にあこがれと云ふものを歌つたものとしても興味が盡きない、情緒をたぐつて行けば行くほど、それこそ果なき海のやうに、感情がゆらめいて行く。譯者は上田敏氏。

鋭い日光が
海上にふりそゝぐ、白い悲み
緑色は刺されて
顫音に歌ひはじめ
無數の光が浪につれて歎く
ああ無殘な、白色の斷片（露風）

「日に照されたる海」の詩で、印象の鮮明なことゝ、官能の鋭敏なことゝを以て、近代詩人の怜悧な働きを充分に表現してゐる。夏の日の烈しい太陽の光線が海上に降り注ぐやうに照らしつけるのは、悲痛だ、其白い悲痛に、緑色の波浪が刺戟されて、ふるひながら歌つてゐるやうに、歎いてゐるやうに、無數の浪が、果しなく光つてゐる。白色の斷片と云ふのも日に照された波の一うねり〳〵を指すのだ、言葉の据ゑ方もしつかりしてゐるし、殊更にすつきりした強い言葉を用ゐてあるから印象が鮮明になる。

風は和ぎ
浪は伏す深海
天津日は
輝きぬ、まとかに

いづこをか
もとめゆく、この時
船の帆よ
徐に、彼方へ（有明）

海上に白帆の浮ぶのを見れば、何處へ行くのであらうとは、先づ最初に想ふところであらう、白帆船の徐ろに動いてゆく情緒ほどおもしろいものはない、何と云ふ意味もなしにおもしろい。只、それだけを斯う率直の詩で表はしてあるのは心持が宜い、此詩は律も正しい。

天の工匠が造りたる
岩楠船や浮べけむ
其代のまゝに波打ちて
神馬藻寄する大和田の
千歳を經りし故郷に
我や在りしとばかりにて
さまよひ歸る汀かな（醉茗）

『行く春の海邊に立ちて』と云ふ詩の一節である、此の海には神代の昔、天の神の工匠が造つたといふ岩楠船も浮んでゐたであらう、其神代から今に同じ波が打つてゐる、其古いふるさとに、私も居たことがあるやうに思つて、海邊を逍遙してゐると云ふのである。海邊を逍遙してゐるのは現在だが、其海邊を指してふるさとゝ云ふ意味は、必ずしも自分が生れた故郷と云ふ意味ではない、自分の生れないさき、假に生れない前の自分の意識が殘つてゐるとして、此の海邊は其遠い以前にも見たことがあるらしく想ふので、それで千歳を經りしと云つてある、現在の自分のふるさとゝすると此詩全篇の意味が分らなくなるので、此一句も亦其れに伴つて遠き昔に心が返された意味が含まれてある。

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ
故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月（藤村）

南洋の孤島に生へてゐる椰子の木の實が、海邊に落ちて、波の上を漂ひ漂ふて流れて來たと云ふので、海上に漂ふ木の實をいふので、非常に感興が深い。

沖の遠鳴、潮の香――
あゝ醉ごゝち
いづくは知らず、靈魂の
故郷こひし

沖遠く鳴る海の音、潮の響を聞いてゐると、何となく夢見るやうな醉心地になつて、自分の靈魂の歸つて行く場所は何處であらうかと云ふやうな冥想的な心持になつて來る。



蟬時雨

蘇生法師

△夢の女と雲井の雁がふたりして本郷へたづねて來た晩である、何でも女の事となると賑くばかりとつて罪もとがも無い人に冷笑をあびせるのがひどいとかあんまりだとか散々泣いた。切角の顏がだいなしになるがなあとすこしは心配したら帶上の中に鏡もお白粉も用意してございますとは知らなかつた。冗談ぢやない。

△私の頭はこはれてゐる、極端から極端に走つて物を燒くあたゝかき心も無ければ、弱きを扶けてしひて世に立つ力も無い、住むべき世界ははじめから無いのに生きて來ただけ馬鹿だつたのだ。私はだから私の頭で判斷するので、それが間違だらうが偏つてゐようが思つたまゝを言ふほか知らない。誌友會をなぜ中途で去つたかと、河井君も度々きかれた、切角雨を衝いて常陸から行つて斷りなしに退席したのはわがまゝだつたかも知れぬ……。

△そんな事はどうでもいゝ、私は白眼に人を見てゐさへすりや濟む、薄倖詩人アレキサンドルポープには「?」のあだ名があつた、友達に中間をはづされて小學校にすら居れず、詩を作つて人を罵りつゝ詬りつゝ一生を偽善者との戰ひに費した、或貴婦人の如きは金袋を棒げてポープの哀れを乞うたとさへ傳へられる。同じ病氣(英吉利病)に罹つたのみかたうとうポープの靴を歩いて私も金箔つき——『天下一品』の惡る口をいふ男となつてしまつた。大分皆が怒つてゐる、と聞いた、會を逃げたのはあながち膝上を恐れたのではない。佐藤ます子君は「八年ぶりで三味線を持つたんですもの拙かつたのは當り前でございますどんなにか夜雨先生の惡口がひどいでせう」つて青山でおつしやつたさうだが、さう「惡黨」にされてはたまらない。

△「只今六月號を見て金田よし子様の文に驚きました、本の五六度手紙をやりましたゞけで篠田ともとみ子とも書いたことすらありません、私がお怨みがあるとでもいふのなら鬼に角先生には一度だつて惡口を頂いたこともないのですから二人を可愛がるのきらふのといふ必要はありません、又いくら私の目が大きいからとて大阪から常陸の先生が岐阜の人に對してなさる事は見えませぬからそんな事をいふ筈がないぢやありませんか、ひつきよう金田樣が先生に投書にされるので腹いせをする爲に私の名をつかつたとしか思へませぬ、どうぞ其おつもりで」と目の大きい改野たけ子君よりいひ越されたり、可愛相に瀧夜叉姫はこの君の目玉をくりぬかねばあかんと泣いておこつてゐるのだ。

△沼倉馥子君曰く『女たの酒たの旅たのと云ふ男樣は屹度狂つた頭の人だと思ひます、一體こんなことは常識ある人には言へぬ、第一其畜生だの快樂物だのとのたまふ方からして女の腹から生れたんぢやなくて?男にだつて惡いものはある、プラスマイナスですもの、自分に惡いことをした女を憎むなら其一人だけ貶したまへ古今東西人情は同じだ、私は男女合せて十の權利を持つてるなら男子は五分五厘女子は四分五厘と思うてゐる、かくまで男子を尊敬してるのに何の彼んのと罰が當るぢやございませんか』古事記にも日本紀にも大山祇の神がバチをあてるといふことはなかつたと思ふけれど……。

△美人には而會謝絕の立てふだがあるつて、うそでせう、わたくしこの夏筑波へ登ります、からだはこんなにしなくくしてますけれど風に吹き飛ばされるほどではないわ、筑波からお宅へ上つてもよろしいでせうと動坂の君曰ふ、お一人でですかとはぐらかすと、美しう頰を染めて『いいえわたくし一人で歩いたことはございません。』それでは事だ。

△東京で生れて東京で育つた人は流石に米の生る木は知つてるだらうけれど、うどん粉そば粉は何から出來るか知るまい、芋蟲と蠶の區別もつくまい、おなじ動坂の君と若杉はま子に譏られて澁谷から電車に乘つた時だつた、キカンボウの浜ちやんといへば古河の小學校で鳴つたもので、元來鬼が住む茨城の國びとである、草刈に出ては脊大將の首位ち切つたこともあらうに、新宿の外れに咲いた卯つ木の花がわからなかつた。郊外電車は一面武藏野を望みつゝ走るので、椎がある櫟がある、青梅があり木瓜がある、ノートの端へ「オタナン木瓜がタベタイデセウ、酸ッパイ」

と書いてつけえさんの絵へやると「えゝキウリはわたくし大好きでございます」木瓜と胡瓜をおなじ物にするのはちとおどろくけれど、初めてお目にかゝつたとすれば玉杓子は蛙と思へぬのも尤か。

△酔茗曰く、君『背教者』は僕だつて讀まないし、濱口もまだ卒業しやしない、山田をはじめ『讀まない者揃へなんだよ』と、坐に隼あり、若杉はます子がバザロフが好きなように隼はジリアンが好きなのだ、二人だけは『背教者』をよんだのである。何にも讀めない何にも出來ないゝ山田邦子は曰ふ、可憐なる勞働者よ、思索も讀書もとほきむかしのことであつたらう。

△「女子文壇に現れる思想は正經のよりはより多く奇矯の分子に富む、穏健なる人生よりは寧危激なる世界を紹介す」と評して卑に訓へた人がある、もと三輪田女學校に教鞭を執つた人で今は朝鮮にゐる、私は眞面目なその人の風丰を想像すると共に、臆病なそして寂しい心の俤をいたましく思はぬ時がない。

△「ある博士夫人となるべき男爵令嬢に乘遁して戀ならず空しく厭葬の水泡と消えし哲學者の卵」私は勝氣なのだとあるから實際さう思つたのかも知れねど、自殺は一大事實である、亭主ハ傾つてる中から入夫の人選をする女でもあつたら知らぬ事、どういふ頭で書いたのだらう。

△泣くといふことも笑ふといふことも哲人の見地からすればたしかに感かなしわざに違ひない、が戀するわか者を「乘遁する」はむざんならずや、かく言へる君もやがて結婚はするであらう、その時唇頭に上るはほゑみや意識する勇氣があるだらうか。

△從兄の友だちだといふ男ゝ從兄の家で一時間ばかり小說の話をしたら手紙をくれた、花の香に醉うたとある、何も彼も忘れたとある、海棠の花の散らぬ中にまた一日訪らうぢやありませんかと言つて來た、「氣をよくしておりや活動に行きませうなんていふかも知れない」と書いてあるのは至極さん成する、どういふ口實があつてもどういふ事情があつても男で女に手紙をやるような奴は六でなしに極つてゐる。二三度返事すれば早速「兄妹」に「散歩」にと來るだらう。私は多くの事實を知つてゐる、山田太田長谷我部菊池若杉篠田平塚細谷遠藤諸君の苦しめられたのは、昔となつた。おだてもつこに乘るのが馬鹿なんだ、中には好んで乘る女もあるのだから、しかたがないけれど。

△三宅霧子、その友の佐藤綠葉を棄てて泣いて他に嫁ぐことを書いて、「冷たい人となつて再燃えることなき冷たい胸を抱いて友の姿はやつぱり寂しい、あゝ、囚はれたる友よ」とある。賢婦また一人を加ふ、よろこばしからずや、いかに誌友諸君。

△「痛ましき姿」「一言いふにもあらゆる表情と媚態を作り同情を買はうとする美しの友の顏！後へとをのゝき退いた」のは新田久子君。處女が人の妻を冷笑するとおなじに娼婦を見るならわかつてゐるけれど、百人が百人うは面だけ考へて滿足してるのではないか知らん。

△自分では六かしい文章を書きながら人の事をいふようなれど「と見る齊暗に悄然と立つ一の奥津城、たがおくつきと言はんも悲し」悄んぼりと突立つてゐられては「悲し」ぢやなくて「こはし」だらう。「さやかなる堅しけんそは紫の中狹み絹をか細き手もてひき裂きしそれかとも、……再擧しけん、白金の絃を狂はしの指もて斷しそれかとも」あゝ此島とあるから郭公にちがひない。さるにでも、朝日に出てる寶井琴窓の講談「大石が愈東下りといふ決心をしたので、」から言文一致が忽七五調と早がはりして太平記の作者そこ退け近松タソでも喰らへといふ勢で「ね物語の美濃近江、十曲峠を走りしは馬篭(まごめ)の足に任せつゝ、妻籠(つまご)の爲にならねども、あとに名前をあげまつや、こゝは都と大江戸の丁度里程も半なり、」は名文だつた。

△いよ〳〵嫁入となつてお化粧をしはじめたら雨がふつて來た、ふしぎふしぎ、御飯にお茶をかけてたべると嫁入の日きつと雨か風かにあふといはれたつけが、なんてふしぎなんでせうと梨花子いふ、私などは來てくれ手があれば式は八月の土用にして霧を降らせる積りで赤飯と味噌汁をかけてたべたけれど、今以て験が無い。

△「空が落ちさう」「淋しにふさはしく」「白い綱のような架で蛙が泣いてゐる」「血に泣く杜鵑」「眞砂を洗ふ水沫」越後中田きよしの文に見ゆ、珍句圖々如泥。



和歌

與謝野晶子選

○(天)　宮城縣　長谷川紫葉

五月雨はひまなく降りぬ水出でゝ病めるわが身を泛けて去ねかし

○(地)　千葉縣　高間歌子

忘るべき人の上をもまた泣きぬ筑紫のはてに行くと聞く時

○(人)　宮城縣　齋藤靜子

黒髪を君が梳くとき傍らの竹より起る風の涼しさ

佳作

○　岐阜縣　加藤峰子

春の夜に何處ともなく聞えくる笛の音にも似たる君かな

○　牛込　平塚白百合

湯上りのやゝ疲れたる身にふれて心にふれてやはき藤花

○　郡山　金塚美代子

身はあはれさびしく君に疎まれぬ心くるひて川床に臥す

○　宮城縣　齋藤なよ子

早苗田の青きが中に火ともせば焦れて死ぬる蟲あまた來ぬ

○　山梨縣　鷹谷とみ

燃え細る白き蠟をば見まもりぬ君を思ひて死をば思ひて

○　備後　松下卷子

軒端よりかはほりとびぬ井のもとの卯つ木の花のしろき夕ぐれ

○　長崎市　岡田はま子

五月雨は銀の絲をば引く如したちばなかをる朝のわたどの

○　上毛　梨畑花城子

あはれなるゐざり車のうしろよりわらべの群の行く夕かな

○　千葉縣　松崎きよ子

ほとほとに物を思へばたのしかり近き戀びとうとき戀びと

華やかに笑みて語りぬあこがれと夢とを愛づる若きわが友

○ 岡山市 立岡房之

夜あそぶ少女のむれの如きかな月夜に匂ふ白百合の花

○ 備中 雨の花

かずくの悲しきことにふれざれば成り難してふ詩に似たる戀

○ 鳥取縣 藤田せつ

少女子が清らに白きやははだは若き命の誇なるかな

○ 麻布 ひざくら

夕空をつと横ぎりぬむら鳥は幼き時に書ける繪の如

○ 長野縣 みむら

この方の物を思へる日も戀しのどかなる世を守る淋しさ

○ 沼津 村瀬富士子

風病みて熱にかわける唇を露おく花にひたしぬるかな

○ 徳島縣 蔦紅

我が心われを離れてわれを見るさびしき日ともなりにけるかな

○ 神戸市 花愁孤

○ 神戸市 森清子

けちがくも野ばらの白く咲く家に己が指をばひとり吸ふ人

○ 波島 平田宮子

うつろなる處女の胸を如何に見てなつかしとさへ呼びたまふらん

○ 伯耆 新田文子

みだれたるわが髪うつる池水にさざ波立ちぬ花のちる時

○ 北海道 藪なかば子

涙さへ血さへ涸れよとつれづれに書きたる日記の狂ほしきかな

○ 甲府 塚原紋子

爐に燃えて黄なる小草のかをる夜は野に遊びつる日の戀しけん

○ 波島 岸浦文江子

翼なき小鳥に似たる少女子は青空のごと君戀ひて泣く

○ 波島 宗原美洋子

うす赤くしをれて匂ふばらの花悲しき我のたぐひなるらん

○ 豊後 吉良靜子

花の木に巣くふ小鳥におとらじとはなやぐ君が袖にか

くれぬ

○ 麹町 きみ子

たちばなや薄き衣きて人まちし家が戀しき水無月の風

○ 茨城 浮舟女

涙して我に給へといふ人にゆるすやうなき荒みし心

○ 土佐 はざくら

ひとり来てひとり去ぬべきわれなれば人をも戀ひじさびしけれども

○ 山梨縣 林 ふじ子

清水湧く山邊の里の少女等はしら玉のごと美くしきかな

○ 福井 明星

しめりたる夜かぜのなかにうなだれて物をば思ふ森かげの道

○ 信濃 水嶋美枝

われ病みて鏡をにくむ衰へてにごれる顔をうつすそれゆゑ

○ 靜岡縣 田中百合枝子

藤の花風に亂へてほろほろと散る悲しさよ長き日の庭

○ 信濃 霞の女

阿古屋珠しろき光によそへ見ぬ君がたまへるなつかしき文

○ 港の女

何なれば逢ひたる後の寂しさを思ひて我の此處に來にけん

○ 大阪府 辻井信子

ほのぐらき灯かげに一人かずかずの世のうきことを思ひつゞけぬ

○ 北見 白つばき

うら若き夢やこもるとすみれ咲く根かたの土を踏みて思ひぬ

○ 群馬縣 羽路朶菜子

木犀の甘き匂ひのたゞよひぬ新戀人の心のごとく

○ 廣島 後藤壽美枝

清らなる美き水仙を繪がきたるわが襟にちる春の雲かな

○ 金澤 山[illegible]子

そゞろにも青葉となりし枝々をわがあふぐ時ほとゝぎすなく

○ 淡路 國分光枝

くる秋のみのり樂しみ里人は早苗ぞ植うるわれは何植う

○ 神戸市 岡田登美子

別てふ悲しきことを知り得たる若き心をいたむ自ら

○ 會津 桑原仙子

春の野路あさぎにけぶるたそがれをうたへる少女よろこぶ少女

○ 常陸 今泉磯千鳥

なつかしき春とどめまし金字してやらじと書ける札をかゝげて

○ 玉英

世を捨てゝあるあはれなる身なれども忘れかねては花をつむかな

○ 京都 今堀なつ子

なつかしく鳥ぞさへづる枕上夢の中なる歌をこそ慕へ

○ 失名

安らかに眠る小蝶をさまさじと紅緒の草履そと草をふむ

○ 陸前 小岩やなぎ

山川の岩を斜にすがりたるつたのかづらに夏の風吹く

○ 宮城縣 沼倉多子

あゝ淋しわが二十二の春も逝く花吹雪見て涙のながる

○ 淡島 華子

しろがねの器に秘めし小さき花ぬすみ見されぬありのすさびに

○ 堺 しら露

さつき散るうちしほれつゝすつきちる夕月夜こそ泣かまほしけれ

○ 麹町 牧野銀杏子

君ゆゑに悲しきときはひそかにも家をはなれてさめざめと泣く

○ 福岡 建部良久子

何故かこよひは人のまたれけるにくきさうびの匂ひなるかな

○ 茨城 古島花子

我愛づる紫の衣色あせてかゝるやうなる藤のちりがた

○ 大阪 みどり子

墓の上藪やとばん君ゆゑに最期にあてわれうつむけば

○　加賀　かつら子
波の花散りてま白き砂濱に紅貝のひと居給ふ人よ
○　常陸　田村かね子
なでしこの花に息など吹きかけて心なごむを君にまたせぬ
○　神田　三好白百合
燃ゆるなるせつなき胸をいだきつゝ涙にすぎぬこの三月ほど
○　越後　岩本芳子
衣更へかた上げとれと母君ののたまふがうし戀も知らぬに
○　相模　中村貞子
夏山の温泉に見けるたをや女の顔をおもはぬ白かきつばた
○　本郷　見ぬ世の人
やごとなきみ佛います西の宮愛の光りか夕映のして
○　神戸市　足立春子
若き身のものに愁ひて歎くてふ姉のむすめの文清らさ
○　和泉　やどり木
過ぎし日の楽しき夢を包むやとしぼめる花をあはれがりけり
○　長崎市　永井圭子
のちの日は思はゞ昔はゞなるまゝにはたやまかせむ髪をめでつゝ
○　東京　白鳥正江
散りかゝる花びらごとに悲しみの少女にそはむこゝちこそすれ
○　紀伊　中田靜惠
少女子の花おもふ夢若人の人おもふ夢浮く如き海
○　近江　植村春子
水行く花盛りなる岸の上小さき家を置きてあらまし
○　靜岡　秋月荻江
金銀の盃に似る春の蝶翅かるげに今日舞ひ出でぬ
○　三河　細谷とも江
櫻ちる里の夕べの靜けさにはしなく思ふそのかみのこと
○　新潟　菅幸子
打ち寄する小波の音長閑なる霞こめたる海を船くる
○　茨城　田村波津子

白百合の朝の小窓に髪結ふ姉の清らさ夏の清らさ
○　福島　春子
まろらかに日光の影葉をもりて光れる石の道に照る時
○　藤桃
かりそめのわかれのなげき秘めまほしわが娘の前に蔽しづれこよ
○　近江　鈴蘭
女の神の袖のたぐひに木蓮の緑の中に咲き残る[illegible]
○　越後　枯尾花
妹と菜の花畑みつゝゆく夕べの[illegible]そのなつかしきかな
○　信濃　二葉子
いつしかと勿忘草の紫は色あせにけりせんすべもなし
○　靜岡縣　千歳野
ちはやふる神の御山に春の来て祈りしをればわれに花ちる
○　東京市　黒田紫[illegible]
よわきものそは女なりかくとしも呪はれしわれ祝がれにしわれ
○　淡路　岡田照子
熱き砂ふめどはかなし青き海見れば泣かれぬ二十の女
○　淡路　武田琴子
輕業師ただ一筋の細き絲にたよらんとしてあやまちしかな
○　朝鮮　酒匂美子
夏の夜のしらむ御空にそびえ立つ山のやうなるわれの戀人
○　神田　石田美子
水無月の空美しきむさし野にありて讃めぬわがくろ髪を
○　根室　齋藤ふじ
初夏の野に寝ねながら金の髪のそよぐ少女を思ひこそすれ
○　大阪　田野しか子
熱田なる宮にいつける草なぎのつるぎをもて一断たば断つべく
○　渡島　平田家子
この惡鬼の来たりて我胸に千本の針植うるならねど
○　島根縣　山代なつ子
何ごとか悲しむごとし灰色の雲低くゐて動かぬ二日

○　出雲　長崎君子
君思ひ病を思ひ死を思ひ涙のつたふ夜のわが胸よ

○　島根縣　糸子
高きことあへて望まずおのづから來る運命にありて歌はむ

○　岡山　花の夢
わがまへに老いし母みずかたはらい姉を思はずあらましものを

○　東京府　竹村千枝子
月見つつ歌書く宵の遠方に少女の如くにほふたちばな

○　常陸　木村菜花子
我まつと誓ひし神を思ひつゝ怖ぢ心なく暗闇を行く

○　伊豫　渡邊文子
春の宵歌などかけばことさらに都戀しき心地こそすれ

○　仙臺　橋本しく子
よき箏の音する家の夕月夜紫の藤さとかをるかな

○　堺市　鈴木喜代
清らなる君によく似し一重ばら咲きそめにけり卯月の夏に

○　常陸　かつらの華
病む人の云ふことなりと胸なでゝおん初戀をきくが悲しさ

○　紅子
わが裾のぬるゝわびしき霜の道篝火のかをりふと通ひ來ぬ

○　伊豫　高橋政子
箏の音の洩るゝ家あり夏山の若葉の奥の夕月のもと

○　沼津　村瀬春子
わが前の石に鏡をなげうちてほゝゑむ身ともなりにけるかな

○　淡路　柏木よしみ
君戀ふや我思へるやいとつよき心に追はれあゆめる二人

○　岡山縣　金井鏡
夕まぐれ風にたゞへる笛の音はもの忘れせぬ人のすさびか

○　信濃　べに百合
そのかみの木陰をくれどうらさびし戀ざめ人のあはれなる胸

○　北海道　町尾綠子
旅するは運命の手をのがれ得ぬかよあの人を忘れむがため

○　名古屋　福本逸子
なほ奥に家のあるらん薬賣る越の商人山こえて行く

○　伊勢　駒越くに子
少女われ悲しきことをもやゝよしと喜びてきくこのごろの胸

○　大阪　あい子
山住の世を捨て人の花筒にひらくましろの花菖蒲かな

○　牛込　平塚つげ枝子
花さけど歌もうたはぬ淋しさや雲のゆくへに涙そゝるゝ

○　淡路　加藤菊子
春の夜は寛く更けたりいさゝかの戀の愁ひにいねがたくして

○　札幌　矢名
都人花見歸りにさゞめくをきゝてといます戀ならねども

○　渡島　田山清子
若き子の初戀をするそれに似る雜木の中の山つゝじかな

○　名古屋　登貫靜子
春雨のはれし小路は傘などを廻しつゝゆく子によろしけれ

○　土佐　桂花
花たまふ君がみ手より傳へくる血潮の音のなつかしきかな

○　越後　田巻てい子
紫に赤き模様のひなびたる袂して三味の師をとひしこと

○　土佐　石川日出志子
音もなく雨降る朝のわが軒の桐の葉うらに蟲の子のはふ

○　久留米　緻花
すみれ草君を偲びて摘みにけり小雨そぼ降る庭の木かげに

○　岐阜　中島幸枝
わが知らぬ少女と君と歩みゆく夢を見しより物思ふかな

○　神戸市　川口登茂
衰へて弱き心に悲しくも死はせまり來ぬ道づれのごと

○　日本橋　松岡千代子
亡き父に逢ひつる夜半の夢さめて涙する身に啼くほとゝぎす

○　下總　谷口美野子

やゝ古りし茅葺屋根に花ちりてなつかしきかなヴオリンの音

○　和歌山縣　都田操

たらちねのみなさけのごとやはらかきそよ風吹きて若葉かをりぬ

○　京都　名無し草

行く春の釣花いけの藤の花亡き子の夢にこぼれかゝりぬ

○　横濱　松枝

美しき君が御胸によそへつつ我の好める白ばらの花

○　沼津　村瀬常月

春の野を淋しく歩む吾なれば摘みては捨つる花のいろ〳〵

○　沼津　曉村

淋しさのいや増るかな一人ゐて花ちりがたに物を歌へば

○　紫づき

我がせこが背にしらぶる琵琶の音を聞きつゝ兒等と添寢する哉

○　大阪　田野靜子

夜業より歸る工女のおどろ髮はれしまぶたもいたましきかな

○　上毛　小澤碩子

都びと伊香保の山に湯浴むとて桑立つ野をば車より行く

○　神戸市　金田小信

三味の音に月かげまじる夕ぐれの花はおぼろに夢の如ちる

○　德島縣　後藤あや子

弟の刈りたばねたる草中になでしこ匂ふ朝の川かな

○　神戸市　島谷允子

夏近き海邊の町のどよめきてしろき土藏に光る日の色

○　長崎縣　深見つゆ子

高らかに歌をうたへる坑夫等のはだかの赤き夏木立かな

○　大分縣　小屋露子

なつかしきふる里見ゆれ森かげに朝げの煙青くたゞよふ

○　安藝國　己斐翠子

土くれを手もて分けたる様なして豆のかよわき芽を出す雨

○　熊本市　松岡友子

夕がほの花の上なる白つゆに涼しくうつる軒のともし火

○　小石川　山田清子

心より君に倚るてふ我を見てにはかに覺ゆあはき淋しみ

○　有馬　濱田利子

ある人の手の美しき花見れば劣るをうとむさもしき心

○　有馬　濱田留子

やまめなど汲みてあるなり我故に日毎夜ごとに海をのみ戀ふ

○　苣苺

絲の如そぼふる雨の小窓にて京のたよりを繰たてて讀む

○　神戸市　綠髮子

世にわれの闇を抱き山に入る車に啼きぬ鷺はとゝぎす

○　美作　水田邦子

わが胸はさつきやみにも似たるなり物うきごとに雲の濃くなる

○　熊本市　河野千茂

美くしき小傘をかざす少女子の集へる中をうつむきて行く

○　赤坂　金山秀子

頬にふるゝ藤のはなぶさなつかしき戀のやうなる句をたてぬ

○　横濱　はつ子

繪卷物君と見る夜の雨なれば秋の暮さへ忘るゝものか

○　中澁谷　龜井芳枝

ゆき暮れつ山路をたどる旅人の心に似たる細き月かな

○　備前　みどり子

なき人のかたみの歌を手にとれば世もあぢきなく思ほゆるかな

○　豐後　赤き花

庭のうち三坪が程も清く掃き白さうびめづ夏の夜の月

○　岡山市　石井幸子

ふるさとに淋しくいます姉君を朝な朝なに思はすさうび

○　岐阜　蔦の葉

森をぬけ小くたてる尼寺の春の灯を見るなつかしき時

○　京都　三宅壽賀子

倦み易き君が性ゆゑわがこゝろやすからずしてうしあぢきなし

散文（其二）

編輯局選

○ふしぎの運命

福岡　つくし

君や來し我や行きけん。

久方振りの竹の都に八雲の絃も替へて臥いたが今從姉樣は如何な夢見て被在つて。目前顔を見た、聲をきいたらと思つたらつひハラ〳〵と落涙した、今更にと强ひて大きく目を張り公園の方を見た。空色の洋傘と白い帽子とがお宮の石段を下りて來る下りて了ふとくるり左へ曲つて二ノ坂を海の方へと去つた、私の視線はすぐ上の紀念碑の邊にじつと止つてハタリと膝へ落ちた、もう何故か外が見られない、障子をしめて其白い紙をまじ〳〵覗入る。軈て又しても何かをゑがけと云ふのだらう。旅人が旅空で泊り〳〵に見る夢が逢て別れて逢つて別れて多くの人の多くの夢が逢つて別れて逢つて別れて、戀も恨もをりはしない浮世とはかうしたものさ。貴女が知つたるじやないけれど、添へてある、知つて居るからこそ言うてくれるのだ嬉しかつた。つまり人形にされたのだと思へば云ふ事はない、戀を失くしてうつろな胸に常に何物かを充たさうとして居る不幸な人と未だ世知らぬ少女〻が二年の間同じ家に如何に育つたか、普通にと云ふより外は仕方がない、然してこんな破目になつたのだ泣きもせぬ恨もせぬが、只此夢が白日の下で明く見らるゝものだつたらとつく〴〵思ふ。人の物壞すのは罪だと言つて去つたのも所詮私の爲を思うての事だけれどもう駄目、壞されなくとも自らこはれた此心世の美しい少女とは違ふもの。人形は人形で飽迄も旅から旅に漂浪ふ人の淋しい夢を守つて生くると心に固く誓うては居るが呼吸してるもの何時か〳〵あゝ全くの人形だつたと云はるゝ日が來はせぬかと夫れが一途に恐しくて、あゝ。見るともなく見て來た夢でさへ中々辛らかつた、況して見る今後の夢は如何に苦からう。想へば儚い此夢の浮橋、どうしてあの北と南の果から果に架つたものか現に橋の架主夢の主は立派な顔して今日來ると云ふに浮世とはかうした者さと、わかつた人にはわかつて居やうがわからぬ私は奇異の思がしてならぬ。今更に。

今の婦人が純なる心と身とを以て人に嫁がざることは確である、萬人が萬人人を欺くべく餘儀なくされてから「男子もいつはつてあるのだ」といふたゞ一つの推量に慰められてあるのらしい。（Ｘ）

○三人して

京橋　萩花

「○○先生もういらして」

「まだお見えになりませんが」「ぢや、また」「私たち三人はつと門口をはなれた。

こゝにおればいらしやるのがわかるからと、坂の上の鐵のくさりのもとに立つた。

つめたい風が頰を吹いて、あたりがだん〳〵とうす暗くなつてゆくのに、三人はまじろぎもせず、同じ樣に今來た車の行方を見守つた。ため——行きすぎてしまつた。

「どうなさつたのでせうねえ」と一樣に三人の口からもれた。

氣がつくともうすつかり暗くなつて、櫻の若葉をもれる月の影は美しかつた。三人の若い女が眞暗な中に、鐵のくさりに倚りかゝつて立つてゐるのを、通る人通る人が皆ぢつと見つめた。どの人の眼にも疑ひの色が浮んでゐた。とよ樣はどうしてもおかへりになるといふ。千代さまと私はもう一度伺つてみてお目にかゝりたいと思つた。とよさまを山の下までお送りして歸つて來て、再び門口に立つた時、「今度こそきつと」と思つた。やつぱりいらつしやらなかつた。

私は泣きたくなつた。出られないのをやつと都合して來たのに、お目にかゝれないでこのまゝ歸るのかと思つて。

「千代さま御縁がないのですわねえ」二人でしばらくそこに立つてゐた。千代樣は夜中迄でも、一晩中でも、こゝにお待ちしてゐたいと仰有つた。私もゐたかつた。

けれども許されないのですもの。夜出るのさへ一人ではなかなか許して下さらないのですもの。

二人はだまつて坂を下りた。淋しい辨天樣の石みちをあるきながらも、いく度も振りかへつた。まつ暗な森の中の美しい灯を見ては。

坂下をくるまの灯がゆれて來た。あれぢやないでせうか？また二人は立ちどまつた。そして二つの灯のゆれて行く先きを待つたが、それも徒勞に終つた。

觀月橋の上でもしばらく立ちどまつて森の中の灯を見つめた。池の端の廣告い灯が、美しい影を池の水にうつして、山でつく鐘の音がゆるゆる水のうへを流れた。

二人はだまつて暗い道をあるいた。

淋しい云ひ樣のない想を胸にいだいて。

誌友會に山田邦子が閉會の辭を述べる時、水野仙子が卓子の上に花を据ゑた、あれを寄贈したのは「三人」の中の一人である、内藤千代子樣が來てらしてよ、黒いおみ帶で島田ー呼んで參りませうかと平塚と早川がさゝやいた「三人」の一人がそれである、さて萩花の君はいかに。(Y)

○三枝さんへ

南千住　清子

三枝さま、御手紙有がたう。貴女は大變に御ふとり遊しましたつてね、早く御寫眞が拜見致し度うございますわ、毎日畑に出て、お父樣や、お母樣のお手傳ひ遊すと聞いては、もう目の前にお姿が浮んで來ますわ。人形の樣な三枝さんが、手拭かぶつて紺の着物に赤いたすきかけて、鍬を手にして畑に立つ姿は、宛で芝居で見る田子の樣でせうね、私もね此頃は兄さんの着古した筒袖に、はだしで働くのよ。朝などは實に見られた姿ではございません。三枝さん、私ね先達誌友會に參りましたの、あの遠山いね子樣の御話し、實に私うれしう思ひましたの、氣が晴れ晴れしましたわ、髮のことから、衣服のこと、三枝さんに聞かせたかつたわ。又私がくはしく御話し致しますが、まつたく此の頃の人は華美に流れて居る樣ね、私など家に計り引込んで居て、少しも流行物や、風俗など知りませんが、新聞で知つたり、人の話しを伺ふのに、まあ十八九の人は、召上り物より、衣服の方に目榮なさるようですわ、一寸出るにも、私などのように、田舍織のごつごつしたの着て居る人はありません。御存じの通りの私は　あへて着物などほしいとは思ひません、今はさういふ氣樂な身の上でもないですが、それは私とて若い女ですもの、あの柄はいゝ、色はいゝとは思ひますが、たゞ好いと思ふ許り、三枝さんでさへ紺の筒袖。あゝ何日でしたかね、川崎先生が身にはつゝれをまとふとも、

心は錦と仰有つたことがありましたね。忘れませんわ、上見れば及ばぬことのかぎりなし笠着てくらせ己が心に、實に私は守つて居りますことよ。髪は日本髪ばかり、日本髪と云へばあの内藤千代子さまも美くつてよ。品のいゝ高島田、美しい方よ、山田邦枝樣は、どちらかと云ふと下町式の意氣の方よ。皆樣は私の想像がらつと外れてしまひました、何しろ美しい人の集りでした、では此れで失禮いたします。

當日幹事方の大立者山田邦子さんのアタマに皆なおどかされたことはおつしやる通りです、内藤千代子さんには九日にお目にかゝつたが、背の高い方、やはり其時も、品のいゝ島田であつた。別嬪の旗頭が若杉はま子、おすましの大將はつひ失念仕候。(Y)

○冷たい女から

みづくさ

A樣！

ほんとにあなた泣いて下すつたの、たつたあれしきのことに、母がない父がないとそれ位なことに——有難う。けどあれはまだほんの三番叟なんです、まだ〳〵私の境遇は悲しい小說よりも深い悲劇を持つてます。私はそれを今日の日迄も、たゞの一度も他人にも親族にも打割つて話したことはありません、小さい胸にいつ迄も葬らうとした心の苦しさ、A樣御察し下さい。たつた一人の兄、あゝそれがそも〳〵の悲劇の始めなんでございます、私の此の低い脈は汚れた血から鳴るのですもの、あゝ。世にも恐ろしい△△罪？昨日までも新聞なんか人の事と見過して居た私に、現在肉わけた、それも極やさしくしてくれた兄の變り果てた姿を思ひ浮べねばならぬとは。何んと云ふ、何んと云ふ情けないことで御座いましよう。口惜しいやら情けないやら恐ろしいやらで、毎日〳〵暗い家に無言のまゝ思ひ〳〵の夢に耽つて、凡てのことを忘れて居ました。

それでも私丈は何も知らぬ父の看護を決しておろそかに過したことはありませんでした、月に三度の音信を忘れたことのない兄のたよりがないのは何んだか氣になるつて沈んだ父の言葉に、ギックり胸を貫かれる樣で幾度かそつと横むいて涙を拭つたでしよう。虫が知して居たんでしようよ。情にきつい世のつまり賢い姉は、此の廣い天地に一人しかない父と妹を。冷酷い氷の上に居るよりも冷たく扱ひました、二言目には馬鹿、どぺすこ、何になる つもりだ、と斯うまで一人の妹を無情な言葉で扱ひました。いつでしたか例の通り義兄の肩打もやっとすまして、十二時の鐘を聞きながら私の居間でそつと女子文壇を見て居ますと、有明のまだぼんやりしてるのに大目玉むかれまして早速文壇も取上げられたこともありました、たつた一つの慰問者？にも遂に私は離れねばならぬ有樣。暮れては悲しい夢に、明けては氷にました冷たさと傷ましい姿の悩みとで、人一倍過激に働いてる爲に冬の長夜もぐつすりと眠ることが出來ぬ樣になりました。私はとう〳〵ヒスになつたので御座います。ちよつと村に行くのでも先樣で云ふことをボンヤリ忘れてしまつたり、聞かされたことを其場で忘れたりして全く馬鹿になつて了ひました。十一時過てから隣村まで三升徳利さげて、しよぼ〳〵酒買ひに行く時、靜かに更て行く田舍の山も野も冷たく冷えきつて、光り一つない暗い路をたよりない小提灯の明に、もう堪らなくなつて、ぴつたり露にぬれた芝艸の上に泣き伏すが常でした。早くから母に逝かれて何一つ温かい夢に心から笑つたことのない妹を、可愛さうな女、といつも變らず慰めて下すつた兄樣は遠く暗い冷たい窓から、こんなに冴えた月をみて男泣に泣いて居らつしやるぢやあるまいか。否々新聞位を見てあの優しい兄樣を疑つては申譯ないと自らを嘲つた線香る夜もありました。けれど鬼の樣な世が

念に佛に縋るはずは御座いません、夢なれと願つた心もむざ〳〵破られてあゝ、兄はやつぱり？。A様、私は此の時こそ死んでしまひたう御座いました、いゝえ、ほんとに？。永の月日をたえて笑つたことのない私の顔を見るに就ても、こちらまでが病氣になりさうだ、とすげなく姉は申します、一度だつて慰めてくれたことはありませんもの、ほんとにひどい姉で御座いました。神戸に參る時も姉は泪一つこぼさないで判然と申ました、再び姉の家に歸つてくれるな、私はお前等のために死んだかも知れないま、あゝこれが、これが肉わけた只一人の姉の餞で御座いましようか、私は悲しう御座います。否それも今は通り越して冷たい冷たい言葉として味ふに過ぎません。食客と云ふ果敢かりし世を思へば、實に今ある我身を深く謝さねばなりません、何を悶へ、何を嘆いて今の身を果敢みましようぞ。梅も櫻も松もないと云ふ臺灣の暑さと戰つて居ながらも、こんな兄でも兄と思つてくれますか？と悲痛を極し兄を慰めて、やがて咲く可き春の花をたのしみに私は決して、もう泣きませんよ、A様、A様ももう泣いて下さいますな。親はなくとも私等二人は美事思を遂げて御覽に入れます。

選者に對して非常に感激してゐると云ふことは分る、文章も眞實が籠つてゐる、缺點は藝術的氣分の乏しいこと（醉茗）

○橙もぎの日

山口姫小松

ぺきり〳〵！母樣の小木を折られる音に眼がさめた。寢室の南戸の小穴から光線がさしこんで障子は白んでゐる。ぱたと起きて戸を開けると床しい青葉の香がさつと流れこんだ。昨日迄の五月雨は名殘なく晴れ渡つて、みるからすが〳〵しい。殊に畑一面の橙の木の新芽も、いよ〳〵長く伸び蕾も白く大きくなつた、見えなかつた向ふの山も、今朝ははるか近くに、橙の數さへ數へられ相に、はつきりあらはした。「檀那樣お早う御座います、旦那樣お早う御座います。」そろ〳〵荷造る人がやつて來た。

「おゝお前も今日は北の畑へ、お前も西の畑へ」とそれぞれ人わけがせられて、それ筵席よ繩よ箱よ荷札よレッテルよとさわぐ。

本通りも裏通りもガラ〳〵荷車の音で賑やかだ。長雨晴れての後はいつもかうだ。皆橙もぎなのだ。宅の畑では「手に手を取りて　」と威勢よく唄つて、チョキ〳〵チョキ〳〵鋏の音にたえ間がない。暫くすると、莚七枚に黄金の玉がすつかり盛り上げられた。青天井の樣な空との對色が如何にも美しい。「夏蜜柑が食べたい。買ひにやつた處で下妻にもないし、一昨年から約束の杏も、きし子が送つてくれないから……」つておつしやつた先生に此の黄金の玉見たいな澤山の橙をお目にかけたらどんなだらう、それこそ大きな瞳をとろ〳〵だらうと……ホヽヽ、。

荷造る人は、人目も憚からず尾籠の話のみ取りかはしてゐたが、父樣が出られると皆すぐ止めた。「嗚呼人世旦那樣となるべしだ」と思つた。

正午前電報！「どこから？」、「京橋の三原からだ」。「いくらに賣れたらう」、「二〇」、「いや二一」「二三……」と開かぬ先さの臺所評議もなかなか面白い。「二三ウレタアトスグツメ」「そーら二三だ」つたつて得意氣な妹の所作振もふるつてる。

こんな事云つてる間に黒人の荷造る人は、忽ちづめて、しぶいた。一人がいふ、「早いものだな今にこれも東京へ行くが、おれも一つかう箱の中へは入つて東京見物にでも行かうかな」と、すると一人が「屬毘な事をぬかしやがるわい。貴樣のような大きな奴がどうしてこんなチッピキな箱へは入られるかい。十八錢五厘の米を何處へ食ふ」つて、其のとき

眞面目に「口にさ」……。

午後、ほんとにまあ此の橙が東京の各問屋へ行ってどう云ふ工合になゐのか知らないが廻りまはっては、或は記者様や愛讀者様方のお口をも慰めぬとも限られぬが、それにしてもどうかしてそんな時には宅の橙だと云ふ事がわかる樣に何かよいしるしが附けておき度いものだが……などゝ思って見た。

夕方父樣は、賣りがよくいつたのと、又今日のもよくいくようにとの前祝ひをせられた。

嗚呼やつぱり此の世は金の世だ！

宅のだと知らせやうと思召すなら、先づ一箱づゝ私共に送って下されば大いに効能が有るがね。尤主筆の河井君と來たら林檎といはず葡萄といはず梨でも蜜柑でも生れて此方喰べたとがないのみか、木の實草の實は動物でなくては食はないものだと思つてるほどの不埒者故、さし上げぬ方がよろしうございます（Ｘ）

橙を見て涎を垂らすだらうつて、御心配下さるな、常陸はことしは大水ちやありません（夜雨）

○呪の矢

はざくら

あゝ私はなぜ病氣なんかするんだらう。今はわづかに生玉子と、牛乳と、飲みなれた藥とに、支へながら、存らへる私のいのち。口惜しいけれど仕方がない。

死にはせぬ、死にはしない、私は九つの世を替へるとも忘られぬ恨の爲に生きねばならぬ。長命に——。

私は腹立たしさに躯も心も火の如燃えて、絶頂に達した怒の爲に涙も出ずに只ふるへるのだ。私は、私は云はうようなき強い侮辱を與へられた、忘られない、いつまでも忘られない。

強いうらみ——與へられたる侮辱——私は夜も日も忘られない。たゞわづかに力強い母が翼とその愛の乳とにて、やうやく安らかに寢てゐるけれど、ああ、どうすればいゝのだ、どうすれば——

早くなほつて、早くなほらう！

女にまれな決斷力の強い母は、いつもその力強い翼ではげまして下さる。私は弱い性である。心も躯も。

私は不運な女である。つたなく生れた子であつた。

吁！此恨何として忘られよう。

どうしたら、何としたら！呪の矢が求め得るか？

たかが女と侮どつて——私は口惜しい情ない、此の恨はらさずに置くものか、草をわけても矢をさがさう、求めよう。幾名も幾人も組して私を侮辱した。

私は寢ねもて、生き返り、生返り彼等を呪はねばやまぬ、止まぬのだ。人に恨のあるものを——。

夜も一目もねむらず悩み苦しんでは「かたき！」「かたき！」とうめき呼ぶ。憤に堪へられずふるふ。

何とてつたなきわが宿世ぞ。

「母樣、母樣」と呼んでわづかに愛の手に縋つて——

私は心のみ無念の爲に憤のためにいらだつけれど、日々に衰弱して行く躯を守つてゐる、情ない！

今は病むでも、安かに手をあづけてねる事も出來ぬ老たる母を唯一のたのみに、病苦と憤恨に凝結した躯を、復讐の二字の光明を放つてゐる。あはれなる子のために、私の爲に、母は生命もいらぬと云ふ。

なぜ、なぜ病氣なんかするんだらう！早くなほつて組せし人々にむくゆべき呪の矢を求めよう。

あゝ、忘られぬ此恨―復讐―の二文字に生き、大いなる任務を果さねばならぬのだ――なほる！

「かたきー」

あなたの文章は毎も長すぎて困る、此も少し削つた、思索を統一して、筋がついたらもつと緊縮して書いた方がよろしい、あなたの文章は今のところ長すぎるのが弊だ（評者）

○幼兒

備中　雨の花

愛らしい〳〵――かなりやが鳴く樣に裕ちやんは語る。鈴の樣な二つの眼、温たかい血の色のポツと浮んだ櫻色の頰、未だ二枚の乳齒も生えぬ柔らかい口を開いて嬉しさうに裕ちやんは語る。其なまぬるい絹よりも柔らかい頰を吸つてやると、キヤラ〳〵と笑ふ、何と云ふ可愛い子だらう。甥でさへ此なに可愛いものをまして自分のお腹を痛めて生んだ義姉さんはどんなだらう――。兩手にしつかと抱いて揺ぶりながら、彼方此方と若葉の庭を歩いてやる、上向いては何か見とめたらしう意味ある樣に語る、其が恰どかなりやが鳴く樣に聞える。裕ちやん空を見て居るのか、あの大空を、水色に晴れ渡つた清い空を大きいだらう廣いだらう、おやあの山端には三ケ月さんが薄く光つて被居る、ちつと離れてお星樣が一つ、おゝ裕ちやん、あの三ケ月樣が見えたのか、美しいだらう――あれがだん〳〵大きくなつてまん圓いお月樣になるんだよ、早く大きくなつてお月樣やお星樣のお話を面白く語つて此叔母ちやんに聞かして頂戴よ――母樣のお乳飲んで早く〳〵大きくなるんですよ、ね、解かりましたか、裕ちやん。何を云つてもにつこりして片頰に腎を拵らへたまゝ興ある樣に語つて居る、何と云ふ罪のない子であらう――。黄色をおびた柿の新葉が、なよ〳〵とやさしさうにのびて美しい――希望の色よ、裕ちやんの瞳もあの柿の葉より未だ〳〵〳〵美しい――希望に滿ちて居る、櫻の葉は最早、青々とよく肥えて小さい青いさくらんぼうが澤山出來て居る。

一つむしつて小さい手に持たせると、二三度打ち振つたが忽ち口に持つてなめた、一寸苦い顏して其なめたさくらんぼうを廻し〳〵眺めてはホーホと語る、何と云ふ可愛い子であらう――。抱きしめて頰を吸ふ、キヤら〳〵と笑ふ、玉の樣な聲、其聲の洩るゝ齒のない口、凉しい瞳、何と云ふ可愛い子であらう――。三ケ月さんはだん〳〵輝き出した、山は暗黒色に聳え立つて三ケ月樣にとゞきさうだ。何所かで梟が鳴く。池の堤を行く人の足駄音がカラコンと反響する。隣家の子供は、わ――わつと泣いて居るが、内の裕ちやんは、此通り日の暮れるのも知らで、にこにこと嬉しさうに語つて居る。

氣の利かないのを咎める前に、此忠實に描かうとした態度を褒めねばなるまい（Ｓ）

○若き生

伊東松原　なぎさの女

物理の無碍直落に苦しめられて疲れた頭を夕暮の縁に立つ、いま靜かに消え殘る濱の潮の香に乘つて果もなく行かむとする若き心の影をわれながら冷い理性の手にちつと抱き止めねばならぬつれない歳に、自分はいつかなつてたのだ、寂しいじやないか。沈め〳〵と無理から壓しつけた胸の血汐の、底に燃えるのを知りつゝ平然と通つて來た十代の春を、

今一度とは願ひもしないが、あなたは強いのねなんて嘲笑の面に立つた時は、もう居ても立つても堪へられないのです。

纏はずまい、と誓つた唇によし甘いさゝやき聞けばとて、着るべき時に捨てやつた色彩の絹をいまさらに羽おつて、さて私はどうしやう、あゝけれど少女ながらに消え殘る執着のたもとを斷つて見も知らぬ國にさまよはむ？

所詮は寂しい生——

白蓮の花のはらはらとこぼれて落つる。

夕の膳に向ふたとき、ふと、けふの日を思つて腥ぐさい物にお箸を絕つ。

母樣、私尼になつても困りませんよ、お魚きらひですもの、と云つて母の目を見る。

馬鹿な縁喜でもないと、しかりつけられて自分は泣き出したくなつた、母は現世の人、自分は果敢ないまぼろしの影を追ふて走らむとし、又自ら止まらむとして、さ霧の中に立迷ふ惱の女、袖の汚れを氣づかふのみが母の役かはと勿體ないけれど思ひせまつて恨むでも見る、あゝわれながら意氣地ない心、明暮に敎へを願ふて文庫の底に秘めた日記に其人の御名を見ない頁はなけれど西ふじが根に對する山の麓は水清い國だと聞きますもの、心怯えて師の君とは云ひ得ませぬ。

六日の月が由城の峰にすむ宵を、はなれに起る姉がすさびの箏絃の曲は末の契り、あゝ女らしい姉樣には、遠い國に甘い瞳かはす人があるのだつた。

……………君まちて、憬れたまふな…………おゝ古くさい、温い手に觸れも見ずすねた私はこのざらざらした松の木に縋りついていつまでもかうして居やう——何時までも——。

世をすねて行く人にはすねて行くだけの原因がある、人をばかにする人にも茶にする人にも皆原因があつてするのだ。「無礙直路」などゝむづかしいことを知つてる人が死んだつて尼などになれようか。うそをおつしやるものぢやありません。（X）

○ゆふげのあと

諏訪　べ　に　百　合

振り仰ぐと、七日程のふくらみを持つた月の光がぼうとにじんで、ず度蝋燭の外焰に見る樣な、淡い玉子色の御傘がぱつと大きくかゝつて居た。

二つ程矢張にじんだ星が手を引き合つた樣に其中に並んで居る。破れ傘は晴れときいた。あすも又好いあんばいと思ひ乍ら、唱ひ乍にどことなく揮ある樣な池の水でアルミの御辨當箱を洗つた。風もない靜な夕。

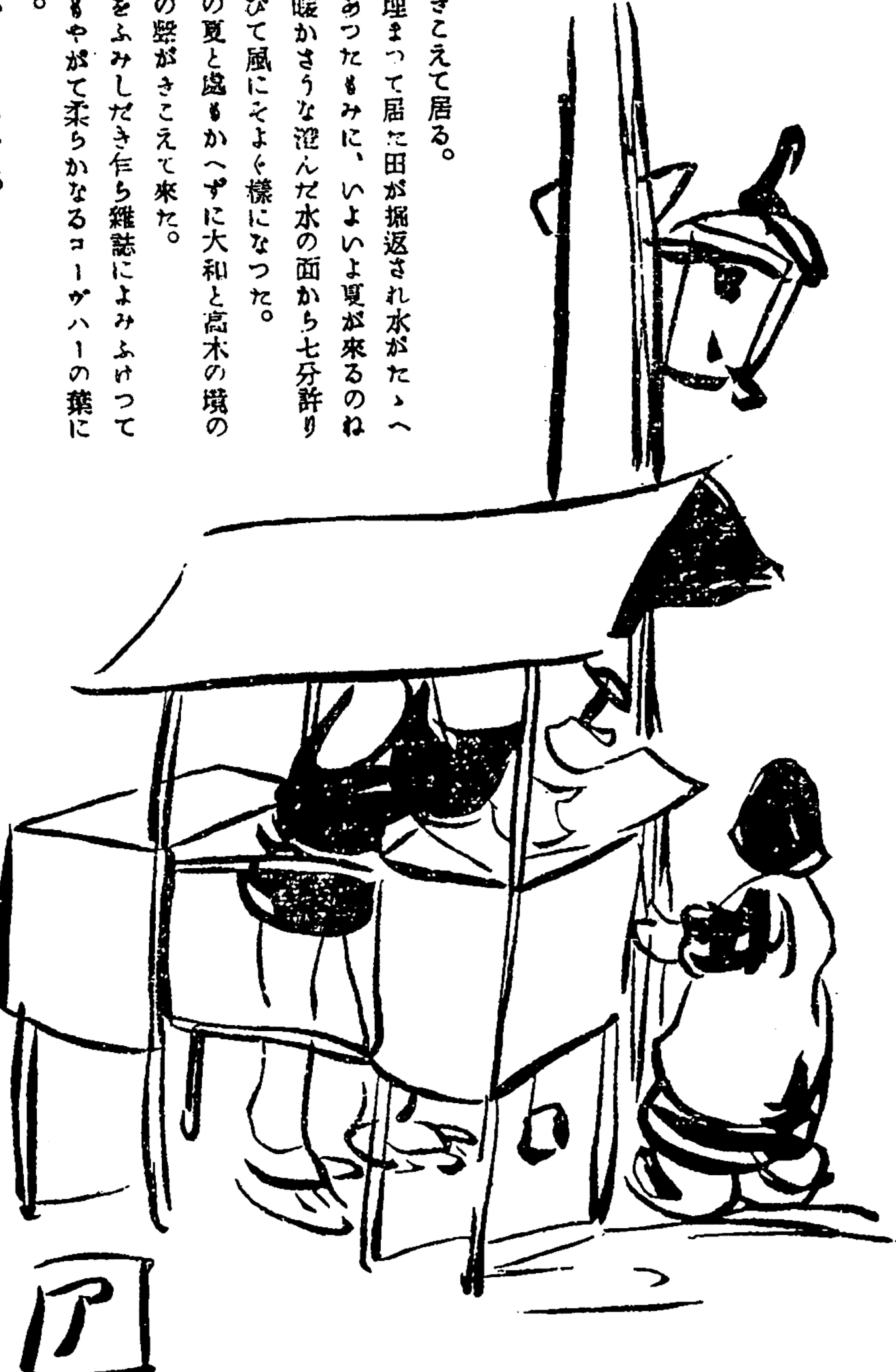
南の隅に丈高いみねざうの木も、庭石の根元ねもと球の樣に苅り込んだ草つげも、池のぐるりを取りまいてきつちり茂つたさつきの葉も、徐ろに更けて行く夜の抱擁にまかせて靜かに眠りに入らうとして居る。

逝く春のおぼろの宵。私は入るのが惜しかつた。

燭臺ランプをつけて、故鄕へ歸る心持に私は室のふすまをあけた。寂しい沈默にひたつて居た本箱も、綠色の机かけも、其上のクリーム色の花びんしきも白の木蓮も、それから水色地に大きな淡綠の朝顔の壁模樣も華やかな灯影にぱつと輝いてはゝ笑む樣に見えた。ああ、これから私の世、早く机の前へ。せかれる樣なよろこびに胸を躍せ乍ら靜に座つた。

らんまん花咲亂れたる花園の樣な未來の空想も、ちりめんの小切れのたとうを開けた樣な、紫、紅、白、鼠、綠、なつかしいうとましい過去の追想も、あの友の事もあの師の事も、雲の樣に湧く樣々の想を、丁度島

の空をかける樣に自由に走らせる此小窓のもと。
私は濟まないけれど母樣に對ひゐて針もつ時よりもある意味に於てよりなつかしいのだ。
其時私は、慈愛の御胸の内にしか住み得ない幼ない少女の考へで居なくちやならないもの。
何をしよう。まどつて後の壁にもたれた。
氣が付かなかつたが、がはがはと賑やかな樣な寂しい樣な蛙のなく音が流れる樣にきこえて居る。
ぴいぴい草やれんげに埋まつて居た田が掘返され水がたゝへられてばらばらとまいてあつたもみに、いよいよ夏が來るのねと驚いたのは此頃。もう暖かさうな澄んだ水の面から七分許り淡緑のやはらかな芽がのびて風にそよぐ樣になつた。
今朝も行きがけ、去年の夏と處もかへずに大和と高木の境の谷間から幽かなかくかうの聲がきこえて來た。
私が毎朝金色に輝く露をふみしだき乍ら雜誌によみふけつて登校する一里のたんぼ道もやがて柔らかなるコーヴハーの葉に包まれて仕舞ふであらう。
あゝ、青葉の夏、私の心はときめいた。



流れる樣に。蛙がなく。遠く近く。
月がさ日がさのかさは笠ではないでせう、しめじかはつ茸の冠つてるのは笠としてもいゝが。池水で洗つたおべん當はあなたのですか。

岩國所見　　廣島市　　後藤あさ子

池といふとぬるまこい水を聯想する。諏訪湖の美しかつたのはむかしのことでせう。（X）

○別離

備中　小見山春子

「噫何事も運命なり寄生木の良平を以て自ら任じたる小生は二千哩の長旅に向ふさらば」どうして讀んだかどんなに感じたか分らない。（三ジエキックコイ）どうして仕度したか分らない、雨淋しく降る小路を足許あやぶみながら、心ばかり先へ走つたどうして會つたかどうして別れたか判然と意識する事は出來ない、不言の語、只眼が語つた丈だつた恐らくは送る者より送らるゝ者が感が深かつただらう。別離の涙、悲哀、幾度も經て來たが現實に現れた涙より更に深い心の哀愁心の涙は初めてでそして終りだらう。

噫運命とは云へ、お優しい兄上さへ此世におはしたならばこんなに心からの涙も出來まいものに、あもう兄樣と申上る事は出來ない、小さい頃からお嫁入りするにも、自分の姓と同じ家へ嫁つて、一生自分の姓を變へ度くないと思ひ思ひしては來たものの、さてこんな境遇になれとは祈らなかつたものを。純潔なる處女てふ誇の胸に君の歸朝を迎へる事は出來ないのだもの、もう陸に居る人じやない、泣くにも泣かれぬ程心から淋しい、その淋しい心のやり處がない、それが本當に淋しいのだ。ロンドンの夕、セントヘレナの月、皆美しう君の慰藉に勸めやうけれど、されど、されど君の御胸も安らかならぬ事を知れば。

雲の踊るやうな空を眺めては、君の長途の安全と幸福を祈つて溜息をもらしては、深い深い思ひをめぐらす樣になつたのである。

無花果の葉から落る雫が丁度私の涙のやうで悲しくなつたなんて書き出してあるから、こりや矢張なつてないと思つたら、しまひはさうでも無さゝうである、尤半分は獨合點では困らせの文なれど、それにしても人の奥さんにコイはきびしい。（X）

○遠い〱友達に

上野　羽路朶榮

久しく御無沙汰申しました。

春！春ですねえ。學校の櫻が散つてしまつたと思つたら、もう芝の若芽がなつかしい匂と若々しい色彩をもつて、ぞつと眼に泌んで來ます。遠い〱北國から、來てゐる靜さんは、うす紫のあの御荷峯に、そつとかゝつてゐる雲に、泪をふるはせてをりました。ホームシック!!幅廣のホワイトリボンがようく似合ひました。すらりとした、なでかたに、矢飛白の初袷、古代紫の袴を、芝にかろくおいて、眞向きに青もい空と御荷峯の、白い雲を見てをりました。きつと故鄕にはなつかしい、お父樣やお母樣や可愛らしい妹さんが靜さんが夏休みに歸つて來るのを待ちこがれてゐるんでせうにね。

柔らかい春の日は、いつぱいグランドに降つてをります。ほつれた靜さんの髪の奥に、あのやさしい瞳に暖かい泪が……たまつてゐるんでせうね……。

雪が軒まで積つて、其上を雪駄をはいて、遊び廻つてる北國の子供。さうした中に育つた、靜さんと淚もろい靜さんの母樣とを、思ひ出されずには、居られませんでした。

北の少女と春。

私はかうした淋しい批評眼をもつて、毎日黑いインキで自分の日記を塗つて居ります。

さびしう御座います。御手紙を下さいまし。

文章世界式の文人まねはつまらないよ。(X)

○雪の朝

北見　白樺子

内地は今春も閑であらう。こゝ北見の果は、花ならぬ花に宛然たる水晶界、夕よりの雪は、一夜の中に野も山も、家も、林も森も、銀色に包んでしまつた。只見るかぎりの平原は、雪の野と化した。……おゝ、美しい雪の明ぼの！と、叫けばずには居られない。廣いく〱牧場の内に、まばらに立つてる、樺の木は、眞白い花でも、高く積んだやうだ。其の下に、頭重げにかたむけて、夢でも見て居る様な青いく〱熊笹は、時どき、頭の白い雪を散らしては、ゆらいでゐる内に、緑りの姿が、白ずくめの中に、クツキリと、浮き出す、見て居る間に、向ふのも、となりのも、ゆれると思ふと、忽ち、皆んな、浮き出して了まつた。笹は丈が高いから、いゝけれど、あの寸のびた、若草は、どうして居るだらう、あつ、それにあの、濃い紫の花も！！――詩人の、甘い涙が、こぼれて、さいたやうな、可憐な花も、すつかり、雪の下に、なつちまつて……。實に、なんて、哀れな花なのだらう、可愛想だ、弱い花なのに！ 萎れないでゐてほしい……。ふと、振り返ると、あらく〱お日様が斜里山の蔭から今出たばかり――。おゝさうく〱、まだ、顔も洗はないのだつけ、いそいで背戸の小川の岸に立てば、桔梗色をした水は、旭を受けつゝ牧場を縫ふて、西へ西へと、靜かに――。(四月三十日)

四月三十日と云ふに、未だ雪が白皚々と積つてゐるやうな地に住んで居る人の心持は、もつと違つたものであらうと思ひます。景色を描くのに氣取る必要はありません。(S)

○田舍の祭禮日記

美作　水田邦子

今朝はいつもより早く目がさめた。ア、待ちにまつたるお祭りも愈々今日だ。何んとなく、嬉しくて心がソワソワする。

ぎさやがせつせとお掃除してゐる前を私は忙がしさうにハタキ持つたまゝ幾度も通つた。

心がいそく〱して家の中をあちこちとあるきまはつた。

ア、何せうか……どうせうか……と思ふ計りで何も出來ない。母様が庭の山吹がきれいに咲いたから見にこい、とおつしやつたので急いでいつた。

「まあ美くしいだらう……」とニコく〱しながら仰しやる、「ほんとにみ事にさきましたのね」と云つてゐるところへ、ドーンと大きな太皷の音がした。

「それもうなり出した」と母様は内へいらした。私は一人そこへたつて聞いた。後から「お風呂がわきましたからどうか」……と谷五郎の聲、アアさうかといつて、其後へついて湯に這入つた。

二時頃母様が「もう參る様に早くこさへて」と仰やる。「お母様もどうか……」と云ふと「私は後からぎさやとおまへり」とおつしやる。

三時がなつたので、二人連で宅を出た、やがて鳥居の所までくると道の兩側へ幟がすきまなく立てつめてある。ぎさやと話をしながらゆくともう宮の前には大勢の人でつんでるゐ。

私は洋傘傾けてうつむいて歩いた。一寸向をみるとどうかかうか私の通れるだけ道あけて大勢の人は、みせ物か何かをみる様に、みゝわく〱男も女も、年寄も子供も…… 私はもう恥かしくてく〱たまらない、洋傘も

たゝまずにとう〳〵宮の前迄いつた。漸くたゝんでさやにもたせて、お賽錢打つて手を合せた。

愈よくみる、はづかしくて拜むのもそこ〳〵に人のおない所へいつた。

あまりの恥かしさに神官が何人おたのかみなかつた、誰もこないと喜こんでおたらドヤ〳〵と俄かに大勢きた、そして皆一時に「ようおまいんさりました」と云つた、私も「よいお天氣で……」と挨拶した。

人は私が珍らしいものかの樣にはたの者の手を引き袖を引きしてみ上たりみ下したり、はてはいてるゴム草履までウジャ〳〵いうてみておる。

私もいつそみてやろと思つて顏上げた、丸髷の女束髮の人新蝶や島田の人も大分おた、どれとて今日を晴とこしらへてはおるがとびつきたい程の人は一人もない、顏計り白い襟や手の黑い皆土臭い樣な人ばかり。

歸り道で富貴さんに逢つた。

向ふに私としらなかつたのか道の傍へでお尻はゞつて小便しておる、オヤ〳〵まあ何の事だらう……三枚重着込んだ人があんな事……一度富貴さんのマダム振りみたい者だと思つておたがあれはマア……ア、田舍の者は誰でも皆あれだ、ほんとにはづかしい事だ……どこで誰がみてないにも限らない、ア、妾もよく氣をつけないと彼女みたいに眞紅な顏せねばならぬ。

三枚襲のお孃樣が往來で小便するとは成程田舍だ（S）

○雨の一日

ナゴヤ　鈴　子

あゝいや〳〵、こんなに雨が降つてはほんとうになんだか氣がふさいで御裁縫なんかちつともやれない事よ。

私雨降りは大きらひ、こんな事を云ふとあの口惡るの兄樣が又すゞちやんは十八番がはじまつたと御いひ遊ばしますかも知れませむが、私は何より一番きらひよ。

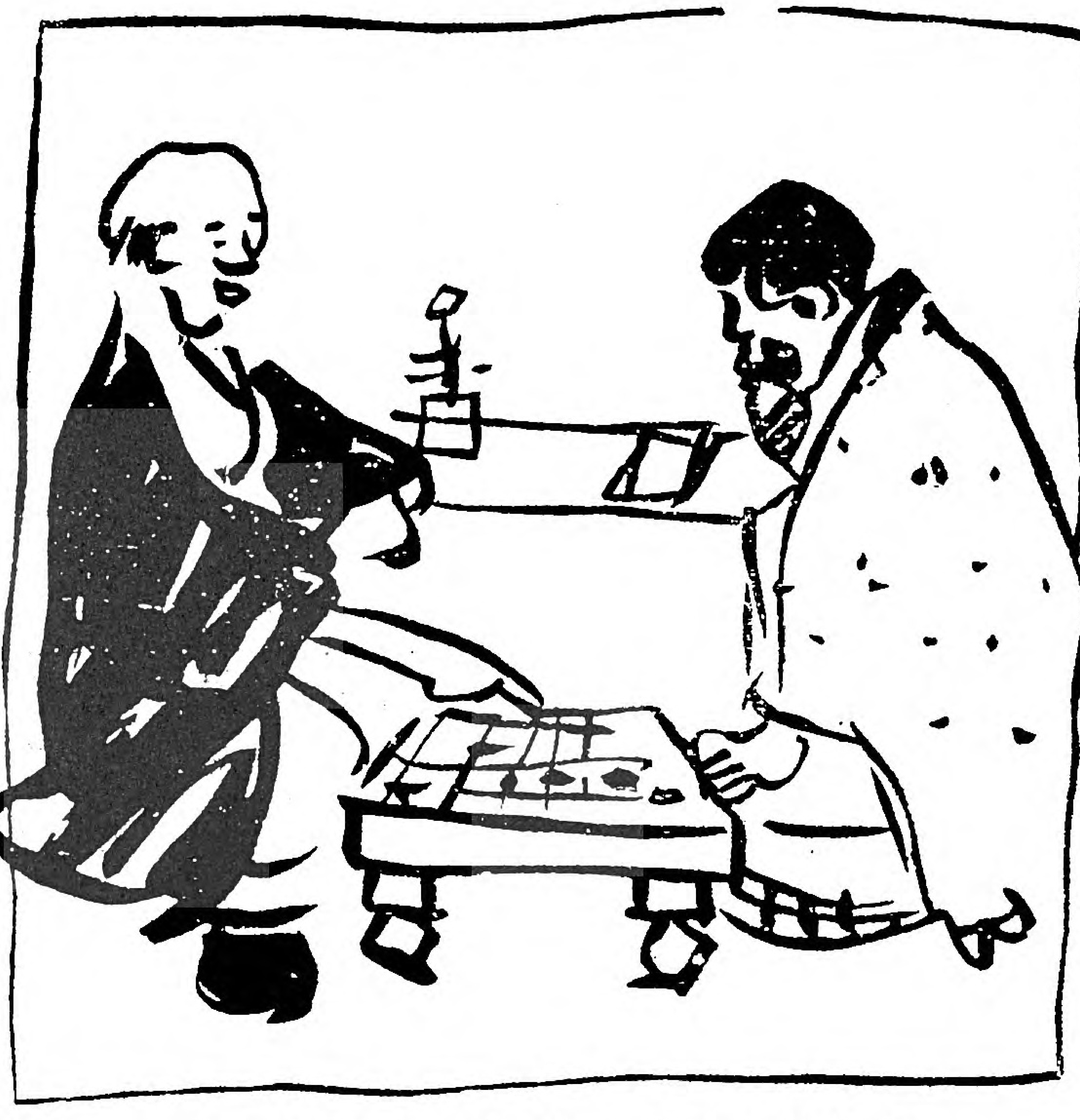
あゝ又ひどくなつてきた、そして前より大へん暗くなつてきてよ、ああもういや〳〵。こんなうす暗い御室で一人御裁縫なんかして居る事はどうしてもいや、だれか御話しあひてにでもなつてくれる人があればよいけれども……きつと御兄樣も今頃は御勉强にあつて御いで遊ばすでしようよ、どれこれから御兄樣の所へいづて遊んできませう、それでも此間の樣にお こられ てもつまらない、けれども今日は、いゝ事よ、此間の樣に横着をしに行くのではないから。なんどと自分勝手の理屈をつけて、兄樣の御室へ出かけた、そして障子のすきまからそつと中をのぞくと、これはまあおどろいたわ、ものずきの人も有るもの、この雨の降るのに誰方か御友達と一生懸命に御本とにらめつこよ、御話しも遊ばさないで。

いつもまなら後からそつといつて、だましうちにしておどして御あげ遊ばすのだが、今日は御友達が御いでになるから、おとなしく引き返してこようとするとたん、中から御兄樣の御聲で、誰だつ鈴かつゝ仰しやるので、こはごはながら、ハイと御返事申して、こちらへきかけると、それとはちがふ御聲で、は入つていらしやいと仰しやる、けれども何んだかきまりがわるいから、だまつて立つて居ると、障子をあけて、御呼びになるので、眞赤なかほをして中へは入る。そしてよく御かほを拜見したらば、兄さんの中よしの中西さん、まあといつて二度びつくりをする。そしたら中西さんては、鈴ちやんそんなにおどろかないでもよい、なにも僕は人を食な樣な者では有りませむよですつて、眞面目に仰しやる、そして又こんな事を仰しやつたのよ、僕はもうさつきから君ののぞいておた事を知つて居たのだと、兄樣もですつて、本とうに兄樣

達は御人が悪い。けれどもすんだ事は仕方がないとあきらめると、又兄樣ては、お前が行きかけたらばよんでやらうと思つて、をかしいのをこらへて本を見て居たらば、思つてゐたやうに行きかけたから、早速呼んでやつたのだと、ほんとうににくらしいわねえ―。みなさま方の御兄樣もこんな風ですの？さうしてゐるとかう云ふ風は兄樣方の通有性なのでせうか。

それからでも二人にさん〴〵に今の女學生はどうとか、かうかといつて私一人を御いぢめ遊ばすので、私あまり口惜しかつたから、いゝ事よ、こん度私の御友達が御出で遊ばした時には、兄樣一人をいぢめて上げるからつていつてやつたら中西さんては、又兄樣に、いゝよ君、その時には僕がきてやるからですつて、ほんとうにどこまでも强情ばるのよ。

こんな事をいつて夕方まで遊んで居た、そして外を眺めたらは、いやな雨はやんで居た。



お尻の永い客　青森　松尾ちよ子

氣がふさいでならなかつた雨の一日もすぎ去つた、明日はどうか好い御天氣にしたいものであると、庭に出て大空をあふぎて祈つた。兄樣の通有性たると共に、世の妹さん達の通有性も、そつくら此通りであらう（S）

○或る人へ

仙臺　野末のすみれ

昨日祖母樣よりお話がございました、私はびつくり致しました。先日手紙で、申上た事ごらんなさらずに、たゞ手紙見たとの、はがき下すたのでしたか、只今の私の家の境遇では、ぜひもないと、おもへばこそ、今までの望も不平も皆、前の川では、流れませんから、ひろせの川に流して、あなたのお心通りの、ご返事を申上たのぢやありませんか。

それに昨夜祖母樣御出で遊した時、とし子は一生おれとともに、居る氣でないからとか、おきかせなすつた由ですが、きいてしまつて、ネ、私はびつくりしましたワ。私の決心は皆殘らず、

今更そんな事お云ひ遊すとは、どういふわけでございますか、その位なら決心などを、せはしくきくにも及はぬ事だとぞんじます。すぐる年までは夜のめも家内中ろく〳〵合せた事なき日ぐらしをつゞけてきましたが、やう〳〵この頃は、和氣藹々と日をおくるやうになつたとばゞさんもよろこんで居られます、人もよろこんでくれます。それに、又もいろ〳〵な、ごた〴〵話をお互におきかせ申て、あすをも、知らぬ命のばゞさまに、心配かけるとは、なんと云ふ、情なき事でせう、なんと云ふ、私もあなたも不孝者でせう。なぜ私の家はかくも、ひやゝかなくらしに、おち入るかどおもふと實に〳〵、口をしき次第で御ざいます。今度はどんなお心に成りなしたのですか、御伺ひ申上ます。及ぶたけまで、お答いたします。そして一生共に居る氣ぢやないなどゝ云ふ事は、今は私の中言葉になりました。どうすれば、よいので御座います。ぜひ御返事下さい。次だいによれば、北海の伯父にも殘らず云うてやり、なんとか、工夫をきゝます考です。あゝなんたる私は不幸者でせう、家の爲め弟らのためとおもうて、お心通りのお返事をしても、それでも、なんにもならず、あたらをしき月日を、もん〳〵と暮さねばならぬかと思へばなんともかんとも、申しやうもしやうも御座いません。ご自分の不幸不足を、思ひ遊すならば私らの不幸不足もさつして下さい、そしてとも〴〵さつし合つて、そば樣にこの上ご心配かけず、家大事と、守りたうございます。不運やよくをとやかくと、考へた日には、限もはしてもあつたものではありません。不幸だ〳〵と云うて私より不運なのは、少いでございませう。それをちつともくにせず、悲いとも思ぬかくごでずから、何卒、この後ともに、たのしくくらしたいものです。それのみ一生の私の願で御座います。あゝかゝるひやゝかな、かなしき思ひして居るとも思はず、あはれ唯母さまは、身にも心にも餘るひさんに負けて、腦病院の一室に、臥床してなさるでせう。

小說にでもありさうな事だとも思ふし、今の世の人の筆とは思へぬふしもあるし、何だかけぶつたい手紙だ。(X)

○休みの時間

小倉冷花

二三日引きつゞいた雨は名殘りもなう、美しい花壇の若葉に日光がさして、淺いみどりが光る樣。

級全體の人が樂みにする午休、私は一人机によつて雜誌を讀む。圖書室にテニスコートにあふれ出た後に廊下の窓に殘る一群は、例の荒木樣を筆頭の幾人!!!

わざと窓から半身を乘り出す樣にして、聲を揃へて一時に寮歌をうたふ。其幾人かの黑い瞳のかゞやく所は直ぐ裏の○○學校のグラウンド。そこには白シャツ勇ましき若い人が盛に野球をやつて居る。

いつもきまつた荒木樣達、何を求めるか？

手を握られるのを目的に、活動寫眞に憧れる此の人達に逢つちやたまらない。こんな事を見る度私はうるさくて仕樣がない、ちつたあ苦い藥でも飮で見るが好いと云つてやり度なる。いつまで醉つてるのか。

しかし彼人達の方が幸福なのかも知れぬ。いつ〳〵迄も我青春を樂み得る人なのだ。

私はもう覺めて荒んだ燃ゆる血汐もかれ果た敗殘の影だ。少女十六にして覺めし私はそも幸か不幸か……。

紙の上筆のさきだけの敗殘である、何といふやすつぽさだらう(X)

○展覽會より

福井明ノ星

別に是といふ感じた成績物は出てゐない、成績物よりむしろ目に立つたのは香をしてゐる女生徒である、一人の美しい女があつた前髪を高くふくらめてゐた。顔は花に例へやうか玉子に例へてよいか一思案……。着物は空色地に黄蝶と白蝶とがとんでゐる模樣、袴は流行ので品よくはいて居た。そして參觀人を見つめてゐる。其中ふと私の方に目が廻つて來た。美しい人に見られた私あたりにゐるのが何だかいやでくならなかつた。造花のスミレを買つてかうかとも思つたが美人に見られて何しろ其邊にまごつくのがこわくなつて來た、姉さんもつとカプリふる喚ちやんをむりに引つぱつて學校を出てしまつた、帶の間を伺ふと時計はおや十二時三分前、なつかしい海川サラバ……サラバ……く。

乾き切つてるのもいゝ、ばさくしてゐるのも惡くはない、なぜなら雨露の惠みに生きかへる時もあるから。と思ふけれど若いお孃さんのくせにかう婆くさくひすばつてしまつては駄目だ、猫退治やお去らばくに滿足してるからだ。(X)

○久し振り

福岡　すみ子

大層あつたかになりましたね、先日黑田學校の藤が盛りと聞きました時、なんだかかう其樣の氣がしました。だつて櫻も散つたような氣がしませぬに藤の花頃なんて、私には思へませんでした。それが當地でも小田部小田部と皆の人達が出かけて居ましたが、此二三日そんな藤見らしい人は見當らなくなりました。でもう藤も盛り過ぎたのだらうと思うて居ります。

ああ花が早く散るのでせうか、それとも月日が早くたつのでせうか、ああ不思議です。

去る者日日に疎しか、否さうじやない、全さうなんじやないけど、だんく御不沙汰がちになつてきましたが、やむを得ぬです、何卒御許し下さいましよ。時候柄御身御大切にね。兄樣御あいさつじやありませんよ、眞心からですわ。

すみ子はお嫁に參るのに候。御無沙汰は全く止むを得ぬに候。(X)

○初夏の朝

京都　はつゆき

おき出でたまゝいゝ心持を輕い足に運んで、東の門をあけて出ると、霧深い西の山は頂のみ幽にみえて、野中から一筋の煙が立ち昇つてゐる。西北の連山は遠くしてひくい。あゝあの山の向ふ！海の彼方は慕しき君のいます處!!と思へば淡墨のやうな山がなつかしい。

櫻の花の散る頃からふくらみかけた桑の芽は、日を追うて太りつゝのびゆく。手を伸べて高い枝を撓めて、一葉一葉をつむひゞきは全身にわたつて、連る葉末の露ははろはろとこぼれて袖につもる。ふと翻す葉ゞ裏にかとんぼ一つ、大きくはないけれど細い長い足は、露に重る體を支へる力もないのであらう、微にもすくんでゐる。野鳩のなく聲がきこえる。幼い時不孝者は生れ變るとあの鳥になる、とよくきかされたものだつた。つみ入れる一葉一葉はいつか重くなつた。

向うから女學生が來る、丸い頭に可愛い瞳、それを叮嚀にさげて。編笠の女が三五人、鍬持つた農夫もあちこちにみえる。

淡雪にさへかくれた麥は、伸びて逞しく育つてゐる。濃い淺黃に紫がかつた莖は、上と下とに隈どつて露深い穗先が最淡い。

やさしい山の姿や、雄々しい松や、籔や叢や、水は淺いけれど波のない苗代は奧深く廣い。眼なれてはあれど美しい景色の朝日に映えて水

に落したかげの美しさ、ふと黄な色に驚かされて頭を上げると、それは棗がくれの棕櫚の花であつた。

どてゝゝと景物ばかり並べこんであつたのをやつとこれまでにへらした、桑をつむのは蠶の爲だらうに、「この頃の日課として毎日摘みに來る」つて、「アタシ運動するのよ」ですか。（Ｘ）

○三　片

伊豫文子

夕方柿の木で雨蛙が一しきり鳴いてゐた。今夜は月も冴えないでただをぞ暗いばかり、バイブルを手にした自分は、ほとんど無意識であつた。闇を縫つて一直線に響いて來た大聲の耳に入つてからは、さすがよみがへつたやう、こんどは頭の中が大騷動、悲觀、常識、虛榮などと込み入つて來た。

朝まだき向ふもこちらも霞が包んでゐる。空はコバルトに晴てるから上天氣に違ひない、四五人で山へ登つて見た。霞はやはり去らない、珍らしい物でもかくしてゐるやうで樂みが多い。爪先上りの道をたどつて來て隨分さがしかつたけれど、こぶしのやうな蕨が澤山あれもこれもと騷ぎまはつて取つた。思ひ切て持つていつたお辨當も餘りなしにやりつけて「お上品な事よしなんて笑ひながら、ころぶやうに下つて歸つた。

昨夜の嵐に櫻も壽命が短かかつた。雨にしよぼぬれて花びらが重なりくゝしてゐる樣は見づともない「咲くも一時散るも一時」小學時代に教はつた一句だが、深くゝ印象されてゐる。横の田の岸に美くしい藤の花が盛りを見せた、自然生で趣味がある、餘り濃くはないが長い房は池の中で下から上へぶらさがつてゐて例のダンゴバチも來てゐる。雨上りなので花がなほ美くしう見える、そして匂もかなり高いやうだ。

月も無き暗のばんに、バイブルを持つていらすとは、さてはこの君透視眼と見える。（Ｘ）

○同窓會

堺　白つゆ

一つの野邊に育ちし雲雀。離れぬ影も今宵ぞ名殘……と歌つて泣て別れた我七十餘名の同窓會の當日となりました。かゝる會の通弊なる流行品展覽會の樣なのが癪に障つて居る同志の四人は、わざと手織のゴツゴツグで、元祿袖で海老茶の袴をひるがへして濶歩した思ひ出多い道を辿りました、あの××樣の高塀の上の綠滴る若葉の中に、雪を欺く樣な眞白なばらが昔に變らず匂つて居ますのが、風もないのに一片二片綠柳の先にハラゝゝと散つて無殘や泥足に踏みにじられて……私は何とも形容し難い悲哀に囚はれたから、友と離れて振り返りつゝ步み、樂しい追懷談の中にはや植込みのこんもりとした校庭に入りました。御互に申し合せた樣に靴音ふみ鳴した道なるに、世を忍ぶ罪人が警察の前でも步む樣に、足音を忍ばせて、限りなき懷しみといひしれぬ感想を抱いて、階段を夢中で登りました。試驗に囚はれて、花が咲けども、鳥が囀へども、外事にした時代に何時になつたらと羨みの眼をみはつた紀念寫眞!! あゝそれも今は早や枠にも硝子にも薄白く塵が積つて。其隣に下級の人の生々しい木の香!!! いひしれぬ寂しさが身にしみました。血の樣なさつきの咲き亂れて居る花瓶を前に、作法室にははや皆樣が思ひのまゝに座を占めて居られました。何だか物足りない感じがおそひましたのも其筈、半數の人は早や肩あげを下して……。私は終生又と得られない處女の誇を棄てるには忍びなかつたので、依然としておいた肩を眺めました、皆

様は色々と經驗談や、失敗談に花を咲かせていらつしやいますが、私は何ともなしに獨りもの思ひに沈み、クローヴアの敷きつめられた庭をみつめ、時々は御話仲間に入りました。たゞれたやうな夕日が神秘な妙國寺の塔に、校庭の白壁に倦んだ光をなげた時、再會を約して物足りない感を抱いて家路に就きました。

○幸福な人

鳥取　八　重　子

道さんは幸福な人、幸福な生だと近所知己の人は皆云つて居る。なぜ道さんは幸福なのでせう、私と道さんとは、ふり分け髮の友だちである、六歳の時、私と二人は幼稚園に入つた、そして、八歳の時同じく小學校に入學した、小學を卒業すると、同時に女學校に入學し、三年の今日まで離れた事はない。

道さんの父様は郡長であつたが道さんの女學校に入つた年恐しい病魔の爲に此世を去られたが、先祖から殘つて居る田や家屋敷があつて父様の生前と同じく、ゆたかな暮しである。兄様は去年京都のある專門の學校に入らつしやつた、道さんの身の上はこんなです、なぜ人は道さんを幸福な人と云ふのでせう。



畫　麻　布　井上もと子

道さんは何時も、にこやかに笑つて居ます、そして散歩が一番好です、日曜等で、お天氣の好い日に自分の家に居た事は、めつたにありません、又大層慈善の心が深いです。丁度三月のお節句の日でした、多ぜいの子供が手ん手に小さな人形持つて遊んで居ましたが其の中に只一人、みじめな着物着た女の子が、一人はねられて、片隅の方で遊んで居るのを見

て居るのがさも哀れでした。道さんは女の子を自分の家につれて歸つた。しばらく〱して女の子は可愛らしい人形を手に持つて居た、道さんは兼て大切にして居た自分の人形を、女の子にやつたのである。

道さんは活潑な女らしい少女である。この間の事でした、道さんの宅で一心に、二人が勉强して居たが、母樣が御呼に成つたので道さんは、勝手の方に行なさつた、ふと机の下を見たら日記帳があつた、一寸手に取つて見た。

四月二十五日　日曜日　晴天。

「午前十時義子さんと、植物園の櫻見に行く途中で今岡昇樣に逢つた。もし義子さんが居なかつたらきつとこの間の返事を云ふに違ひない。櫻は盛であつた、私は昇さんの事が思はれて何も夢中であつた、午後昇さんが來た、相かはらず活潑だ、自分は彼に對して何するは當然の事なり……」

パタ〱と、こちらへ來る音がするので驚て、元の通にして文典を開て見て居た。この記事を見た者は自分の外にはあるまい、道さんは相かはらず、にこやかに笑つて居る。

○日誌の中より

會津　梨花

五月七日　日よう。

業を結んで鏡臺の前に坐て居ると椽の柱に凭つていらした兄樣「コバルトに晴れた空灰色とばかりみてゐた白楊も緑と化したかナア」なんて今更のように仰有る。「これが出ないじやないか？」と兩のまね、「都じやこれが最新流行ですつて」と言ふと「虚榮！」と仰有る、二言目には虚榮の言葉・困つてしまふ。玄關でおやえさんの聲「すみません」と言つてとび出すと後に見知らぬ美くしい人が立つておいでなので少し面食ふ。此頃新日本からいらしつた光子樣と紹介して下さる。「ちきですから お上りあそばせ」他行言葉で部室に通しといて衣更して花の稽古に行く。光子樣、文壇の愛讀者ときいて胸がをどる「きつと〱いつかいらしてね」と言つて、李の花散る師匠の門で別れた。嬉しい日。

九日。

午前冷々する樣でぬひかけの羽織ぬふ。今年は苺の花が數へきれない程咲いた。今片袖はつと息つくとまあうつかり、少女の友の露子さんの二の舞をやつてしまつた。

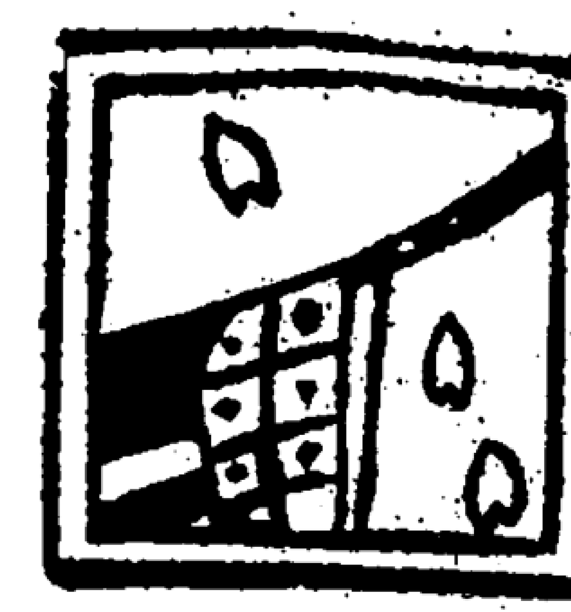
衣投やつて知らず〱雜誌に手を奪はれる。お才の國ーお才の國！ 都の人の華美な文章に平和な心を惱まされて、と思つて一月の文壇手に入れなかつたのが殘念で……光子樣におきゝしてみよう。

夜。いゝお月夜、輕い哀愁を覺えた胸を抱いて椽に立つた。茶の間では母樣と兄さんとのお話、相撲だの、靖國神社だのと私には關係のない話。寢衣の肌が冷々するまで立つてゐた、勇ましい蛙の聲と青葉の香！ あゝもう初夏。

十日。

朝仙臺の父から爲替屆く、「またねだれが始まるんだらう」「ねお母さん今月は皆積んでしまひませうね」と憎らしい、「どつちがですか」と言ふと「ばか言へこれでも三十圓取りのヤングゼントルマン」眞面目で仰有るので片腹が痛い。ですから高商よと言へたくなる。「未來はシルクハツトにカイゼル髯！」母樣さへふき出していらつしやる。「腰辨との間違ひ……」咽まで出たが止した、こんな武骨漢の人にも空想なんかあるか知ら……。

夜。母樣おるす、そこら片づけて燈の下に坐つた。寂しいー



俳句

内藤鳴雪選

○（天）千金の家を買ひけり青簾　島根縣　糸子

○（地）景清を二階から呼ぶ扇かな　山梨縣　林ふじ子

○（人）風ふけば山動きけり青簾　麹町　清水きみ子

佳作

春寒や我が撞く鐘に日は暮て　島根縣　山代なつ子

春寒う俳諧僧の馬上かな　出雲　長崎春子

春の水牛の足もと流れけり　大阪　あい子

妹が手の螢とりたるにほひ哉　信濃　麓の女

歌屑を燒いて行く春惜しみけり　岡山　花の夢

鶯を聞て去にけり貸本屋　京都　名無し草

春の暮桐の落花を拾ひ見る　備中　雨の花

藤仰ぐ坐の伏屋の小雨かな　大阪府　辻井信子

山吹の露に振袖ぬらしけり　港の女

荒城に春の月見る翁かな　渡島　宗原美津子

夕映の夏野の末の古塔かな　甲府市　塚原紋子

青梅や眺めがちなる窓の人　長崎市　永井力子

湯かへりの女美し蛇の目かさ　岡山市　立岡房之

有明の月の下なり花菖蒲　下總　谷口美野子

衣かへて肩あげ耻る妹かな　茨城　浮舟女

若葉道傘さして行く女哉　上毛　小澤碩子

佛壇の花はしをれて明易き　失名

春雨や朝寢とばかり日記して　沼津　村瀬富志子

春の月眠る女を照らしけり　沼津　村瀬常月

白牡丹先生の詩藻豐かなり　越後　藤原泣杖

七賢の話しも更けし蚊遣哉　越後　金塚美代子

海棠の窓や鸚鵡を馴らす人　大和　西田豐子

奈良近き旅の夜明や時鳥　大阪　田野静子

噴水の柳洗ひて夏の月　静岡縣　田中百合枝子

春の霜桑は黒葉となりにけり　群馬　梨畑花城子

春すぎて忘れにけりな春日記　神田區　石田美子

夢さめて夜の雉子聞く旅の宿　失名女

母と拔く庭の小草の日永かな　大阪　田野しか子

摘草や紅き草履に日は落ちて　東京府　竹村千枝子

手を拍てば岩に答ふる時鳥　長崎市　永井圭子

聖人の教も寒し年の暮　東京　白鳥正江

凉しさや文書く窓に月のさす　失名

琵琶の湖に見添へて廣き青田哉　近江　植村春子

ほとゝぎす青葉となりし寧樂の里　静岡縣　荻江

遠霞忘れたやうに鐘ひゞく　三河　樋谷とめえ

衣更へてつれなき人の通りけり　深川　小もゝ

吾妹子は金魚買ひけり夏のあめ　新舞鶴　菅幸子

旅人の杖もて量る清水哉　茨城　田村波津子

春雨や紅うる人の京言葉　越後　岩本芳子

我が庭にうつして嬉し月見草　相模　中村夏子

鐘ついてのどかにしたり京の街　神戸市　足立春子
老鶯の默々として小雨かな　麹町　牧野小はん
くり下す幟の音や夕嵐　麻布　石井すみえ
春の夜や歌よむ君は若かりし　渡島　華子
逢ふ人に清水とはる山路かな　淡路　國分光枝
葉柳に二の腕白き女哉　淡路　柏木よしみ
さて憎き風や柳の下り蜘蛛　沼津　村瀨繁子
俳諧や奈良に幾夜のほとゝぎす　宮津　一舟
君が手にもみてぞ匂ふ新茶哉　本郷　城本道子
青すだれゆれてほのめく緋のはかま　三河　村林喜代
お地藏の顏隱れけり藤の花　名古屋　瀧本逸子
鏡霞むお江戸や花の名所圖繪　大和　藤田そめ
川に沿ふ卯の花垣や新座しき　府下　龜井芳枝
初戀の夢に開きし牡丹かな　茨城縣　今泉磯千鳥
どぶ板を踏みかへしたり春の月　宇都宮　きく子
燒物の金魚浮かべる小池かな　長崎市　あやめ
堀川や月の涼しう夜は更けて　淡路　神田里
たそがれや弓射る君の白浴衣　神奈川　しらん子
古城の半かくれて茂り哉　淡路　內海千鳥子
寶物をならべし居間や風薫る　東京　ゆふ影
山吹きの一ひら落ちし硯池哉　京都　三宅壽賀子
繪日傘の追ひつ追はれつ野路かな　伏見　阪芳子
戯て見てもねられぬ夜やなくかはず　佐賀　さゝ舟
五月雨やつれづれ草の歌日記　姫路　磯菜
納涼して亡き人偲ぶ夜もありぬ　備前　みどり子
夕顏に人なつかしき夕べかな　備前　佐久滿綠子
蝶の夢さめて青葉に驚きぬ　岐阜　葛の葉
晩春の庭よなりけり緋桃散る　廣島　後藤壽美枝
ふな端ねて小川の水のなまぬるき　長崎縣　深見つゆ子
旗立てゝ歸る漁舟や春の暮　兵庫縣　有馬留子
さみだれにぬれて啼くなりほとゝぎす　美作　水田邪子

若葉日記大和に入れば寺多し　橫濱市　森花子
きのふけふ鷄の病や藤の花　橫濱　三橋春子
白牡丹寫經の机据ゑにけり　越後　藤原素子
梅の香に默せし君や何思ふ　渡島　田山清子
山駕に遊女も花見の歸り哉　岐阜縣　加藤峰子
春風や眼に見る奈良の青丹よし　東京市　黑田紫蘭
大蠶を拜む那須野や風薫る　淡路　岡田照子
勅使門銀鞍白馬薫る風　淡路　武田學子
眠るには春の夜ぞ好き遠蛙　山梨縣　[illegible]谷久子
庭石に草履しめりて柿の花　山梨縣　[illegible]谷やす
初袷嫁は姑に似たりけり　越後　藤原素子
牡丹や夜の御宴の酣に　越後　藤原泣黑子
門川に洗濯するや柳鮠　越後　藤原泣杖
雲の峰麓の原に風もなし　廣島縣　柿の舍
雲の峰小さき川の流れけり　廣島縣　兒玉黃果
鶯に杖つく坂を忘れけり　宮本灰色草
島原は京の田舍よなく蛙　備前　松本雅子
鷄歩行く下に流れぬ春の水　岡山縣　入江曉花
涼しさの青き疊に風渡る　廣島縣　兒玉すゞき子
眼を病んで物憂き窓や春の雨　廣島縣　兒玉柿村
五月雨や垣にからまる物の蔓　廣島縣　兒玉荻村
花曇り船の眠さも十三里　沼津　曉村
六尺の蘆の穗並や初夏の月　沼津　一舟
朧月御堂の屋根ぞなつかしき　八戸町　八千代子
宵闇を小狐の啼く古城かな　青森縣　西村みや子
草に座して御幸拜めば蝶の飛ぶ　尾張　綠葉
鷄飼ひて落花の中の餌箱かな　愛知縣　榊原けい子
時鳥鳴くも涼しき綠かな　和泉　竹中つねの
男の子うみし其夜をしぐれけり　群馬縣　羽路朶葉子
夏の月別莊守る一人かな　東京　百合の舟
打つほどの水を吸ひ込む花壇かな　大阪　さき子



初作

編輯局選

○青梅の實（地）

大和五條　川崎矢江

八十八夜の名殘の霜とやら大變な霜だ。下男は夜の明けぬ間に苗代へ籾蒔に行く、養蠶室の寒暖計は七十度下つて居る、急で火を入れてやる、桑をやつた、床替等して終つたら客間の時計が十時を打つて居る。「花の盛はねエー吉野の娘よーイ、器量自慢でね店に出エーる」吉野通ひの紀州馬が、ドッタリ〳〵と眠むさうにやつて來た。馬子の調子外れの聲が、嫌やに向ふ岸に響く、青い梅が面白い程なつてるのが、湯殿の窓から見える。何となく實を落して見たくて、納家へ竿を取りに行つたら母樣が蓬を揃へていらつして「今年も下市のお高はん來やはるつてな、早めに好い娘を三人程頼んどきよ、郵便さん來る迄にな、此分じや白玉が產高多いで早よ書いといてよ」好い加減に返事して置いて梅を叩く、一叩きすると十四五程の青い實と圓い葉がパラパラと下の街道に落る。いつの間か少さい男の子が拾ふてる、中を割つて見たらまだ白い、新宅の姉樣がお身持だから上げようと云ふたら母樣にしかられた。午後義姉樣の黃八丈を延べるのを手傳つて上げる黃と白茶の絹糸がもつれるたびにまぶしい樣な光がゆれる、私がキュウ〳〵と引くたびに永くゆるやかに音を立てゝ、母家の方え消えて行く。廣い庭には木の葉さへ落ちない靜けさ。暫くすると高野登りの團體が、筑前大師講と書いた幟を立てゝ、ドヤ〳〵と通つた。理もないのに此人達をなつかしくて、姿の見えなくなるまで見送る。追分を西に折れて、高野街道を行つて終つた、再もとの靜けさに返つた。昔はずゐぶん舟で學文路（カムロ）の玉屋まで吉野川を下つたのだと云ふけれど、紀和がついてから合の宿はパッタリ客が止まつた、四五軒も立派な宿があつたけれど、いつの間にか製材所に變つた。つひ三四年前まで、河内屋だけは殘つて居たけれど、之も大阪へ引移つた。あすこには美しいお祖母樣がいらつしたが、死んだのかしら？私はいつも此んな事を思ふ、かうして青葉時に此んな事思ふのが大好きだ。前の製材所でプウ〳〵と笛が鳴つた。五日の月がポンノリと吉野の小天上の上に出た、魚釣る人もうすくなつた。

（評）年齒相應の女の心持が能く出て居る、習つて上手になつたのでなく、持つて生れて文章がうまいと云ふやうな處もある、其前途や奈何。

○待つ間

府下　竹内夏子

姉さんが男の兒を生んでから、今日で十日目にもなるのに、姉さんの家に宿つて、お母さんは些も歸つて來ない。

早く赤兒の顔が見度いが、行く事も出來ない、父や兄は七時になると役所に行つて仕舞ふ故まさか家を空虚にして……と思ふともう心が焦焦してくる、涙がホロリと落ちる。時計は頻さゝ午後二時を打つたが、まだ歸つて來ない。ガラーンと裏木戸が開く音がした。アラ！嬉しいお母さん!!!と思ふて障子を開けて見ると郵便屋さんだ。私はがつかりして受取る勇氣も出ない。ぐつたりした軀を文机に折り俯して居ると、微かな肉體の微動——私の名を呼ぶ、私はウツトリした眼を開くと何時の間にかお母さんが歸つて來て、私の側に座つて笑つて居る。私は知らずく寐入つたのであつた。

表の通で豆腐屋のラツパの音がゆるやかな小春の夕暮の空を透して沈んで行く。私は晝寐を見付かつて恥かしいので窓にもたれて通を眺めると、人の影は長く東の方へひく、太陽は向ふの森に半分許美しい顔を埋め掛て名殘を惜んで居る。前の畑の中にあるお秀さんの家より、晩餉の仕度でしよう、くづれ懸つた、茅葺家根より一ト筋絲の樣に黑ずんだ畑が靄の中につて行く。

○紅薔薇

總子

胸のすく樣な美しい夕空をながめて、書物から眼をはなしてゐた時、母樣は紅い可愛らしいばらの植木をかゝへて、私の側までこられた。見よとてか、けれど、私は薔薇を好きません「お母樣私ばらはいや」といひたかつたけれで、せつかく、もつて來て下さつたものをと、だまつてしまつた。あとで、母樣が去られてから、そつと一つ花をもぎとつた、顔のそばまでよせたけれど、急ににくらしくなつてなげすてゝしまつた、手はふるへ花は散つた。あゝとげある薔薇よ、おまへの樣な人がどのくらゐあるだらう？……。

（評）紙の端へ小さく『原稿紙』と書いたのが、ほんとうに初作を意味してゐる。

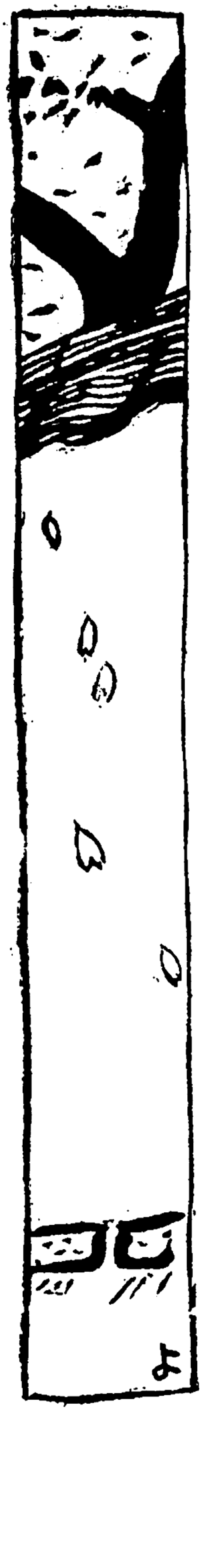
○四月十五日

燕子花

朝は冷々して風を引きさうなので羽織を着たら重くて仕方がない、本でも見樣かなと思ひながら、机の前に坐ると、姉樣これから藤見にお出掛なさらうと云ふ、私も行きたいわと云ふ、では一所に行きましようと仰有つたけれど、知らぬお友達の方が大勢行くので、まあ今日はよしに仕樣。私は何故此樣だらう、知らない人の大勢居る處へは決していつた事が無い、其くせ行きたいのだけれど——姉樣のお出掛を見樣と、玄關へいつたら、まあ—半紙半分へ大きくハイカラの大先生ノ書いたのを背へ張り付けられて、それでも姉樣知らずに澄していらつしやる。私は思はず吹出してしまつた、走り寄つて取つて上げたら、姉樣もまあ—つてびつくり、屹と兄樣のいたづらだ、もし私が見無かつたら、姉樣は飛んだ恥かく處だつたのに、まあ良かつた。兄樣は時々此樣な眞似をしては皆の困るのを見て、一人でにこくしていらつしやる、そして又惡口云ふ事も中々遠者な者だ、學校でも評判だと云ふ。私も惡口では人には劣らない方だが、とても兄樣の三分の一にも及ばない、夜雨先生に比べたら丁度弟分位でしよう、兄樣の病氣を伺つたら、最早全快も近きに有りつて仰有たから、嬉しい。私が毎朝神樣にお祈りするのですもの、と申したら兄樣、有難うとわき向いた御顔に露がキラリ、早く兄樣の制服制帽の姿が見たい。

（評）これは小さな方のハイカラではありませんか。

八月號には初作十篇以上を掲載すべし



誌友くらぶ

交　際

○廣島縣深安郡神邊の里　兒玉喜美子

▲瀬戸内海の磯邊より　おなつかしい誌友の御姉上樣方、私は本年三月近地方の某女學校へ通つて居たものです、文壇は二年餘り以前から愛讀しておますのよ、けど是迄投書もいたしませず、又御姉上樣方とお親しく御交際を申し上げませんでしたのだけど、以來はどうか御見捨なく幾久しく繪はがきや、御玉章の御交換お願いたします。

○下谷區仲徒士町三丁目三九東保方　香妻美佐子

▲觀螢　妾は數年前の愛讀者でありました、が一時家事の都合上で止むなく皆樣の御艶麗な筆を見ませんで居ましたが、此度二度と皆樣の御文筆を拜見する樣になりました、それで妾も廻らぬ筆ですが、何方ですかの句の「下手は下手に觀螢も初音かな」に就いて出來る限り書いて見る積りですから何卒ぞ誌友の諸姉樣宜しく御交際を願ひます、畫繪書……結構ですワ、御待ち申して居ります。

○朝鮮京義線開城驛官舍一號ノ二　今村ふさ子

▲朝鮮より　妾今年とつて十八歳と成りました父さん母さんには幼少の時分に死に分れすると間もなくたよりと思ふ妹には死に別れ今では此の朝鮮の片田舍で女子文壇を見て每日淋い日を兄上樣と二人で暮して居ります可憐と思ふ御方があれば名所エハガキや玉章を頂戴ね御禮には妾しの見苦しき寫眞と朝鮮の名所エガハキを御送り致します。

○神戸市兵庫濱崎通一丁目二ノ一三　田中落葉子

▲夏やすみ　皆樣如何お暮し遊ばして? 綠の天地には強烈な光がふりそゝいで見るからに身も心もいらだたしくなつて、狂ひだしさうでござゐますね、皆樣ことに御面倒で恐れ入りますが大阪の都會詩社の事につきまして御存じならば、所在だけでもようござゐますから一寸知らせ下さいませ。御願ひ致します、八月は休暇で自宅に居ますからお近くの方はお遊びにお越し下さいましおまち申して居ます。

○三重縣桑名郡七取村大字香取　伊藤香洋子

▲親なき身　本誌の諸姉君よ妾は二月號よりの愛讀者で在ります、妾は兩親を失ひ今は親類の家に預けられて居るあはれな身の上で在ります、空の色や野山の色の變り易きを見るに付け我身の變りたるを思ひ出し、淋しくも其日くを送つて居ります、同情ある諸姉よ、妾の胸中をおさつしください、御交際被下いませお願ひ申上ます。

○美作國苫田郡奥津村　水田邦子

▲永久に　私は誠に不束な無學女でござゐますから、とても貴嬢樣方と御交際なんか……と思つてもたまらなくて、逐々三月號でお願ひ致しました所がまあ意外にも多數お交り下さつたので無上に喜こんで居りましたら、僅か二三回位で大抵音信不通となつて了つたので、今は

う悲しくてかなしくて、自分の無學をなげいておりますよ、何うぞ永く交つて下さい。

○　播磨姫路市綿町七〇　田村みどり

▲學校の繪葉書　お懐しき誌友の皆樣に御願ひ致します、私昨年より、學校の繪葉書を集めて居りますが、なかなか集りません、何とぞ諸姉樣の内に、學校の繪葉書お持ちで御座いましたら、どんなのでもよろしいお送り下さいませんか、御禮には當地及舞子明石の繪端書を以て致します。

○　大阪東區絲屋町松屋町北入　田野靜子

▲其後は　久しく御無沙汰いたしましたが、記者樣誌友の皆々樣御變りは御座いませんか、御伺ひいたします、毎號諸孃の御たつしやな御筆私うらやましいのですくくふるつて他雜誌に負けない樣にして下さいね、私もかげながら力をいれて居ます、又名所ゑはがき交換を願ひます。

○　美作久米郡　愛讀女

▲誌友會　の記事を拜見致しまして遠くそのお集りを羨んだに過ぎませんでした、御寫眞も嬉しく御座いました皆私等には姉樣の樣な方です私はよい姉樣が澤山あつて嬉しいと思ひます美作の方なんだか拜見するのでもなつかしう御座います、しつかりおやり遊ばせ。

○　東京神田淡路町二の七　川岡直

▲繪葉書　誌友諸姉樣、ほんとに月日の立つのは早い事ね、私が出京した時は、ほんにちいさな子供でありましたのに、もう六年目の今は諸姉樣方より繪葉書を頂戴する事が出來る樣になりました、私は繪葉書が大好きよ、ですから皆樣送つて頂戴な、御禮として必ず相當な繪葉書を御返へし致します。

○　神戸市　みづくさ

▲引込主義の方　神戸の方はみな引込主義よ歲も行かないからとか投書もしないのにとか嫌樣振つて居るのでしようけどつまり冷淡ね私あんなのは大きらひよ、いくら値ない投書でも記者樣の机に上つたらそれで結構天賞を取る方の前に座しても平氣で話すのが大好よ。（他國の女から）

○　本所横綱町二の一五龜井方　津田筑秋

▲琵琶同好者　筑前琵琶御好み遊ばす皆樣御交際下さいましな私初號よりの愛讀者ですのよ

○　朝鮮黃海道汗浦鐵道官舍　不二山靜子

▲朝鮮の田舍より　私は淋しい朝鮮の片田舍に住んで居ます誠に不束者で御座います、常々女子文壇を愛しまして母國のことも知り寂さを慰めて居ますのよ、皆樣どうぞ御交際下さいませ、又御座いましたら繪ハガキの交換もいたします、朝鮮の風景や人物の繪ハガキも澤山御座います。

○　北海道上川郡旭川町　小林初子

▲北海より　私今月の女子文壇第百號紀念増刊を拜讀致しまして面白く感じました、以後皆樣同樣に愛讀者となりそれと共に諸姉樣親しく御交際をお願ひ致します。

○　東京市日本橋區松島町三十五番地　加曾利あや

▲おなつかしき　誌上のお姉上樣何卒ね幾久しくお手紙の御交際並品の御交換をして下さいな。私からも地方のお姉上樣には東京で珍らしき品何んでもお送りします。

○　三重縣松坂町新座町十八番屋敷　村田英子

▲昨秋より　目煩ひのため皆樣へ御無沙汰しました御許し下さい、御蔭樣で昨今は全治致しました、相變ず愛讀者の中間入を致しました、どうぞ皆樣方皆に倍しゑはがき、新聞、名刺、レターの交換願ひます、一度ゑはがき下された御方も一度御所しらせて頂戴。

○　北海道旭川町師團小射擊場内官舍　後藤もとお

▲みな樣　の御中で雜誌の口繪でも何でもかまひませぬから三色版又は水彩畫の木版などが御不用の方ありましたら幾枚でも宜しいから御送り下さいませぬか、五枚以上御送りの方には北海道の雪げしき又はアイヌの繪葉書數枚に澤山の外國切手をそへて御返禮申上ます。但し五枚以下の方でも御望の方にははがきの外に切手を御上げ致しますよ、なるべくいたまぬ樣に御送付を願ます。多ければ多いほど嬉しいわ。

○　淡路野島村八七　國分光枝

▲歌● 誌友の諸姉様どうか自作の歌を画冊に書いて御恵み下さいませネ、そしたら淡路名所繪葉書差上ますから、長崎の坂梨さま如何なすって！

○下野今市小倉の里　瀧　子

▲お詫●● 御手紙下さいました姉様方あまり澤山、所々方々より御葉書が参りましたものですから、自分は充分注意を致して居りますが、もしまちがつて同じ繪葉書を二度出さないとも限りません故、か様な場合がもし有りましたなら何卒御情深き御心持もて幾重にも許して下さいませ、私眾大好なのよ皆々様交換して頂戴ね

○茨城縣那珂郡村松村大字村松　田口愛子

▲シスターのように●●●●●●● 本縣の誌友の諸姉様方に、妾は昨年九月からの本誌愛讀者なのです何卒自後レターの御交際を願ます、さらば。

○越後刈羽郡下宿村圓王寺様方　浪　子

▲父に別れて●●●●● 私はこの程慈愛深かりし父に死別れまして……その爲毎日悲しい〳〵思ひに沈んで居ります。この誌友の皆様のお中にも定めし父君にはやくお別れなされて身の薄幸に朝夕涙のかわく暇なきお方も御座いませうが私はさういふお方々の熱烈なるレターが頂きたう御座います。

○鹿兒島市長田町十七　山下ゆたか子

▲再び●● 私は今度御發行の紀念號から又更に愛讀者の一人となりました皆様どうぞ末ながく御交際を願ひます、なほ又繪葉書や寫眞の交換をいたします、記者様におたづねいたします地方の風景寫眞送りましたらのせて下さいますか御伺ひ申上ます。（記者曰く載せます）

○安房北條八幡　佐藤信子

▲病中●● 誌友の皆様私は一月〳〵に本誌の進んで行くのをうれしく存じます皆記者様を始め皆様のおかげといつもうれしく存じて居ります私は淋しい〳〵八幡で病の身を養なつて居りますの皆様淋しい私をなぐさめて頂だいなレターで。

金星草の根

ヒトツハ（石葦）の一種で背面に黄斑あるもの、竹藪の中とか背陰石上の淨い處に生へる石草で金星草又は七星草、鳳尾草と申しますが、根は丁度竹根に似て居るその根が欲いのです、誰方かの竹林又は庭隅に生へては居ますまいか、あつたら五六株頂きたいのです。

東京牛込東五軒町六　藤波英爷

○鳥取にて　岸本八重子

▲おわび●●● 去る先月の本誌で求交いたしましたところ、たくさん御手紙下さいました皆様に御返事いたさなければなりませんが去る二月五日に姉が死去いたしましてもゝの取込みやら引きつづき私の病氣で皆様に御返事差上る事もできませんので本誌を以て御ことわり申ます、皆様何卒〳〵惡からず御許しを願上ます。

○京都烏丸通三十四銀行支店内　英　清子

▲事務員●●● 幸福なる皆様達よ妾は事情がありまして事務員をして居ります のはほんとに私程不幸な者はありませんは皆様達が羨ましくてなりませんは何卒皆様達の幸福を文筆にてお分ちくださいなお願ひ申します。

○山口縣阿武郡萩町八丁　松尾しづか

▲山口縣の愛讀者諸姉様●●●●●●●●● 私昨年の一月よりの愛讀者ですが今月五月號のクラブに本縣の方の御芳名が割合に多かつたので何より嬉しう御座いますわ。どうぞ以後もねえどし〳〵投書して盛んにしようじやありませんか。

○大分縣豐後國東國東郡西安岐村字瀬戸田實際寺の西　今村一子

▲お聞き下さい●●●●●● 世の中に私程いんがなものがありませうか父には早く死に別かれたよりすくない母様と只二人淋しく月日を送り父女子文壇を見て氣をなぐさめて居るのよ妾をふびんと思ひて下さる御方は玉章ヤヱハガキの交換を松の緑りの末長くして下さい御願ひ致します。

○左の諸嬢からも交際を求めておられます。本文を載せる餘地がありませんから、住所姓名だけ掲げて置きます。

○宮城縣伊豆郡角田町中町、目黒ます子
○群馬縣群馬郡箕輪村、長島露子
○東京々橋區三十間堀一ノ三小宮樣方、秋子
○熊本市新屋敷町四三九、水の花
○岐阜縣武儀郡西武藝村岩佐、山田匡子
○和歌山縣新宮町、深田眞寸美
○横濱南太田日ノ坂鈴木方、栗花
○神戸市再度筋三十九ノ四十一、山本琴子
○三重縣桑名町宮道嵯峨平六方、加藤おつい
○愛知縣碧海郡立差村坂左右、大竹靜子
○福島縣耶麻郡鹽川寺町、北村かね子
○高知縣土佐郡本川村高藪、山中春子
○下關市細江畔、木本蘭子
○東京市下谷區入谷竹百二十二、島翠花
○岡山縣淺口郡鴨方、筒井松子
○尾道市海岸、岩崎默花
○奈良縣吉野郡上龍門村大熊、與熊せい子
○茨城縣新治郡牛渡村、高崎すみ子
○栃木縣上都賀郡今市町小倉町渡邊定吉方
森　雪子
○東京牛込早稲田南町四〇竹内方、西村しのぶ
○長崎市大音寺籠町三七、奥田よし子
○山口縣都濃郡戸田村、河津さい子
○伯耆米子町、淺井八重子
○靜岡縣榛原郡吉田村片岡、佐藤つね
○後志國磯谷郡昆布、宮川温泉内、淡月子

書籍交換

○　群馬縣群馬郡京ヶ島村京目
中島登代子

△讀みたい書「一葉全集」「紅葉全集」「思出の記」「自然と人生」「金色夜叉」「やどり木」「美文作法」「朝ばれ」

▲持てゐる書。「少女界」「少女世界」「本誌」「女學世界」「婦人世界」上毛名勝繪葉書の中お好の品をいさゝか御禮のしるしに差上ます。

○　大阪市西道頓堀通二小泉内
貞　子

△皆樣の内で古い本誌をお持ちの方、姿の新らしい、本誌、女學世界、婦人世界、其他の婦人雜誌、小說類とお取りかへ下さいませんか、私增刊の都會の婦人、今の婦人がほしいんですのどなたか御交換下さいな。

○　岐阜市縣町　篠田葛の葉

私は各種の新聞を望むのです、皆樣の中思召し下さる方は下名へ一二部でよろしいから御送り下さい、もう三四十種集りましたが而し新愛知と名古屋新聞はうちにあります。御禮には左文字を書いて上げます下手だけれど。

○　群馬縣鬼石町相生町九二
新井ツヤ子

▲持ってゐる書物。私の手許に夢二畫集春の巻和歌作法指南、小品文範、小品文集審、近世五百題俳句集等あり。

△讀みたい書物。夢二畫集秋と夏、旅の巻、花の巻、與謝野鐵幹毒草、島崎藤村なつくさ等と御交換を願ひます。御早い御方には特に私の寫眞を附して送ります。

○　下谷區仲徒士町三ノ三十九
東保方　吾妻美佐子

▲持って居る書物。「和歌入門」「常夏」「女子文壇」「婦人世界」「婦女界」「夏子」「春」「不如歸」「一葉全集」「己が罪」「鎖花集」

▲讀みたい書。「紅葉全集ノ一」「筆子」「眉山全集」「女學世界」

○　宇都宮市今泉町
松井重子

△讀みたい本。晶子先生の舞姫の外の歌集。夕暮、牧水先生等の歌集。

▲持ってゐる本。「日本の將來」「賴朝」「赤心一片」「諸作文書」「古物語」其外數百千巻あり葉書にて……後をとりかへを乞へます。

○　岡山縣吉備郡庭瀨驛前
野崎芳野

▲皆樣の內で夢二畫集か大笑百話どちらにても宜しき故私の女夫波と御交換下さいっ

○　名古屋　登貴靜子

▲持ってゐる書。やどり木(柳川春葉作)寒菊上下(小栗風葉作)人の母(中村春雨作)虚榮の令孃たぬき寺、短編小說傑作集、姫樣お辰上下(廣津柳浪作)など。

右不用書を持て居りますからヴアイヲリンの譜と御交換下さいませんか、お琴のものでも長唄ものでも何んでもよろしう御座いますから、もし御交換下さいます御思召のお有りの方は誌上にて御住所を御きかせ下さいまし、直接に手紙差上げますから。

○　京都市楊梅通烏丸東
天井　眞

▲持ってゐる書物。「女學世界」昨年六月號「婦人くらぶ」昨年十月號「今日庵月報」第一巻二號より十二號まで其他の雜誌。

▲讀みたい書物。「寒潮」「行雲流水」「明笛獨習

書」
右御送り下された方には右の雑誌又は繪葉書にて御返しいたします。

○　下總千葉町市場佐久間方
秋　月　子

▲持てゐる書物。「演藝畫報」「女學世界」「婦人世界」「日本少年」「冒險世界」「家庭日常の實驗」其他二三種あり。
△讀みたい書物。「一巻一號よりの少女界」「新體詩の本」「乙女の秘密日記」「夢二畫集」

○　大阪西區新町通り四丁目二六一番屋敷
岡　本　千　鳥　子

▲持つてゐる書物。金色夜叉(全部)後の不如歸、己が罪、戀と戀、ヤドリ木其他、美文の資料、千山萬水、造花觸れいこ、婦人世界、女學世界、女子文壇等の古雜誌各廿冊づゝ。
△讀みたい書物。夢二畫集(秋の巻)晶子先生の歌集、紅葉全集、其他御不用の書物と御交換御願ひ致します前以つて御一報を。

○　愛媛縣宇和島裡町四丁目
菊池藤太内　章　　花

▲所有書籍。小説藤村集、蘆子小品、禮式と作法、實用珠算教科書、英和新會話、新選英文雛句集、ナショナル第一リーダー獨案内、表說日本歴史下、光榮ある人生の春(女學世界増刊)
△求める分。二十八人集、花袋集第一、花守、太田三郎の雜誌口繪。

○　伊豫別子銅山通り高籔區内
山　中　春　子

▲持つてる書物。秀才文壇、文章世界、女學世界、今の婦人、都會の婦人、一葉全集、孝女白菊、女子のふみ、美文作法。
△讀みたき書物。露子夫人、夢二畫集花の巻、小柳富代、ハイカラ令孃、地方の婦人、乙女の秘密日記、不如歸、ハムレツト、やどり木。

○　茨城縣筑波郡作岡村
池　田　百　合　子

▲皆様の内裁縫教科書及編物の本御持の方少しの間御貸し下さい。お禮には女子文壇、ムラサキ、女學世界、婦人世界、中學世界、少女世界少女の友、少女等へ當地のエハギキそへて御返し致します。

○　京都府乙訓郡久世村上久世
風　間　榮　子

△讀みたい書物。言海、金色夜叉、花つみ日記、落日。
▲持つてゐる書物。常山紀談、今昔物語、駿臺雜話、女子美文筆の花、衛生評釋、百人一首。

○　朝鮮京城旭町三丁目七十七番戸
加藤清晃樣方　玉　邦　子

△讀みたい物。肉彈、殘花一輪、樗牛全集第四輯、中學講義錄(何會發行にてもよし)文章講義錄、其外手製い菜など。
▲持つてる物。英和辭典、靈界の偉人、日蓮(浪六著)日蓮上人(坂本箕山著)同言行錄(大屋德城著)加藤清正(小泉要智著)不如歸、新造軍艦、東洋武俠團、哲學汎論、砲煙彈雨の日誌、夜叉の首、美文辭典、美文の資料三種、その外に朝鮮風俗風景繪葉書、同寫眞帖、東宮殿下御渡航紀念。

○　福岡縣福岡市西職人町七た
神代方　美　伊　子

▲申しかねますが皆様の中で一葉全集御不用の方は暫時拜借願ひませんでせうか、失禮ですが御禮はたがはず致します。

○　信濃國西筑摩郡上松町
千　村　桂　子

▲持つてる書物。藤村詩集、二十八宿、花守、新體詩入門、新體詩作法、春(藤村著)、二家族、一葉全集、言海、エルテル(久保先生譯)、新選俳句集、女夫波の詩、眉山全集、藤村集、其他いろ〳〵あります。
△讀みたい物。夢二畫集(何の巻にてもよろしう御座います)殘花一輪、寄生木、寫眞集、畫集、名勝繪葉書等と御交換願ひたし御交換下さる御方は御一報下さい。

○　山口縣柳井町山本庄作方
狂　樂　生

▲私は轉地療養中ですが大の音樂狂で又女子文壇を何よりの慰籍として居ます それで御情深い諸姉君もヴアイオリン曲や箏曲を送つて下さいましたら私も澤山音樂書を持つて居ますから美しい繪葉書をそへて御禮致します。

○　門司市扇町彌吉方
萩　野　英　子

△讀みたい書物。與謝野晶子著企泥集、與謝野寬著相聞、其他新派歌集御所持の方は左記書籍と交換又は四五日の間御貸與給はり度し。
▲所持せる書物。藤、旅すがた、二十八宿、花守日記、花守、覺めたる歌、春駒、戀ごろも、白すみれ、舞姫、萬葉集、藤村集、玉かつら、草笛、以下寫本、佐保姫、舞姫、夢の華、みだれ髮、收穫、わがおもひ、酒ほがひ。

○
和歌山市廣瀨通り三ノ二
愚地樣方　水島あさ

▲持つてゐる書、寫眞畫報十冊、大英遊記、近松世話浄瑠璃集、緑葉集、女子美文眞材、美文大觀、日記文作法、文章講義録、和か古の山姉美、外相夫人、仕合者、其他種々。
△讀みたきもの。透谷全集、即興詩人下、巡禮紀行、春、破戒、其他詩歌歴史もの等御望みの方は御一報を願ひます。

○
三重縣一志郡久居町
岩成美枝子

▲誌友の皆樣私は寂しき伊勢の片ほとりに住む一少女で御座います諸姉樣の内に種々の雜誌や小説御持ちの方は女學世界、少女世界、かりのゆきかひ、女禮女大全文は種々のあみ物等と交かんして下さいませ。

○
秋田縣雄勝郡湯澤大町
小川篤香子

△讀みたい書物。己が罪の前編、後編、黄菊白菊、右お貸し下されし方には繪はがき添へてお返し致します。

記者より

▲篠田とみ子。早川花子。佐藤しづ子。前島優梨子。鈴木春子。金田よし枝。岩本とよ子。横山愛子。榊原けい子。以上の方々から賞品の御禮正に拜見いたしました序に申しますが賞品は四月號まで發送濟みになりました。▲川越町の絲柳さんに佐々木信綱先生の御住居は神田區小川町の一番地です▲堺、鈴木喜代さんに投稿は凡て一つの狀袋へ入れて差支ありません▲淡海、操子さんに、お尋ねの件は今少しあかしかねます▲神奈川、しうん子、千代子さんに御提出のことは御尤もです初學者の爲に文學問答と云ふやうな欄を設いて宜じければ置きます外の皆樣は如何でせう▲熊本、初枝さんに初作は冷書になつた場合は二度でも三度でもお出しになつて宜しい▲六月號の俳句天賞島根のなつ子作は剽竊と分りました、お知らせ下さつた方にお禮申します（以上記者）

個人消息

○春ふかう青葉繁る頃となりました、記者御一同樣御變りなくつて結構と存じますさて私事此度歸國いたし上京する事になりました何卒よろしく御願ひ申します次に女子職業學校の安藤千枝子樣女子商業學校の上村きよ子樣の御住所御存知のお方は何卒御しらせ下さいまし御願ひだわ（芝區神明町廿五岡方、中津江天流子）○本誌六月號の初作欄に母を失ひし友へと題して淺草千枝子とあるを見ました若しや桑原千枝子さんじやなくつて私は以前に變らぬ天地に居ますのです御覧になつたら御手紙なり被下い……誠に御懷う御座います（新潟縣あき子より）○靜江樣私こそ誠にく〳〵失禮申上げましたかげながら御目に懸り度くて空にお姿描いたこともよく御ざいました、自分の不才を思へば御目もじ願はれる處では御在ませんのですけれど……早川樣に御前に連れてつて頂きました時はどんなに嬉しう御在ましたでせう、始めて御目に懸りましたのに失禮許り致しました何卒御免し下さいませ（小石川にて、恒）○山陰の雪子樣へ、六月發行の本誌にて本誌五年十號を求めましたら早速御送呈下さいまして有難うございます、就ては何か御禮致したうございますが何卒住所姓名を御知らせ下さい（上毛新田郡木崎町、野の花）○東京の雪輪樣、昨春二月第一增刊若き婦人に「迷ひすぎて婚期を逸したる政治家のお孃さん」と題して假の名久須美とき子樣の事をお書きになりましたあの方は春相賀夫人となられて去月二十八日米領ハワイへ御出立なさいましたから御安心遊せ（淡海操子）○内藤千代子樣おなつかしい千代子樣、私うれしうてく〳〵なりませんわ、だつてねー、六月號の女子文壇を見ようと思つていづもの店へ立つたのよ、そして逸早く目錄へ目を通すと、ま、おてんば日記内藤千代子——とあつた時は私うれしく〳〵つて、ひつたくる樣に取て何より先きに讀で了ひました、ほんとにいつもながらの御才筆……どうぞ之から女子文壇へどし〳〵載せて下さいませお願申ます（深川、うめ子）○横濱の千鶴子樣ってどなたですの、御姓名御知らせ下さいな、私もちづ子同名でおなつかしう存じますわ、以後は御交際を……（高知市帶屋町七九、西本ちづ子）○王子の高木嬉百合姉樣私も本誌の愛讀者となりましたの御交り遊ばして頂戴な誌上でもね（王子町、大瀧百合香）○東京小石川の中山千代子樣御伺ひ致します前號にて御遠承知いたしましたから早々御伺いたしましたところ封緘付で歸つてまゐりました御住所御變りになりましたの何卒誌上にて御處御きかせ下さいませんかきつと御伺ひいたしますから（德島、白菊女）

雜報

婦人界

婦人界には報導する程の新しいこともありませんでした。事實や、出來事はありませんけれど、漠然とした所謂婦人問題、それは矢張方々の新聞雜誌に盛んでした。併し多くは空疎な議論ばかりで、若き婦人逹の内部生活にも、外部生活にも緊切に觸れたやうな說も見當りませんでした。妻となつたら斯うせよ、母となつたら斯うせよと云ふやうな注文は、大抵分つてゐるやうに思ひます。それよりも差當り今の時代に觸れた女、卽ち分つてゐる女が、苦んだり、まちがつたり、迷つたりしてゐるのを、何うかすることは出來ないでせうか。婦人と云ふ性の上から來る問題ばかりでなく、性を問はないで人間と云ふ上から起つて來る問題を捉へるやうにならねばなりません。それらの女の爲に行くべき途が少しも開かれてゐませんもの、少しでも思想的に傾いた女は、皆世の中と融合しかねて困つてゐます、是は誰れにも不完全な處があるからだらうと思ひます、いつも後にばかりなつてゐる婦人の爲には結構な世の中ですけれど少しでも進まうとするものには、あんまり結構な世の中とも云へません、是は何うかしなければならぬことでせう。

文學界

文學界にも此一ヶ月は何等の目覺ましい事はありませんでした。例に依りて記者は手當り次第に四五の文學雜誌を見ました、其中で最も深い印象を與へられたのは田山花袋氏の『死の方へ』(中央公論)と云ふ小說でした、恐らく六月の創作中で一番だらうと思ひます。えらくもない變つてもゐない、世間通例の人間が死の方へ行く心持と、其周圍とが有りの儘に再現されてゐたのを嬉しく思ひました、而かも充實した內容を持つてゐました。藤村氏の『母』(文章世界)も讀みましたけれど、此作は未だ描寫の方法があらうと思ひました。鏡花氏の『池』(太陽)は吉原の火事を描いたもので、空想の自由に嘆服しました。同雜誌の『中學生』といふ懸賞當選の小說も注意を拂ふ價値があります。『三田文學』は創作も評論も皆好きでした。

それから書物では北原白秋氏の『思ひ出』と人見東明氏の『夜の舞踏』が出ました、二つ共なつかしい詩集です、眞面目な作品として生命の長いものです。評論はあまり見ませんでしたが、『早稻田文學』の昇曙夢氏のアンドレフ評論は興味がありました、飜譯では鷗外先生の『世界一週』(帝國文學)を面白く讀みました。

世の中

五月から六月へかけての世間は、靜かな時のやうに思ひます。勿論不意の出來事は仕方がないそれもないやうでしたから、春行つて、夏來る世の中は極めて靜かでした、七月も八月も東京はいよ〳〵鎭靜して、人は山を想ひ、海を想ふ時です。田植や養蠶を終つた田舍も亦夏は一年中最もきまつた動きをする時でせう。今は東京の祭月とて、五月雨のしめやかに降る中に、屋臺の囃子が人の心をそゝるやうに巷に響いてゐます。

○二つの音樂講習會　▲神田錦町三丁目の日本音樂協會では、音樂教師志望其他の爲め八月一日より三週間音樂各科の夏期講習會を開く、會場は同所、時間は午前中、講習料は一科目金一圓五十錢二科目以上一圓增し、▲神田今川小路二丁目の東京音樂院でも同じ日限に同じやうな講習會がある、以上何れも申込は七月卅日迄。

誌友の噂

△函館の工藤さんと云ふ方から、同地に生える鈴蘭の花を澤山小包郵便で送つて下さいました鈴蘭の花は香が高うございますね、室內に花の香が漂ふやうです。

△大阪の誌友會にも見えた木田ちよ子さんが上京しておたづね下さいました、牧野竹子さんの御近況なども承りました。

△橫濱の小田切錦子さんは、鄕里佐渡へ渡つてあかさんをお產みになつた、女の子さんです。

△京都の橫田夫人は目下大連に居られます。

△平塚白百合さんは本鄕に轉居された。

△鳥取の鈴木はる子さんは大阪に赴かれた筈です、多分然うだらうと思ひます。

△仙臺の野村京子さんは暫く不快であつたがもはや全快されたでせう。

△信濃の太田喜志子さんが上京された。

編輯通信

『新文章』の作家

來る十五日に發行する女子文壇增刊『新文章』には、誌友の腕利は大抵出ます。服部貞子、松田梅子、岡妙子、木村あやの、田中落葉、山田邦子、鈴木春子、夕ほし、內藤千代子、長曾我部菊子、前島優梨子、若杉けま子、佐藤萬壽子、太田喜志子、河野楨子、重子、小笠原貞子、月雖子、松村らく子、高橋りう子、加藤筆子、平塚白百合、松亟蒸花、江森美子、野村きやう子、三島葭子、小川夢の女、早川花子、八代やゑ子、田中落葉子、篠田とみ子、佐分華影などが主なる方ですが、其以外に彗星のやうに現れて來た名手が二三人あります。さうして以上の方の作物は大抵出ますが、大半は皆匿名や變名を用ゐてありますから、作を見て判斷なさるより外はないのです。

八月號木版口繪　中澤弘光先生筆

八月の本誌

八月は一年中最も暑い時です、それで涼しい雜誌と云ふものもありませんが鬼に角時節柄あまり堅くるしいものを避けて、面白い興味の多い讀み物を澤山揭げるつもりです。また清新自然の描寫などを載せたいと思つてをます、聊か普通號とは趣の變つたものが出來るでせう、既にある一つの問題に就て、材料を蒐めてをます。

○女子文壇定期號投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること▲小說と、詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類每に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る、長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は每月十五日到着を以て嚴に締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し二頁以內の短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す。

▼女子文壇定價早見表

每月一日發刊、年四回增刊

冊數	定價前金	郵税	合計
一冊（一月分）	拾五錢	壹錢五厘	拾六錢五厘
三冊（三月分）	四十三錢五厘	四錢五厘	四拾八錢
六冊（半年分）	八拾四錢	九錢	九拾參錢
十二冊（壹年分）	一圓五十六錢	拾八錢	壹圓七十四錢

定期及增刊號とも	定價前金	郵税	合計
增刊一冊	貳拾錢	壹錢五厘	貳拾一錢五厘
半年分（八冊）	一圓三十二錢	拾貳錢	壹圓三十四錢
壹年分（十六冊）	二圓二十八錢	貳拾四錢	貳圓五拾二錢

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず右誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと。用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます。郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增のこと（收入印紙謝絕）。最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告揭載料

申込期限　發行前月十五日

壹等　一頁參拾圓　（半頁廿四字三十二行）
貳等　一頁貳拾五圓
參等　一頁貳拾參圓　半頁十三圓　一行四拾錢　（一行五號字二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。弘報堂。文明廣告社

明治四十四年六月二十五日印刷納本
明治四十四年七月一日七年第八號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
發行所　女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替貯金口座壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂其外全國書店

婦人の夏養生

▲御婦人は一般夏季に於て衛生を重ぜねばなりませぬが、殊に梅雨あがりの五六日から暑さが加つて來る。此季節が最も注意を要する時です、此頃の氣候は一定して居ませんから、昨日非常に暑かつたと云ふので、厚い蒲團を藏ふと、翌日俄かに冷えるので、折角藏つた蒲團を、復出すのも面倒だなどゝいつて、薄蒲團のまゝで寢たりすると、身體は冷えます、此冷えるといふ事は、御婦人の禁物で、婦人病の起る原因となるのですから、斯ういふ時には、鎭火保溫の効ある中將湯を飲で腹中から溫める事が肝要です。

▲斯くて暑が進んで來ますと誰しも氣分も重々しく、食事も甘くなく、果物や氷などばかり食べて居たい樣な氣になる、而して不知不識、御飯の數を減らして、果物の方を多く食べる、これは夏分は凡て身體の五臟が其活動の力を緩め、冬の樣に働きませんので、自然斯かる狀態になるのでありますが、此場合に於ては調中催食の効を有つて居る處の中將湯を御上りになれば惡心も止み、食欲も增進し、健康は保全されます。

▲婦人は殊に冬は足の裏が冷えて、夏になつてから燃る樣に熱くなるものです、之は心臟の惡い人又は身體が弱く出來て居る人杯にもありますが、子宮に故障のある人に殊に多い、つまり之は血液の循環が調和を缺くためでありますが、婦人は男子と違つて骨盤內で澤山の血を藏して居りますから、子宮に故障ある時は足の裏などまで思ふ樣に新鮮な血が送られません、それは足の裏に靜脈の返へり來るべき血が停止して彼の樣にほとるのですから順血補心の効ある中將湯を御上りになれば子宮の故障も治り血液の循環は好くなつて、斯の如き容態は自然消滅します。

▲以上は夏季に於ける一般御婦人の注意すべき數點を述べましたが、平生左に掲ぐる容態にて御困りの方は、此際特に中將湯の服用が肝要です。

▲ヒステリーで頭が重く、氣がふさぎ、些細の事が氣にかゝり、過去の事や取越苦勞をするやうな婦人白帶赤帶にて顏色は常に青く活氣に乏しい婦人、年頃になつて月のものを見ないとか、たとへあつても、時期一定せず、其量に多少ある婦人、月經時に苦痛を覺える婦人、惡阻にて營養分を攝取する事が出來ない爲に、身體の衰弱する婦人其他腰足が引釣痛み又胸先へ差込だり、目が眩んだり、耳が鳴つたり、肩が凝たり、顏がほてつたりする婦人、產後日立ちが惡しき婦人等は皆中將湯の服用が肝要です。